ヴァンパイア・キス

藤藤キハチ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ヴァンパイア・キス

【Ｎコード】
Ｎ５２８０Ｔ

【作者名】
藤藤キハチ

【あらすじ】
神田有希はごくごく普通の男子高校生。今までもこれからも、ずっと普通だと思っていた。鬼に似た魔物に襲われるまでは…。有希が狙われるのはなぜなのか。それが明かされたとき、思いもよらない事実を告げられる！

闇の胎動1

「捨てるのか？」
暗闇から突然かかった声に、男の肩が跳ねた。ゆっくりと振り向いた彼は、寄せた眉根のあたりに苦い思いを滲ませている。それは誰が見ても手に取るようにわかるほどだった。
噛み締めるように、しかし、短く答える。
「悪いか」
「否定しないのか。アンタらしいね」
おかしそうにけらけらと笑う声が部屋に小さくこだました。光源の一つもないけれど、目を細めて笑った彼女の白い姿は水に浮かんでくる泡のように、はっきりと浮かび上がっている。
肩にかかった髪を手で払った彼女は、真摯に見つめてくる男の視線に気がついて無言で問うた。男は逡巡し、ためらいがちに口を開く。
「一緒に行く気はないか？」
「懇願するなら考えてやってもいい」
もし他に誰かいたならば、「無礼な！」と怒鳴られたかもしれない。けれど二人きりだったので、不遜にも胸を反らして腕を組んで見せた。別段、男は機嫌を損ねた顔などしなかったが先程からの渋面には変わりなかった。
「頼む、共に来てくれ。お前がいなければ困る」
本当に心からそう言っているのだと悟り、彼女はからかいたい気持ちを押さえて真面目に答える。
「仕様が無いな。命令でなくとも頼みとあれば、断るわけにはいかないしな」
一歩、また一歩と伸ばしたつま先は軽やかにステップを踏んでいるようだった。
彼女は男の横を通り過ぎ、部屋の中をずんずんと進みながら独り

ごちた。
「まったく、全て捨ててもいいと思わせる女とはどんなものなんだか」
「お前が気に入るかどうかは保障しかねるな」
独り言を言ったつもりが、追いかけて来た声があったので独り言ではなくなってしまった。肩をすくめると、青いビー玉を思わせる瞳を男に向ける。
「私には、理解できん」
男が苦笑いを浮かべたことを視界の端で捕らえ、何だか無性に苛立って鼻で息を吐く。
そして二人は扉の向こうに消えて行った。

「吸血鬼（ヴァンパイア・キス）の口付け？」
はあ？と神田有希は気の抜けた声と共にそう言った。帰りのホームルームも終わり、部活動に向かう者やもう帰るだけという者のおしゃべりで、ため息交じりの声はかき消されそうだった。
「知らねえの？最近ニュースでもやってるじゃんか」
と、身振り手振りプラス寝不足で充血した目の威圧感を持って、和泉冬馬は熱く語り始めた。
「若い男性ばっかり狙う連続殺人事件の殺害方法の名前だよ。電車の中で週刊誌の中吊り見たんだけどさ、殺し方が人間業じゃねぇって。だってかさかさのミイラみたいになってんだぞ？」
彼らの住んでいる町では、最近、物騒な事件が多発している。若い男性（と言っても、だいたい１６、７の高校生から３０代までと範囲は広い）ばかりを狙った連続殺人事件だ。すでに６人は犠牲になっており、これからも被害は増えるだろうとニュースで言っていた。
最初の犠牲者は２０歳の大学生だった。ゼミかなにかで行なわれた飲み会の帰り道、一人になったところを襲われたらしかった。仰

向けに倒れた彼は元の顔がわからないほど頬がこけ、眼球が飛び出し、肌は土気色をしていた。まるで一瞬でミイラになってしまったかのように、身体全体から血液が抜き取られて放置されていた。

検死の結果、遺体に血液は一滴たりとも残っていなかったそうだ。

警察が変死の原因を調べているうちに二人目の犠牲者が出た。またミイラのような変死体であったため、警察は同一人物の犯行であることに目をつけた。

しかし、いくら調べても手掛かりのようなものは何一つとして――髪の毛一本、それこそ塵の一つも――出てこず、捜査は行き詰まっていた。

増え続ける犠牲者に、ニュースでは毎日それを取り上げ、マスコミは今までに無い残虐な殺し方に“吸血鬼の口付け”と名付けたようだ。

確かに、悪魔の仕業としてもおかしくは無いように思えた。しかし有希は、現代に蘇ったドラキュラ伝説など信じなかった。だいたいここは西洋じゃなくって東洋だってば。妖魔より妖怪が闊歩してた方が自然だってば。

……いや、それも不自然だ。

「とにかく俺はそんなデマ信じねえっつの。しかもさぁ、何だよ吸血鬼って。証拠がないからそんなんのせいにするのか？最近のマスコミは何でも騒ぎ立てて煽るんだから始末悪いよなぁ」

冷めた反応を示す有希に冬馬はちっと舌打ちをした。

「つまらん奴め」

彼としてはもう少しいい反応を求めていたらしい。

「なーに？何の話してるの？」

そこで甘い声が割り込んできて二人は注目した。横に立っていたのはここ数ヶ月前に編入してきた女生徒だ。黒い艶やかな長い髪といい、ぱっちり丸い瞳といい小作りな唇といい、編入時から人形と名高い女の子である。

噂では、彼女に見つめられると大抵の…いや、この世の全ての男

がデレデレ状態になるらしい。誰が流した噂だか知れないが、例にもれず冬馬の鼻の下が伸びている。デレデレ状態だ。
有希は隣で見ていてこれは酷い、と顔をしかめた。冬馬には彼女がいるのだ。にもかかわらずこんな爪の垢ほども締まりのない顔になってしまっている。彼女が見たら泣いて殴りつけて絞められて冬馬は再起不能になるだろうな、ということは容易に想像できた。
言わないでおこう。
「――――っていう話をしてたんだよー。なー有希ぃー」
「あっ、…ああ、そうだな」
人形の彼女のかわゆさにノックアウトされた冬馬は上機嫌で有希に話を振った。かなり深刻な考え事をしていた有希は我に返って頷いた。が、聞いていなかったのは誰が見ても丸分かりなので、冬馬は思い切り顔をしかめてみせる。
「聞いてたか？」
「聞いてなかった」
「こ・の・正直者っ」
ヘッドロックをかけられて「ぐえっ」と妙な声を出した有希を、人形の彼女が覗き込む。「気分でも悪かったの？大丈夫ぅ？」
「そんなんじゃ……」
ないよ、と言おうとして、じっと見つめてくる瞳を見返した。
瞬間、キンと耳鳴りがした。
心臓が跳ねる。ただしそれは、異性に見つめられたときに起こる“ときめき”と呼ばれるものと明らかに違っていた。それだけは有希自身も分かった。
身体中の血が音を立てて逆流するみたいに、あるいは、沸騰しているみたいに耳の奥まで音が響く。
おかしい、と頭の中で反芻した。おかしいおかしいと思うものの思考回路が停止してしまっているようで、それ以上のことは考えられずにいると、彼女の瞳から1ミリも視線が外せないことに気がついた。文字通り、釘付けだ。

ゆらりと視界がぶれた。水の中でゴーグルもつけずに目を開けたときみたいに、世界がぼんやりとして白黒になった。その中で彼女の黒い瞳だけはっきりと浮いて見える。
黒…？
違う、赤い、黒味を帯びた、まるで———血、みたいな……。
「有希！」
突然、ざわざわとした教室の音が耳に滑り込んできた。
我知らず目を見開いていたらしく、何度かまばたきすると涙がちょっと染みた。目の前で心配そうにこちらを見ている彼女の瞳は変わらず黒で、妙なところなど一つも見当たらない。
変だな。確かに赤黒く見えたのに。
「ねえ、本当に大丈夫なの？」
きょとんとしていた有希の目前で彼女が手を振った。冬馬も「おーい、大丈夫かー？」と言って肩を掴んでガクガクと揺らすので、強引に彼の手を振り払う。
「揺らすなよ、平気だ。つーか揺らし過ぎ」
有希は冬馬の頭（ドタマ）をぐわしっと掴むと思い切り頭突きした。小気味よい音がし、冬馬はうめくと額を押さえて座り込む。
少し小首を傾けた彼女はおかしそうに笑った。
「大丈夫なら良かった。でも、神田君も吸血鬼に気をつけた方がいいよぉ。じゃあね」
ひらひらと手を振って離れていった彼女を見送った有希は、足元でデへへと妙な笑い声がしたことに気がつく。
「ホント可愛い……」
「お前彼女いんだろ」
半殺しにされるぞ、と言い置いて、立ち上がりかけた冬馬の頭に肘鉄を喰らわせた。
背中でそれを聞いていた人形の彼女の唇の隙間から、真っ赤な舌

がちろっと出て、口角から口角へ消えていく。それは獣の舌舐めずりに似ていた。
「本当に、気をつけた方がいいよ……」
まばたきほど一瞬、彼女の瞳が赤黒く輝いた。

闇の胎動2

学校を出た宮野茜は、夕飯の買い物をするために一人でぼちぼち歩いていた。伯父夫婦の家に居候している彼女は、積極的に家の手伝いをしているのである。ジャガイモ、豚ひき肉などなどと書いてあるメモを見ながら「今日はコロッケかなぁ」と呟く。

「あれ？」

前方に知っているような人がいたので立ち止まる。距離は遠かったが背格好から同じクラスの編入生だと分かった。茜から見ると横を向いている格好で、一方をじっと見つめていた。

誰か待ってるのかな。

するとまたもや同じクラスの和泉冬馬クンが彼女を連れて現れた。編入生がじっと見つめていた方から来たので待ち合わせをしていたのかと思ったが、それだったらこんなところで待ち合わせなどしないで学校を一緒に出てくればいいだけの話である。

まさか不倫！修羅場？！

やだ、どうしよー変なところに居合わせちゃった、などと考えつつも興味津々で陰から見守りつつもメモを持った手を握り締める。メモぐちゃぐちゃ。

三人で何かをしゃべっているうちに和泉冬馬クンの彼女を差し置いて、編入生が和泉冬馬クンににじり寄った。顔が近い。近い！近すぎる！

きゃーっ待って待って！こんなところでアンナコトしちゃっていいの！？などと考えつつも両手で目隠ししつつも隙間からコトの成り行きを観察する茜。

にゃおーん。

いいところでどこからか猫の鳴き声がした。その姿を探すのに目を離し、2秒もしないうちに戻したところ、和泉冬馬クンが彼女さんに殴られている場面に変わっていた。

あれれ？
茜はきょとんとし、何度もまばたきした。
編入生さんはどこに行っちゃったんだろ？
影もなく、最初からいなかったかのように――――消えてしまっていた。

マイ・ハニーと一緒に学校を出た冬馬は、駐輪場からチャリを出して引きながら電車通学のハニーと歩いていた。学校は大通りのすぐ脇に建っているのだが、帰りの時刻になると学生がわんさか出てくるので道が混むのである。だから冬馬とハニーは住宅地を突っ切って駅に向かうことが多かった。
「あれ？」
前方に立っている人物を知っていたので、冬馬は手を振った。
「どうしたん？こんなところで突っ立って」
ハニーもさすがに“人形の編入生”のことは知っているらしく、可愛さになるほどと感心しつつも冬馬の鼻の下が伸びていることを見逃さなかった。
人形の彼女は小首をかしげ、形の良い唇を笑みの形にした。
「待ってたの」
おおおおおお、俺を！？と隠し切れない動揺、否ときめきを表に出した冬馬の目を、彼女がじっと見つめた。
「そう、ずっと待ってたの……」
耳に心地良い甘い声。その甘い響きによって視線が外せなくなる。痺れ薬でも盛られたみたいに、頭の芯までふわふわしてきた。
ハニーは様子のおかしい冬馬をつつく。
「ちょっと、トーマ？冬馬クン？？」
「お前は黙っていろ」
そう言ったのは甘い声だった。だが、甘い声の中には随分とドスのきいた低い声も混じっている。全く正反対の声が同時に口から漏

れたのだった。
赤黒い瞳ににらまれたハニーは魂が抜かれたようにぽかんとし、直立不動になる。その様子を見て不敵に笑った人形の彼女は再び冬馬に意識を集中させる。
こちらも魂を抜かれたように生気の無い顔をしていた。彼女はすっと音も無く近付くと自分の身体を押し付け、生気の無い頬を両手で挟んだ。
「私の餌になってくれる？」
吐息が混ざりそうな距離。唇が、口紅も塗っていないのに嫌に赤く艶めいた。血のような舌が唇を舐める。
操り人形のように、冬馬の唇が「はい」と動きそうになった。
にゃおーん。
「――――っは、へ…」
どこかから聞こえてきた猫の鳴き声にはっと我に返った冬馬は、ぎこちなく腕の中に収まっている目の前にいる人を見た。そして手の中に収まっている何かを揉んだ。
「はれ？」
「…っどこ触ってんのよー！馬鹿！変態！痴漢！」
ゴッと冬馬の鳩尾にパンチがクリーンヒットした。
「ゴブッ！ず、ずびばぜん、いづのばにか手が……」
いつのまにやら愛しのハニーのお尻に手を回していた冬馬は、どうしてこんなんなったんだろ、と思い返すとどうしても思い出せないことにおかしいなぁと小首をかしげた。

片膝を立てて木の枝に座っていた彼女は、少し離れたところにいる男女を冷たい視線で見た。ぱっちり丸いことで有名な黒い瞳は、今は機嫌悪そうにすがめられている。
指で唇をいじっていた彼女は舌打ちをした。
「邪魔が入らなければ、喰らえたものを」

でも、ま、チャンスはいつでもあるし、と跳ねるように甘い可愛い声が言った。
「それにしても、あのとき失敗したわけではないとすると……」
彼が本人である可能性が高い、と今度は不協和音の声が言う。
「やっと見つけた、王」
形の良い赤い唇から紡がれたそれは、歓喜に似ていた。

細い三日月だった。
大気の汚れと街灯の煌々とした明かりで都会の空は霞んでいて、一等級以外の星は存在が消えかけている。
一戸建てが規則正しく並ぶ住宅地に入った彼は、ふん、ふん、と上機嫌に鼻歌を歌っていた。会社の同僚と飲んだ帰りで、夏に差し掛かった生ぬるい風が頬を撫でる。道には人っ子一人歩いておらず閑散としている。ここらへんは空き巣の被害に悩まされている地区だった。
ふう、と生臭い風が一瞬だけ吹いた。
近くにあった街灯が、ヂヂ、と小さく音を立てて、急にぱかぱかと点滅し始める。電球切れか。
明るくなったり暗くなったりの繰り返しの中、何メートルか前に人影があることに気がついて彼ははたと止まる。背格好からして女性のようだった。しかも子供。
こんな夜中に買い物か…？
最近の子供は夜にふら付くのか、と彼は内心首を傾げる。と、暗闇に浮かび上がるように突如として二対の赤黒い瞳が現れた。
目が合ったと思ったら———すでに彼の意識はそこになかった。魂の抜けた、ただの抜け殻のようになった彼に静かににじり寄っていた影が覆い被さった。
赤黒い瞳をした影は、口を開ける。
中にはずらりと並ぶらんぐいの牙。

影は、口角を上げて笑った――――ように見えた。
肩に手――およそ人の手とは思えない鋭い鉤爪のついた獣の前足を――掛けた影は、彼の首筋に喰らいついた。
わずかに血飛沫が飛ぶ。続いて湿っぽい音と、水物を吸い込む音がした。
じゅるっ、と最後のひと飲みが終わり、ごとん、と何か硬いものがコンクリートの上に落下した。
影の口からは血を思わせる長い舌が這い出てきて、舌なめずりをする。
そしてふっと影は掻き消えた。現れたときと同じ、音も無く、突然に。
あとには、ミイラ化した遺体だけが残されていた。

闇の胎動３

『――県――市の住宅地で、ミイラ化した遺体が放置してあるのを通りがかりの人が発見したということです。警察によりますと殺害方法は前の被害者と同一と思われ、同一犯の可能性が高いということです』

有希がそれを耳にしたのは風呂上りにダイニングを通ったときだった。時刻は２３時を回っている。

「有希」

ソファに座ってテレビをじっと見ていた父親――名前を緋呂（ひろ）という――が突然呼んだ。父親は寡黙で、有希が小さいときはそれなりに会話もあったが、年頃になってからはあまり話すことはなかった。それが、今日は父親の方から（しかもかなり珍しいことだ）話し掛けてくるなんて何事だ？！とびくびくしながら「何」と返した。

「お前の周りで変わったことはないか」

「はあ……変わったこと？特にないけど」

「そうか」

それが何か？と続けたかったが、父親は背を向けている格好だったので表情も窺うことは出来ないし、それきり黙りこくってしまったので疑問を抱きつつもすごすごと部屋に向かうしかなかった。

「にゃー」

すると少しだけ開いている扉の隙間から白猫が現れた。飼い猫のシャンは短毛で雪みたいに真っ白な身体に、青いビー玉の目をした綺麗な猫である。首輪はしていない。

「あっ、おまっ、俺の部屋で何してたんだよ！」

別に何にもしてないですぅ、とでも言うように、シャンは伸びてきた手をすり抜けてダイニングへと消えて行った。

つれない猫だ。

絶対に抱っこなんかさせてくれないし、餌のときだけしか足元に

寄ってこない。気位が高いと言えば聞こえは良いが、人間から見れば自分勝手な猫らしい猫である。半・外飼い（外に出たいとねだるので、好きなときに出してやっている）ということもあり、シャンに対してあまり感心が無い。

だからいつから飼っているのか知らない。物心ついたときにはシャンがいたわけで、有希よりも年上だということだけはわかる。が、そうなると恐ろしく長生きなんじゃないだろうか。有希は高校２年生、１７歳なので、少なくとも１７、８年生きていることになる。

もうババアじゃねえのか？

それか化け猫だ、と有希は思った。よぼよぼでも不思議でない年齢のシャンは、しかし、年を取っていないかのように毛並みは美しく、動きも機敏だ。

父親にはなんとなく懐いているようにも見えなくないが、自分にはからっきしだ。だから俺が世話する義理はない、と有希はたまにしかシャンの面倒を見なかった。動物愛護団体が聞いたら激しく怒りそうだ。

いつまでたっても懐かない猫の後姿を見送り、有希は濡れた頭をタオルで拭きながら部屋へ消えて行った。

有希をすり抜けダイニングへ向かったシャンは、ソファの上へ飛び上がると背もたれを伝って緋呂のすぐ側まで来た。

「来たな」

口を開いたのは緋呂ではない。彼はずっと渋面で口を閉ざしたままだ。それに男の声でなく、もっと高い、女の声だ。

緋呂の耳元まで歩み寄ったシャンは笑っているように瞳を細める。

その口が動いた。

「思っていたより遅かったな。どうするつもりだ、ジル」

すぐには答えず、彼は渋面のままテレビ画面をにらみつけていた。

ややあって、彼は小さく言う。

「私のことは心配ない。だが……」

「ユキか」

「ああ、頼む」
「仕様が無いな」
器用にふっと息を吐くと、シャンはソファを飛び降りた。

「よし！」
有希は朝のまぶしい日差しを浴びながら、一仕事終えた達成感を感じていた。いい天気で今日も暑くなりそうだ。
カラになった洗濯籠を片手にベランダから中へ入る。制服を着た男子高生がベランダで洗濯物を干すというのはあまり見ない光景だが、神田家では普通だった。
有希の母親はすでに亡くなっている。
さすがに有希が幼かった頃は父親が家事をやっていたのだろうが、彼はいかんせん不器用なので時間がかかる。小学校に入学する頃には、有希は一通りなら自分のことは自分で出来るようになっていた。
てーか、あのオヤジが家事……想像できない、と眉根を寄せてうんうん唸っていた。

『ユキ、メシだぞ』

ふっと、何かが脳裏を掠めた。
今まで父親が家事をやっていた、と思っていたがどこか違和感がある。何か引っかかる。だって、彼はもちろん会社があるわけで、昼間とかはいないわけで、いたらおかしいわけで。
でも、そうなると俺の昼ご飯はどうしてたんだ？
有希は保育園には通っていなかったし、なんとなく覚えているのは家で誰かに面倒を看て貰っていたかもしれないということ。
親戚ではないと思う。小さい頃に聞いた話では、両親は大恋愛（有り得ねぇ）の末、皆に反対されながらも押し切って結婚したという。手伝ってくれる人はいないだろう。

となると近所のおばさんか？
耳の奥に残っている声はぶっきらぼうだけど優しくて、日に透ける長い髪がキラキラ光ってまぶしかった気がする。
誰だったんだろう…。
「……って遅刻する！」
洗濯籠を洗面所に投げ捨てると、有希は鞄を持って急いで家を出た。
日向ぼっこしていたシャンはあわただしい足音で起こされ、仕方なしに顔を洗い始める。一通り毛繕いを済ませ、家の中を歩き回っていたシャンはダイニングテーブルの上に飛び乗った。
そこには青いギンガムチェックの包みがちょこんと置いてあり、大きさからして弁当だろうということが窺い知れた。
シャンは青い瞳を何度かまたたかせた。それは人がやる動作に良く似ている。
「どいつもこいつも、仕様が無いな」
呟くと、シャンはテーブルを下りた。

有希の通っている森園高校は家から歩いていける距離にあった。でも今日はちょっと遅刻しそうなので自転車を出す。余裕がある時間に出られたときには徒歩で行くが、帰りに駅の近くのスーパー（学校より遠い）にも寄って帰るつもりなので今日は自転車。
こうなると立派に主夫である。
そんな立派に主夫業をこなす神田有希（１７歳）はチャリを高速ですっ飛ばし、無事に遅刻することなく学校へ辿り着くことが出来た。
下駄箱で靴を履き替えていると、こちらも寝坊したのかヨレヨレな冬馬がやってきた。
「よっす。いつ見ても美人だな、有希ちゃん！」
「絞め殺すぞ」

言うや否や首に手をかける有希。
実は“美人”や“綺麗”という類の言葉は彼の最も嫌うものだった。要するにコンプレックスなのである。男にしては白い肌に艶やかな黒髪。顔の作りもカッコイイというよりは美人という言葉が当てはまる。小学生ぐらいまでは名前が女っぽいのも手伝って、よく女の子に間違えられた。
さすがに高校に入って背が伸びて身体つきもしっかりしてきたので、間違えられることは少なくなった。が、それでもたまに「背の高い女性」と見られることもあり、お年頃の有希の心をザックリえぐるのである。
そして、そんな彼を狙っている女の子が少なくないという事実を彼は知らない。
「あ」
そのとき、男から見ても美形な有希が冬馬を見つめながら間抜けにもぽかっと口を開けた。いきなりだったし異様な様子なので冬馬は引く。
「え、何」
「弁当忘れた」
……。
「おっつ！アイタタだよ有希ちゃん。でもそんなときもあるヨ～。お袋さんも気がつかなかったんだ？」
一応慰めているつもり（だろう）の冬馬に有希は妙な顔をした。決して気分を害したわけでなく、いぶかしんでいる顔だ。
「俺、母親いないって言わなかったか？」
沈黙。冬馬は彫像のように固まった。ぎしぎしと動いたと思ったら、次の瞬間素早く有希の額に張り手を喰らわせる。
ぺちーん！といい音がした。
「じゃあお前はどうやって生まれてきたんだよっコウノトリか？！コウノトリの国からやってきたのか王子様！てか、あんなうまそうな弁当誰が作ってたんだ」

「俺」
冬馬はもう一度額を狙ったが、二度も喰らうほど有希は運動音痴ではない。ひょいと軽々よけてカウンター技を繰り出す。冬馬の額からもぺちーん！といい音がした。
「俺が作っちゃ悪いのか？言っとくけど母親いないから家事全般俺の仕事！」
「主夫……いい嫁になれるな有希ちゃん」
ふふ、とほくそえんだところでチャイムが鳴った。もう一度デコでも叩いてやろうかと構えていた有希は冬馬を置いて弾かれたように駆け出した。
教室は3階の一番手前なので、チャイムの鳴り始めだったらまだ間に合う。
一人置いていかれた冬馬は呆然とし、そして慌てて追い駆ける。
「あっ、おい待てよ！置いてくなよ有希！何だよ、皆勤賞狙ってるわけ？！」
すでに階段を駆け上がり踊り場の隅に消えた人影を追って、足速すぎ！と怒鳴った。

闇の胎動４

４時間目は体育だったのでその教室には誰もいなかった。床に置いた鞄の上や机の上に制服が乱雑に置かれていて、人影も物音もない。

と、その空間に突然影が落ちた。何も無かったところから何かが現れ、タイル張りの冷たい床の上に静かに降り立つ。

ひた、と歩を進めた足は白く、人のそれの形をしていた。それは音も無く教室の中を進み、手にしていた青いギンガムチェックの包みをある机の上に置いた。そして規則的に机が並べられた教室内を見渡して、非の打ち所の無いマネキンのように美しい足はとある机の横で止まった。

細い指が机に伸ばされ、表面を撫でる。

「……回りくどいことを」

小さくぼやき、それでも楽しそうに笑った。ずっと昔から予想していた出来事が音を立てて始まったのだとその目で確認して。

４時間目の終わりを告げるチャイムが鳴った。同時に、わいわいと賑やかな声が向かってきて、その一団は教室の扉を開ける。

引き戸はガラガラとうるさい音を立てて開いた。入ってきた女子生徒たちは教室の中に見慣れない、あってはならないものを発見してぽかんとした。

後ろでつっかえていた女の子たちも「なになに？」と顔を覗かせる。

「きゃ――――っ！」

教室は黄色い声で埋め尽くされた。

「どうして猫がいるのぉ。どっから入ってきたの？かわいい～」

「ほんとだ、どっから入ってきたんだろ。わぁ、真っ白でキレイ」

女子生徒の視線が一斉に集まったそこには、真っ白な猫が鎮座していた。机の上にある青いギンガムチェックの布に包まれた弁当箱

（と思われる）と並んで行儀良く座っている。
「この席、誰だっけ？」
「えー……神田君じゃない？」
どうして神田君の席に、と話している一団にいた茜は、話に入らずに猫との交流に精を出していた。
「にゃんこさん、どこから入ってきたの？扉閉まってたのに頭イイね。通り抜けたの？」
猫の瞳は空を映したような澄んだ青で、じーっと見ていると吸い込まれそうだった。あまりに身動きしないので置物なんじゃないかと思った茜は、そっと猫の額を撫でてみる。
あ、あったかい。
なでなで。狭い額を撫でると気持ちよさそうに目を細めた。茜は調子に乗って抱き上げたのだが、ピンクの肉球で猫パンチされてしまう。抱っこは嫌なのか。
爪は出ていなかったので痛くは無いのだけれど拒絶された感じで精神的にへコむ。
「何やってんの？」
帰ってきた男子生徒たちも、女子が群がっているので何事かと思ったらしい。猫がいることに気がついた彼らも、何で猫が…と騒ぎ始めた。
「シャン？！」
遅れて入ってきた有希は、皆が取り囲んで話をしている中にいる白猫を見て声を上げた。
「何でここにいるんだよ。どっから入って来た？」
人を掻き分けシャンを抱っこしていた茜に駆け寄る。猫パンチされてもめげずに抱っこを続ける茜の頬に、シャンは前足を突っ張ってぐいぐい押している。
「悪い、宮野さん。俺の猫なんだ」
「やっふぁり！かんらふんのれこらんら（注：やっぱり！神田君の猫なんだ）」

何を言っているのかわからない。
有希がシャンを受け取ると一秒とて大人しくせずに跳び上がり、有希の頭を踏み台にして走り去っていった。
嵐が去り、何だったんだと一同が呆然としているところで、有希は自分の机に置いてある包みに気がついた。
「俺の弁当……」
忘れたのに、何であるんだ？
有希の後ろから顔を覗かせた冬馬も気付いたらしく、あれ？と声を上げた。
「有希、弁当忘れたんだったよな？あーっわかった！有希の猫、弁当届に来たんじゃねえの？」
「まさか」
包みをくわえた猫が家から学校までを歩く様を思い浮かべたが、非現実的すぎてそんなものを想像した自分の脳味噌にあきれ返った。
「ぜってーそうだって！あったまいいネコだなー忠犬ハチ公もびっくりだよ」
ついでに万年おめでたい脳味噌をしている冬馬にも冷たい視線をくれてやった。

放課後になって駅前のスーパーへ食材を買いに来た有希は、『今日のお買い得！』とでっかく書いてある値札を見ながら夕飯を考えていた。
あ、トマトとレタス安い。
一品はサラダに決まった。サラダと言えばカレーだろ、という独断と偏見で今日はカレーになった。ちなみにナスカレージャガイモと玉ねぎは家にあるから、ニンジンと豚肉とカレールー（中辛）をカゴに入れる。
あとは卵と牛乳も切れそうだったのでそれもカゴに入れる。
一通り見て必要なものを手に入れた有希はレジを済ませた。サッ

カー台でレジ袋に詰めて出入り口へ向かおうとしたとき、有希と同じく制服姿でレジ袋に詰めている人を発見する。しかも見たことある。

ネコっ毛で、いつもぽわ～っとしている同じクラスの宮野茜。

有希の視線に一向に気付かない。有希が声をかけようと傍へ寄ったところで振り返った彼女は、ようやくその存在に気がついたようだ。ぎょっとしてサッカー台にお尻がぶつかる。

「うひゃっ！……あ、ごめんなさい、ビックリして」

「……いや、ごめん驚かせた。声かけようと思ったら振り返ったから。宮野さん、家の手伝い？偉いね」

態勢を立て直した茜はぷるぷると首を横に振った。

「そっ、そんなことないよ。神田君こそ、お手伝い？よくここに来るの？」

「いや。いつもは家の近くで済ませるんだけど、今日はトイレットペーパーが安かったから」

それでわざわざ自転車に乗ってここまで来たのである。家計を預かる主夫としてはトイレットペーパーだろうと一円でも安く手に入れたいものである。

見た目は美形で女子にモテる有希の意外な主夫っぷりが伝わったのか、茜はぽかんとした。

「いつもはってことはいつも買い物頼まれてるんだね」

「頼まれてるっつーか、俺がやらなきゃやる奴いねえし。宮野さん、家どこ？送ってってやろうか。荷物だけでも乗せた方が軽いと思うけど」

連れ立ってスーパーの外に出て、有希は自転車を止めてあるところまで来るとカゴに荷物を入れる。鞄の中から自転車の鍵を取り出した。

「い、いいよ。だって向こっかわだし、神田君だって荷物いっぱいで重いだろうし」

茜は慌ててしどろもどろになりながら断る。

駅を中心として考えると、茜の家は駅の東側でマンションが立ち並ぶ新興住宅街だ。一方有希の家の方である西側は一戸建ての立ち並ぶ昔からある地区である。学校もこちら側だ。
気を利かせて言ったのだが、断られたのであればそれ以上誘う必要はない。
「そっか。じゃあ、気を付けてな」
「あっ、ありがとう。神田君も気を付けて…」
自転車に乗った後姿を見えなくなるまで見送って、茜はぽつりと言った。
「カッコイイって人気の神田君の意外なところを見ちゃった…」

マンションの間にある公園を突っ切って家へ向かっていた有希は、妙な人影を見つけて思わず自転車を止めた。
それというのも遠目でも人の形を成していないように見えて、気味が悪かったからだ。
黒っぽい巨大な体躯に広い肩幅、筋肉質な四肢。仁王立ちしているそれは身体の割に頭が小さく、てっぺんに二本の枝が突き刺さっている。
着ぐるみ…？
いぶかしげに有希はそれを見ていたが、さっさとその場を離れればよかったのだ。
白い石畳で舗装された公園は明るくて、芝生だってあるし緑が良く映える。噴水などもあるからいつも子供の声が絶えない場所だ。しかし、なぜか今はしんと静まり返っていて、風に揺られた木の葉のさざめきだって聞こえない。
誰だってこんな怪しい雰囲気のところに長居はしたくない。
違う道で帰ろう、と引き返そうとした瞬間、巨大な影が背後から現れた。
『指輪を寄越せ』

臓腑に響く重低音がした。
背筋がひやりと凍りついて、振り返る首もギシギシいう。
『指　指指指　指輪を　指輪を　指輪をよこ　寄越せ』
自分の目が信じられなかった。
白い石畳から突然黒い染みが湧き水のように現れて、そこから背後にいるものと同様のものが這い出てきた。それも一人や二人でなく、いくつも。
それぞれ低い声で何かを言うので、傷ついたCDのように聞こえた。
背後に立ったものを見上げると、小さい頃に絵本とかで見たような“鬼”に似た顔をしていた。
『指輪を寄越せ』
生臭い吐息が顔にかかる。
動いた口の中には、鋭い牙がずらりと並んでいた。

闇の胎動5

『指輪を寄越せ』

ハァー、と生臭い息が顔にかかった。鼻がもげそうなんて生易しいもんじゃない。生ゴミを真夏に3日ぐらい放置して、それに果物の王様ドリアン（超強烈）とクサヤ（極臭）を混ぜたような腐臭に、硬直していた身体が動きを取り戻した。

自転車を手放してしゃがみ込む。支えが無くなった自転車は派手な音を立てて転倒した。カゴに入っていたレジ袋から卵のパックが飛び出して痛々しく鳴った。

「うぅえぇぇぇっ！っげほ、うぇっ」

咳き込んだ有希に、問い詰めるようにそいつらは言った。

『ゆび　指　指輪　指輪を　指輪を持って　持っているんだろう？』

「っはぁ…？ゆびわ？こんな口臭い婚約者いた覚えねえけど。うぇっぷ」

胃の中身がせり上がってくるのを感じながら答える。鬼たちは距離を詰めた。

『知って　知って　知っている　はず　はず　はずだ　とぼけ　とぼけても　無駄　無駄だ』

マジで傷ついたCDかよ。

声が重なって聞き取りづらいことこの上ない。吐き気も酷い。

有希は、相手が常識の通じなさそうな輩だということをすっかり忘れて怒鳴っていた。

「っるせぇな！知らねえもんは知らねぇって言ってんだろ！！」

途端、しん、と静まり返った。

うつむいていた有希はあれ？と思い仰ぎ見ようとした———次の瞬間、背中にものすごい衝撃がきた。それこそ横綱とか米俵とか像とかが落ちてきたんじゃないかというぐらいの。

蛙がひしゃげたような声を出して、有希は石畳の上に押し付けら

れる。
『指　指輪　指輪　手に　手にいれ　手に入れる』
「…がっ、あ……っ！」
背を踏みつけた鬼の足に想像を絶する力が込められ、みしみしと骨の軋む音がした。それは背骨か肋骨か。どちらにせよ折れたら無事ではいられない。
込み上げてきていた胃の内容物を吐き出した。それでもまだ出し切れなくて、酸っぱい胃液も吐き出した。胃液で唇が焼けて痛かったけれど、今の状況ではどうってことない痛みに分類される。
メキメキと耳障りな音がした。
肺が押され、呼吸が出来なくなる。
く、苦し……何でだよ、何で俺が、こんな目に合わなきゃいけないんだよ。
『指　手に　れる』
声の重なりに耳鳴りがプラスされ、ほとんど正常に音を拾えなかった。ジェット機のエンジンみたいに、キィンと高い音が大きくなったり小さくなったりしながら聞こえる。
指輪なんか、知らねえよ……。
ゴキン、と、どこかが壊れた。
「…っお、あああぁぁぁぁぁっ！！」
絶叫が喉を逆り頭が真っ白になって、体内で何かがぱちんと弾けた気がした。
そのとき彼は、驚くべきことに身をよじり、鬼の足を振り払った。と、瞬時にその場から消え失せる。均衡を失ってたたらを踏んだ鬼がその姿を捜す前に、頭上から影が落ちた。
鬼の広い肩に軽い衝撃が来る。何が起こっているのか理解が追いつかない鬼が唸った。
「のろいな」
鬼の肩の上で嘲笑した彼は肩の上でうまくバランスを取りながらしゃがみ込み、すっと息を吸った。そうやって助走をするかのよう

に勢いをつけると、鬼の首に喰らい付いた。
『がぁぁぁぁぁっ！』
鬼は襲い掛かった痛みを振り払おうと腕を振り回し、上半身を無茶苦茶に振った。しかし、噛み付かれたところから体液を吸い尽くされた鬼は、もろもろと泥人形が乾いて崩れていくようにして消えていった。
血に似た液体で口の周りを汚しながら軽々と着地した彼は、次なる獲物に襲い掛かる。
殺せ！
地を蹴ると瞬間移動をしたかのようにまたたく間に鬼の足元へ現れた。目で捕らえられないほど動きが速過ぎるため、さっき鬼の頭上に現れたときも消え失せたように見えたのだ。
押さえ切れない激情と興奮の渦に呑み込まれ、乾いた笑いを浮かべながら鬼に喰らい付く。
そうだ殺せ！なにもかも無くなるまで全てが滅びるまで！殺して殺してころしてころしてコロシテコロシテ――――！
最後の一体が泥の塊になって崩れ落ちる。
「っは……」
有希は吐息と共に声を漏らし、気力が尽き果てて膝から前のめりに倒れる。
酷く、疲れた。
「…何が、どうなって」
頭をもたげるのも億劫で、見える範囲の現状を確認しようとした。崩れた鬼たちは跡形も無く消えてしまっていた。
さっき。
頭が真っ白になって身体が熱くなって、それから息をするのももどかしいぐらいに気分が高揚して――――。
さっと身体中から血の気が引くのを感じた。
そうだ、殺せ殺せって頭の中にそればかりで、殺すことを楽しんでた。

有希は自らの手を見た。頭ではなく感触で、確かに長い爪で肉を切り裂いたことを覚えている。今見るといつもと変わらない手だ。ただ、爪の間に泥のような血のようなものが入り込んでこびりついていた。

確かに骨が折れた音がしたのに、身体が軋んでいるぐらいで痛かったり気持ち悪かったりというのはない。

それにあのあと、身体が勝手に動いて鬼の血を吸っていた。

血を渇望するみたいに。

これじゃあまるで、“吸血鬼の口付け”と騒ぎ立てられてる連続殺人犯じゃないか。

「は、は……」

可笑しくも無いのに口をひん曲げて笑った。

もしかしたら自分が気付いていなかっただけで、知らない間に人を襲っていたのかもしれない。

いつからこんな化け物になっちまったんだ、俺。

「どうすりゃいいんだよ」

誰に聞くとも無く独りごちた。

それは忌々しそうに舌打ちをした。

「使えぬ泥人形どもが…っ！やはり普通の土では駄目か」

低い地を這う声を紡いだ口が、それなりの力場の土を使ったのに、と今度は甘く可愛らしい声で言った。

「地位を捨てたのに、どうあっても渡さないつもりなのね、王」

鋭い爪を悔しそうに噛んだ。大きく裂けた口から覗くのは、ワニを連想させるらんぐいの牙。

広い肩に逞しい四肢、筋肉の盛り上がった身体は全体的に黒っぽい色をしている。頭部には二本のゆがんだ角が生えていた。

「絶対に手に入れるわ！この私が」

王の証、クリンキルメルの指輪を！！

一対の瞳が赤黒く輝いた様子は、鬼に似ていた。

ふと顔を上げたら、空はもう薄闇に包まれていた。夕焼けが端に追いやられて夜の気配がやってくる。日が沈んで夜が来ることなどいつも繰り返していることなのに、今に限ってはもうこのまま夜が明けない気がした。

有希は事件から何時間も経っているのに、いまだに同じ場所にいた。

あのあと自転車を起こしてレジ袋をカゴに入れ、道の端に寄せると、自分はちょうどいい高さの石垣に腰掛けた。

どうやらここは公園の隅に位置する場所のようで、通る人はあまりいなかった。

いない方がいい。

もしかしたら、またどこかがプッツンして人を襲うかもしれない。そう思うと容易に動けない気がした。

家にも帰れない。

万が一にも父親のことを襲って、息子が父親をナントヤラ事件と報道されてはたまらない。かといって行くあてもない。

「どうしてこんなんなっちまったんだかなぁ……」

手の平を見下ろした。何の変哲も無い爪が確かに鋭く伸びていたし、牙だってあった。それで肉を引き裂いて噛み付いていたのかと思うとぞっとした。

空は一度日が傾いてくると、あとは落下するようにしてあっという間に太陽は沈んで行く。すっかり辺りは暗くなって、子供の声も聞こえなくなった。

「にゃおうっ」

「うおぉうっ！」

背後の茂みががさがさと鳴って突然白い何かが飛び出してきた。驚いて飛び上がったが、それの正体はよくよく見るまでもなく自分

の飼い猫だった。
「っ何だよぉ！驚かせんなよシャン。また外ふらふらして、首輪つけてないんだからとっ捕まって保健所送りになっても知らねえぞ」
猫ごときで驚いたことの照れ隠しで大袈裟に笑った。口の端が引きつっている。
そんなビビリ有希にシャンは珍しく近寄ってきたと思ったら、ズボンからだらしなくはみ出しているワイシャツの裾をくわえる。
「んん～、んわぉ～」
「何だよっ噛み付くな！」
終いにはぐいぐいと引っ張り始める。
「んなぉ――――っ！！」
「なんなんだよわけわかんねえよ！引っ張んじゃねえ！」
「黙れ！」
「ふぐっ！」
脇腹にシャンの頭突きがヒットした有希は石垣の上に倒れ込んだ。
「いってぇな！……って」
怒鳴った一瞬後、猫なんかに怒鳴っているおかしい自分に気がつく。
だいたいなんで猫が頭突きなんかしてくるんだ。つーか……その前に何かおかしい事態になってやしなかったか。空耳と疑いたくなるような何かが聞こえやしなかったか。
呆然と倒れ伏した有希の身体に４本の足がめり込み、泣く子も黙るほどの迫力でシャンが迫った。
「猫のふりしてやりゃあ“噛み付くな”だぁ？駆けつけてやったというのに調子に乗りやがってコノッコノッ！」
シャンは女みたいな高い、しかし殺気を含んだ声で言うと踏みつけた有希をさらにぎゅうぎゅうぎちぎち踏みつけた。
小さい足が肋骨の真下の奥深くに突き刺さる。
「うぐぉっ！くるっ、苦しいです！」
「いいか、耳かっぽじってよぉーく聞け。仕様が無いからお前がど

うしてこんな状況になっているのか教えてやる。口答えや口答えや口答えは一切許さん。お前は大人しく私の話を聞いていればいいのだ。わかったな？」

「はい、あの、すんませっ」

ふふ、とシャンは猫のくせに勝ち誇ったように笑うとやっと有希の上からどいた。

闇の胎動6

今日はさすがに夕飯を作れる気分じゃないだろうということで、（なぜか）シャンの命令で帰る途中で弁当を買った。
「ただいま」
ため息と共にそう言うと、珍しく緋呂が出迎える。今日は帰りが早かったようだ。緋呂は有希がシャンと一緒にいるのを見てわずかに顔をしかめた。
「今帰ったぞ、ジル」
自分の分の弁当（しかも一番高いステーキ弁当）をちゃっかり買ってもらったシャンは陽気に言った。どうやら機嫌は良くなったようである。
しかししゃべる猫などどこの誰が信じるだろうか。少なくとも目の前の寡黙でお堅いサラリーマンは信じそうにない。そう思った有希はシャンの進路を妨げるようにしてレジ袋を置いた。
しゃがんで後ろから掴むと耳元で小声で言った。
「馬鹿っ！いくらなんでも親父に猫がしゃべるなんて冗談通じるわけねぇだろ！」
「いや」
頭上から降ってきた低い声はあっけに取られた様子も無く落ち着いていた。
「全て知っている。シャリアン、何があった」
「食べながら話そう。ハラ減った」
足も拭かずに家に上がったシャンを後ろから有希が怒鳴る。
「おいっ、足拭けよ！誰が掃除してっと思ってんだよ！」

「有希が奴らに襲われた」
弁当を食べ初めて間も無くシャンは緋呂にそう告げた。行儀良く

椅子に座って目の前の弁当を目を細めて見たシャンは苦々しくため息をついた。
「もう黙っているわけにはいかんだろ。有希も子供じゃない。実際、奴らに襲われたのだから知る権利もある。それに――――どうやらヴァンパイア化していたようだ」
「ま、待て待て！ヴァンパイアって、あのヴァンパイアか？ドラキュラ伯爵とかの」
有希はご飯のかけらを飛び散らかす勢いで身を乗り出した。弁当に箸をつけていた緋呂は一瞬険しい顔をしてから有希を真っ直ぐ見ると、ためらいがちに口を開く。
「そうだ。黙っていたが、私はヴァンパイアなんだ。お前はその血を引いている」
ヴァンパイアなんだヴァンパイアナンダぶぁんぱいあなんだ……。
「……う…そ、こけえぇぇぇぇ」
ジトっと半眼で父親を見る。
言っちゃ悪いが緋呂は本当に普通のいたって真面目なサラリーマンであり、もし仮にヴァンパイアとやらが人間の世界に混じって生活していたとしても、それが彼だとは考えにくい。
しかし、嘘を言っているわけでも騙そうとしているわけでもないことは有希自身良く分かっていた。分かっていたのだが、唐突に架空（と有希は信じている）のヴァンパイアなどという名前を出されると反応に困る。
「うほらいろ（うそじゃないぞ）」
口一杯にステーキをほおばったシャンは聞き取り辛い声で言った。
「んなこと言われても……てーか何で猫がしゃべってんだよ。おかしいだろうがどう考えても。しゃべるぬいぐるみかよ。電池入れ替えた覚えねぇよ」
「はっ、ザル脳め。育て親の声まで忘れたか」
「育て親ぁっ！？」
猫が育て親って何だ。俺は狼に育てられた子供の仲間か。

奇妙なものを見るような目つきで飼い猫を見る。咀嚼して飲み込んだシャンは胸を張って自慢そうに言った。
「ちなみに私もヴァンパイアだ」
「いや猫だろ」
「馬鹿者。この姿が本来の姿なわけないだろうが。ヴァンパイアは変身出来るんだ」
初耳です、と有希は丁寧に答える。
「つーかさ、ヴァンパイアってもっと美形な感じなんじゃねぇの？美貌で人間を魅了するんだろ？」
シャンは「何をバカなことを言っているんだ」と言わんばかりにきょとんとした。
「ジルは美形だぞ。もちろん私も」
「ジルって誰」
また変な奴が出てきた、とげんなりした有希の問いに対して、シャンは前足で隣にいる男、緋呂を指した。
言っちゃ悪いが緋呂は本当に普通のいたって真面目なサラリーマンであり、ヴァンパイアだと宣言されたが見た目は全くの日本人であり、４×歳とあってもちろんしわだってあるわけであり、ビボーなどという名詞とは無縁の雰囲気であり……。
だがしかし、話の流れから言って嘘を言っているわけでも頭がイカれたわけでもないことは有希自身良く分かっていた。分かっていたのだがにわかに信じ難い。
まさかもしかして本当に変身とかしちまったりするのか？
「仕方ない」
ため息を漏らすと緋呂は両手で顔を覆った。
手をどけた彼の顔を見て、有希はシャンがしゃべったときよりも驚いて言葉を無くす。人間、あまりに驚きすぎると言葉を失うということがよく分かった。
「誰…」
思わず呟くのも無理は無い。それというのも有希とほとんど年齢

が変わらないような若い男の顔になっていたのだ。しかもかなり美形だ。
次に生え際から後頭部へ髪を撫で付けると瞬時に伸びた。肩にかかるぐらい長い。
切れ長の瞳に長い前髪が影を作った。彫りの深い顔立ちで、その中でも目を引くのはやはりルビーのような赤い瞳だった。瞳孔が縦長で蛇のそれを連想させる。
食い入って見ていた有希にこそばゆそうに苦笑いしてみせた。
「驚いたか」
「かなり。俺とほとんど年が変わらなく見えるのが、不思議だ」
「ヴァンパイアは死者だからな、死したそのときの外見のままなんだよ。私の本当の名はジルと言う。緋呂というのはお前の母親がつけてくれたものだ」
彼は懐かしそうに微笑んだ。
有希の母親は有希を産んですぐに亡くなってしまったので、顔も声も知らなかった。写真も残っていないし、物心ついたときからいなかったので想像しても思い浮かばない。
この年になると特に淋しいといった感情はないけれど、複雑な心境だった。
「それで、……ジルさんがヴァンパイアだから俺が何だって？」
「緋呂だろうとジルだろうと、お前の父親には変わりないよ」
だからいつもどおりで、と促されたが、外見があまりに違うので違和感は拭えない。何か変なものを下敷きにして座っているようなもぞもぞする気持ちで有希はその場にいるしかなかった。
「お前はヴァンパイアの血を引いている。だが、ヴァンパイアとして覚醒したのは先刻が始めてのはずだ」
「もっ、もしかして最近事件になってるのって親父が……」
疑いの眼差しを向けられたジルは心外だとでも言うように片眉を跳ねた。
「あれは私ではない。もし私だとしたらもっと前から被害が出てい

るはずだ、そうだろう？お前が生まれる前からここにいるのだからな。あれは常夜の国の奴らの仕業だ」
「とこよ…？」
眉根を寄せた有希は視線で説明を求めていたが、ジルはそれを手で制した。
「まずはヴァンパイアのことから説明しよう。死者が何らかの形で蘇った者。これがヴァンパイアだ。一般的に日光や十字架、ニンニクが苦手とされるがそういうことは特にない。まあ、日中よりは夜間の方が多少動きやすいということはあるがな。あと、定期的に血液を必要とする」
「はあ……じゃあ、親父がヴァンパイアだから俺もそうなわけ？」
「そうだ。と言いたいところだが、どうやらお前は人間のようだ」
わけがわからない。何で父親がヴァンパイアだから俺がヴァンパイアかもしれないのにどうやら人間だった？それってつまりどういうことよ。
「もしお前がヴァンパイアと人の子であるならば、ヴァンパイアを退治する能力のある者として生まれても不思議は無い。いや、そうでなければならなかった」
シャンも器用に前足を口元に当てると、考え込む仕種をした。
「ところが、ユキは特殊な力を持ってはいなかった。しかも死を迎えることなくヴァンパイアとして覚醒した。が、今は人間の匂いがするから、ヴァンパイアになったのは一時的なものだったのかもしれない」
真顔で見つめてくる一人と一匹の様子を交互に見て、おずおずと口を開いた。
「あのぉ、かいつまんで話してください」
「まあつまり、生命の危機を感じてヴァンパイアとして目覚めたが、一種の興奮状態のようなものですぐに冷めてしまった、といったところかな。どう思う？」
シャンはジルに意見を求めた。彼も同じような見解だったようで

頷いた。
「有希の場合は何らかのきっかけでヴァンパイアになるのかもしれない。例えば、殺されそうになったとか。何にしろ、そんな前例は聞いたことが無いが。それはともかくシャリアン、くれぐれも危険な目に合わせないよう頼むと言ったのに」
ため息混じりに呼ばれてシャンはぷいとそっぽを向いた。
「学校を出て、スーパーまでは付いていけたんだ！だけどそのあとに子供に見つかって…今思い出してもはらわた煮えくり返るぞ！ガキどもめ好き勝手しやがってっ」
随分な屈辱を受けたらしい。
有希は物珍しそうに、今にも頭から湯気が上がりそうなほど怒っているシャンを見つめた。
「へえー、シャリアンっていうのか。なあ、本当の姿ってやつに戻って見せてくれよ」
「それは出来ない」
「何で」
間髪置かずに断られたのでちょっとへこむ。このぶんだと人の姿になっても猫のときと性格は変わらなさそうだ。
「戻ったら、私は裸だからだ。興奮してどうしようもなくなっても知らんぞ」
「それは困る」
どんだけ自信家なんだ。
それだけ言うならさぞかし美人なのだろう。「じゃあ期待しておく」と言ったが、言葉と裏腹にあまり期待せずにその姿を拝む日を待つことにした。
「有希、今日は疲れただろう。早めに寝るといい」
「お子さまは明日も学校だからな！」
シャンがからかってけらけらと笑った。
「なぜユキを狙ったのかはまだ分からないが、何にせよ身を隠すことが得意な奴らもいるからな。どこから襲ってくるとも限らない。

気をつけろよ」
「ご心配どーも」
弁当をすっかり平らげた有希はひらひらと手を振った。さすがに食べ盛りの高校生だけあって、非常時でも腹一杯食べることは忘れない。カラになった容器をゴミ箱に捨てて、「風呂入れてこなきゃ」と独り言を言ってダイニングから消えた。
「なぜ有希を狙ったのか、まだわからない？」
ジルは言葉の意味を確認するかのように、シャンの言ったことを繰り返した。
何も答えないシャン。彼が言わんとしていることを理解しているので、あえて何も言わなかった。
ジルが低い声で言った。
「奴らの狙いは指輪だ」
「アンタが行方をくらませて十数年。嗅ぎ付けて来るのには随分遅かったな。……どうせ脳味噌の足りない奴らのことだ、アンタとユキを間違えて襲ったんだろうよ」
「目星は」
ついてる、と短く答えた。
「人の形を取っていても臭いまでは消せなかったようだな。弁当を届けに行ったときに見つけた」
「……その姿で？」
猫の姿で弁当をくわえて学校に侵入するシャンを思い浮かべて、ジルは真面目な顔で聞いた。
「んなことあるわけないだろ」
冷たく返されたジルは「何だつまらない」とため息混じりに言った。
シャンは一度長く息を吐くと、少し哀れむような目で有希の消えていった方を見やった。
「難儀だな。人にもなりきれない、ヴァンパイアにもなりきれない」
「深雪は、有希がヴァンパイアとして生まれれば苦労するのではな

いかと案じていた」
　ジルの横顔を視界の端で捕らえると一度うつむいた。ひょいと身軽にシャンは腰を上げ、テーブルの上で伸びをした。
「ヒトだってヴァンパイアだって苦労するときゃするだろう。どちらの道を取るかはユキ次第だけどな」

闇の胎動7

今週の掃除当番は有希の班だった。班は出席番号順に適当に決められたもので、だいたい5人一班だ。
教室掃除なのだが、箒で掃いたあとにモップがけをする。協力してサカサカやれば10分ぐらいで終わるだろう。しかし、サボって部活に行ってしまう奴やサボって帰ってしまう不届き者もいるので、残された人たちはただでさえやる気が無いのにさらに半減だ。
そんなこんなで本日の当番は有希と冬馬しか残らなかった。
「帰ろうぜ」
「おう、帰ろうぜ」
共犯だ。明日先公に聞かれても「やりました」を連呼しておけばいい。他の奴らだって同じ手を取るはずだ。
サボるときはサボろう、がモットーである。
「俺も彼女が待ってるし。じゃあな」
冬馬は爽やかに手を振って教室を出て行った。ちらほらいた生徒も帰ってしまったので、当然有希一人しか教室に残っていなかった。
「神田クンっ」
「うぉあぁっ！」
自分一人しかいないと思っていたところで突然呼ばれたので驚いて飛び跳ねた。バクバクと打つ心臓を押さえて振り返ると、そこには人形みたいだと噂の編入生がいた。
ほんとに突然現れたな。
どこに潜んでたんだ、と有希が不審に思っていると、彼女は形の良い唇をゆっくりと動かした。
「私ね、ずっと探してたの」
放課後、二人きり、そして意味深な切り出し方、告白するにはぴったりのシチュエーションとあって、内心どきどきしながら答えた。
「え、な、何を？」

「この近くにいるっていう情報はあったんだけど、はっきりと居場所は掴めなくて」
何の話だかわからなくて有希はまたたいた。それでも彼女は続ける。
「そのうちお腹も空いてきちゃうし。ほら、今じゃタブーになってるけど昔はよくこっちに来て食べてたじゃない？一度やったら止まらなくなっちゃって……もう6人も平らげちゃった」
6人。その数字はどこかで聞いた覚えがある。
6人目の犠牲者が出ました、そうニュースで言っていなかったか。
有希の中で何かが繋がった。それが何かはわかっていた。けれど、恐ろしくてその考えを掻き消そうとしている。
有り得ない。そんなはずない、と。
彼女が一歩近付いて、硬直した有希の首に腕を回した。
心臓が早鐘みたいだ。しかしそれは異性と触れ合って緊張してではなく、得体の知れない何かが恐ろしくて起きたものだった。
彼女は形の良い唇を耳元に近づけてささやいた。
「この間、貴方に催眠をかけようと思ったんだけどうまくかからなかったのよね。失敗するわけないし、試しにオトモダチにかけてみたんだけどいつも通りで問題なかったの」
「……何の話？」
緊張で口の中が渇いた。喉が張り付いている。唾をごくりと呑み込んでもその不快感は取れない。
彼女はにっこりと笑った。
「催眠がかからない理由っていうのは、対象者が同じく催眠を使える場合なの。ほら、ヴァンパイアってもともと“魅眼（ミスティック・アイ）”っていうの持ってるんでしょ？だから効かなかったのかなって」
有希は背筋がさっと冷えた気がした。逃げなければ。今すぐ、ここから。
硬直する身体を叱咤して彼女を突き飛ばした。
なぜ彼女の口からヴァンパイアという単語が出てきたのか、なぜ

彼女はこんな話を自分にするのか。
なぜ今まで誰も気付かなかったのか。
彼女に名前が無いということに。
「泥人形も倒されちゃったし、もうそろそろカクレンボは終わりにしようよ王」
「お、う……？」
「しらばっくれても無駄だ」
彼女の口が大きく裂けた。覗くのはずらりと並ぶ牙。
そう、有希を襲ってきた妙な“鬼”にそっくりな。
「指輪を寄越せ！」
こもった獣の低い声が吼えた。
と同時に、制服の下がぼこぼこと隆起した。布を破って筋肉が盛り上がり、小さかった身体にどういう風に収まっていたのか疑問なほど体躯は巨大になった。
青黒い身体、筋肉質の四肢は、腕だけでも有希の太ももより太い。身体の割に小さな頭のてっぺんには二本のゆがんだ角。
ぎらぎらと赤黒い一対の瞳が有希をにらみ、大きく裂けた口から長い舌が現れた。
「なぜそんなに驚く？我らが追って来ないとでも思ったか。甘い！甘いぞ！我らが王国を治める王でありながら出奔した貴様のことを、誰もが失望し、怒り、見限った！貴様はすでに指輪に選ばれし王などではない！」
鬼が片手を振りかぶった。
ズン、と胃に響く地鳴りのあとに窓ガラスが派手に割れた。
ガラスの破片が散る中で、有希は後退りした。どうして足が動いてよけられたのかわからない。けれど横に跳んで何とか直撃を免れた彼は、壁伝いに距離を取った。
震えてる。
足ががくがくしてる。
だって当たり前だよ。何だよコレ。何でオンナノコが怪物に変身

するんだよ。何で王だとか指輪が何だとかわけわかんねぇこと言って襲って来るんだよ。身に覚えねぇよ。
———どこから襲ってくるとも限らない。気をつけろよ———
シャンの馬鹿ヤロー！こんなん気を付けてたって太刀打ちできなきゃどうしようもねえじゃん！
有希は自分を落ち着かせるために時間稼ぎをしようと口を開いた。
「お、お前まさか、最近ここらで起こってる事件の犯人か？」
情けないことに声まで震えている。深く呼吸しながら心臓をなだめて、鬼の動きを少しだって見逃さないように集中した。
「何を今さら。先程も言ったではないか。６人平らげた、とな……オトモダチももうちょっとで食べられるところだったのに邪魔されたのよ。惜しかったなぁ」
鬼の被り物の中に二人入って話しているみたいに、こもった低い声と甘い女の子の声が答えた。
お友達、と有希は鸚鵡返しに言った。
「そう。和泉冬馬クン」
さっと全身の血が床に吸い尽くされた、そう思うぐらい血の気が引いた。
まさか冬馬にまで手を出していたなんて。
鬼は一歩距離を詰めた。鋭い鉤爪のついた手を伸ばす。
「さあ、観念して指輪を寄越したらどうだ？貴様はすでに王の資格などないのだからな」
「っ待てよ！人違いだ、絶対間違えてる。俺は王じゃない」
「まだ言うか、言い訳なぞ不要だ！かつて王位継承権を得るための戦いで屍王と呼ばれた貴様がそこまで腑抜けになったというならば、我が手で捻り潰してくれる！そして指輪を手にし、我こそが次の王となるのだ！！」
鬼の手が有希を捕まえようと迫ってきた。
きびすを返して走ったが足がもつれた。落ち着けば逃げ切れると思ったけれど、恐怖で震えている身体を制御することは簡単ではな

く無様につまずいた。
手が虚空を掻く。
うまく立ち上がれずにいると鬼の手が有希の身体を鷲掴み、教室の扉を破って廊下の壁に押し付けた。
それは押し付けられたというよりも激突したと言った方が正しいほどの衝撃があった。
勢いで目がチカチカ頭はくらくらする中で、身体が締め付けられて悲鳴を上げていることだけはわかった。
「…っぐ……はっ」
「戦う気はないのか。誇りまで無くしたか！王よ！」
目の前で鬼が吼えた。声が振動となって有希の身体を打つ。
そのとき。
「か、ん」
神田君、そう小さく聞こえた気がした。瞳だけ動かして見ると、そこには茜が呆然と突っ立っている。
空耳ではないらしい。幻でもないようだ。
目を見開いた茜の視線は鬼に注がれていた。
「それ、何……どうして神田君が」
襲われてるの、と言う声は震えてうまく発音されなかった。
有希はぼやけてうまく見えない視界で、目一杯茜の姿を捕らえようとした。
「……げ、ろ」
逃げろ。
どうしてここにいるんだ。
早く、ぼさっとしてねぇで。
逃げろ！
「何だぁ、小娘……邪魔だ！」
鬼は肉食獣のように牙を剥き出して威嚇した。
有希を捕らえている手にも力が入り、とうとうどこかが折れた音がした。

ドクン、と大きく心臓が跳ねる。
「っぐおあ！」
瞬間、鬼は胸部に強い衝撃を覚えて悲鳴を上げた。そのまま何メートルか後ろに吹っ飛ぶ。
化け物の巨体が吹っ飛んだのを目の当たりにして驚きつつも、まだ突っ立っていた茜は何かに腹部を押されて妙な声を出した。一拍置いてから誰かに担ぎ上げられているのだと気付く。
走ってる？
早い！びゅんびゅん景色が変わってく。
何で？どうしてこんなんなってるの？
車から上半身を出している気分。実際やったら危険だけど。
誰これ？神田君？神田君だよね？
「きゃんだきゅんんん～！？」
確認をしたら、鋭い声が飛んできた。
「何で戻ってきた！帰ったんじゃなかったのか？！」
あ。神田君だ。
「わすれもろ、したの」
揺れてうまくしゃべれない。
有希は何と言ったのか聞き返すことはせず、逃げることだけを考えた。
「下りるぞ！頭上げるなよ」
下りるってどこから？
聞く間も無く有希は開いている窓から飛び出した。茜の頭がぶつからないように器用に上体を倒して、ついでにスカートも押さえた。
女子高生がパンツ丸見えはまずいだろう。一応配慮する。
「きゃ――っやだやだどうなってどこ触ってるのふっ！」
肩に担がれている茜は進行方向と逆向きなのでこれから起こることが分からない。分かるのは事が進んでからなので、なぜか窓が遠ざかって浮遊感があって落下してガクンと首が上下したのも心構え無しに起こった。

だから着地したときに舌を噛んだ。
しゃべっているからだ。ちょっと自業自得。
「もうらめ、おろひて〜」
半泣き状態で懇願した茜はやっとこさ地面に下ろされた。下駄箱のすぐ近くだ。
両手で口を押さえてその場にへたり込む。舌ベロ痛い。
有希もその場に膝をついた。息が上がってゼェゼェと喉が鳴る。心臓が脈打つ音が耳の奥まで響いていて、心臓が胸と頭の中の二箇所にあるみたいだ。
血が足りない。
直感でそう思った。
多分、今、俺はヴァンパイアになってる。だけど、活動できるほど血を飲んだわけじゃない。だから血を欲してる。
長い爪のある手で顔面を覆った。
苦しそうに呼吸する有希の様子が尋常ではなくて、茜は恐る恐る聞いた。
「か、神田君……大丈夫？」
「……を」
「え？」
有希は大儀そうに頭を上げた。顔がなんとなく青白く、生気がない。それでも眼光は鋭くて、飢えた獣のように茜を見る。
「……血を、くれ。少しでいい……少しでいいんだ」
「へあ？ちちちち血でいいのならいくらでも。私血の気多いんで」
最後まで言い終わらないうちに有希は茜の首筋に噛み付いていた。
「っ！？」
茜は皮膚に小さく何かが刺さったような感触に肩をすくませた。首という柔らかい肌に吸い付いた唇がわずかに動くたびに、茜は顔と言わず身体まで熱くなる気がした。
や、やだ、何かすごいドキドキしてる……。
吐く息が熱い、と感じた頃に唇が離れてほっとした。が、牙を立

てたところから溢れる血を丁寧に舌で舐め取るので、とうとう茜は声を上げる。
「待って、もう大丈夫だから、もういっぱい一杯だから！」
その叫びでどうやら我に返ったらしい有希は、「悪い」と慌てて謝った。極めつけに、ふ、と吐息が首筋を撫でて、茜はついに腰が抜けた。赤い頬を手で挟んで、立ち上がった有希をちらと見上げると、　彼の伏せた瞳が宝石のように赤いことに目がいく。
おかしいな、と何度かまたたいたときに、突然下駄箱が音を立ててドミノ倒しになった。土埃の中から現れた鬼は薄く開いた口から息を吐き出す。
「逃げるのはやめか、王！そうでなければ面白くない！」
有希は鬼に向き直った。
「王じゃねぇっつってんだろ勘違いヤロー！いいぜ、痛い目見ないと帰らないってんなら相手してやる」
指を鳴らして不敵に微笑んだ。
地面を蹴る。
わずかな残像と風を残してまたたく間に鬼の眼前へ現れた。鬼が防御を取る前に横っ面に蹴りがヒットする。素早く滑らかな動きでスピードを殺さずにふわりと半回転して、今度は反対の足で蹴り飛ばした。
鬼はうめいて吹き飛ばされるが、その背後に瞬時に移動した有希は頭蓋に肘鉄を喰らわせる。
硬そうな音がして鬼の身体は床に叩きつけられ、鞠のように一度弾んだ。
無防備な身体に手をかけて、太い腕を引きちぎる。
「ぎゃああぁぁぁぁぁっ！」
肩から先の鬼の腕を丸ごとぶら下げた有希は絶叫に顔をしかめた。
痙攣する腕をぽいと投げる。
「今すぐ帰るなら見逃してやってもいいぞ！どうする？」
指先に付着した血を舐め取ると、有希は満足そうに目を細めて笑

った。
「ぐっ……動きが見違えたぞ」
なぜだ、と唸った鬼は蒸気機関から出る蒸気のような、ふしゅーという音をさせながら呼吸をした。
その一連の様子を息を呑んで見ていた茜は、放り投げられた腕がまだ生きているように跳ねて、指がぞろぞろと動くのを見た。
鋭い爪の先は無防備な有希の背中を向いている。
嫌な予感がした。
「神田君！！」
腰が抜けていたはずなのに立ち上がった茜は、有希と腕の間に飛び込んだ。

闇の胎動8

悲鳴のような声が自分の名前を呼んだ。
振り返って、最初に視界に映ったのはこっちに走ってくる茜だった。
泣きそうだ。
何でだ、という考えが頭を掠めたとき、彼女は息を詰めたように見えた。
見開いた目は焦点が合っていない。
体当たりするように倒れこんできた身体を抱きとめた。
「みや……」
有希はひくりと息を呑んだ。
茜の背中には鋭い爪が5本、深々と突き刺さっていた。
勢いに押されて後ろに一緒に倒れ込む。力なくぐったりとした身体を抱きかかえると、傷口からじわじわと血が滲んでくる。
爪はまだ刺さったまま、意思を持っているかのようにぎしぎしと動き傷口を広げる。
「やめろ！」
無理矢理引き抜くと湿った音と共に鮮血が散り、茜の身体がビクンと跳ねた。
しまった、そう思ったが遅かった。爪によって塞がれていた穴から見る見るうちに血が溢れて、白いブラウスを汚していく。
止まれ！止まってくれ！
とっさに手で押さえるが止血しているわけではないので、脈打ちながら流れていくそれを止められない。手が真っ赤に染まった。
心臓の鼓動が徐々に小さくなっていく。
「ま……っ、宮野さ…」
有希は泣きそうになった。
だから、背後で鬼が首を狙っていることに気がつかなかった。

「っ覚悟！」
鬼が吼えて手を薙いだのと、何かが有希の横をすり抜けたのは同時だった。
ゴッ、と強打した音のあとに小さくうめき声が、続いて爆発したような音が何回かした。一瞬の内に何が起こったのかわからず戸惑いながら振り返る。壁にトラックが突っ込んだみたいな大きな穴が開いていた。
土煙がもうもうと立っている。その中で、校舎と校舎の間の中庭を挟んだ向こう側まで鬼が吹き飛んでいるのがかすかに見えた。向こうの校舎にも穴が開いている。
キラ、と視界の端で何かが光った。
人だ。
その人が振り返ると、銀色の細い糸のような長い髪がさらさらと舞った。
女だ。浮世離れした美しい女。小さな顔に陶磁器のようなすべらかな肌、意思の強そうな青い瞳、桃色の唇は微笑を浮かべている。
「悪い。遅くなった」
有希はぽかんとした。誰に言ってるんだ？俺にか？俺しかいないよな。
女は肩にかかった髪を払った。
「いや何、着替えていたらな、どうも気分にぴったりの服が決まらなくてなぁ」
そう言ってからからと笑う女の格好は、今流行（はやり）のフリルがたっぷりついたシャツブラウスに柄物のスカートだ。普通にそこらへんを歩いている女性と同じものである。
似合ってはいるのだが、服があまりに普通すぎて本体とのバランスが悪い。
雰囲気的には女はドレスとかを着ていそうだ。つばの広い羽根付きの帽子とかもかぶって、ビラビラした豪華な、昔のヨーロッパっぽいドレス。

こんな知り合いいないし、いたら怖いし、と有希が不審そうに見ると、お嬢女は彼の腕の中にいる少女を見やってふと笑みを消した。
「娘を助けたいか？」
真顔でそう言った女にやはり覚えはなかった。が、記憶のどこかに懐かしさを感じずにはいられない。
このちょっと偉そうな話し方。
「……シャン？」
自分はヴァンパイアだと言った飼い猫が頭に浮かんだ。
お嬢女はわずかに眉を跳ねただけで「そうだ」とも「違う」とも答えなかった。ちらと横目で背後を確認して急いた。
「時間が無い。さっさと答えろ。助けるのか、助けなくていいのか」
「た、たすけたい」
「それには魂が必要だ。器が壊れて、魂が離れようとしている。それを繋いでおくには誰かの魂を使うしかない」
言わんとしていることが理解できず、有希は眉根を寄せたまま女をじっと見た。女は早口で続ける。
「お前をこの間まで人として繋ぎとめていたもの、それは魂だ。ジルと話し合って、お前のなかにはそれが二つあったという結論になった。ジルはあとからそういった事例が古い文献に載っていたと言っていたが」
ジルと聞いて、この女がやはりシャン———シャリアンなのだということを頭のどこかで確認した。それをじっくり考えているほど有希には余裕がなかったので、その考えはすぐにどこかへ消える。
シャリアンは腕を組むと有希を真っ直ぐに見た。
「それでお前が一時的にヴァンパイア化する謎が解けた。この間まではヴァンパイアとしての魂を包む、人としての魂が存在していた。つまり二種類のものが一つの器に入っていたわけだが、お前がヴァンパイアとして覚醒したとき人としての魂は弾けて一方に吸収されてしまった」
今度は噛み締めるように言った。

「何が言いたいのかもうわかるな？一方に吸収された人のものだけを取り出し、娘の魂を繋ぎとめることが出来ればあるいは……」
「やってくれ」
いっときもためらわずに有希は返した。
シャリアンは組んでいた腕を解き、細い指先を有希に突きつける。
「取り出すとお前は人には戻れない。それでもやるか？」
「やってくれ！」
シャリアンを見返す瞳にも、声にもためらい無く、はっきりと答えた。
彼女は満足そうに口角を吊り上げる。
「いいだろう」
突然シャリアンは有希の胸座を掴むと左右に引っ張った。ボタンが弾けて何個か飛んでいく。
「何すん…っ」
文句を言ういとまも与えずシャリアンは次の行動に移った。
自分の指先を噛み、裂けた皮膚から血が溢れる。それで有希の胸の中央———心臓の真上に円を描く。その他にも妙な図形らしきものや文字を描き、その間ずっと何かぶつぶつと呟いていた。
すると、円の中からわっと光が溢れた。シャリアンは、まぶしくて反射的に目を閉じた有希の頭を掴み、噛み千切った指を舐めて短く言った。
「痛むぞ」
光の中に手を突っ込む。
瞬間、電流を流されたような痛みが身体中を駆け巡った。
「っあああぁぁあぁあああぁぁぁ！！」
胸に穴を開けられて、体内をまさぐられているみたいだ。全身痺れて、すでに痛いという感覚すらどこかへ消える。その中でも胸だけははっきりと痛みを感じる。
これは痛いなんてもんじゃない。電流を流されて何度も何度も刺されて酸か何かで溶かされてる。

とにかく心臓が酷い仕打ちを受けていることだけはわかる。
頭に響く脈が早くて、ときどき乱れた。
「あった…！」
シャリアンが手を引き抜いた。途端に光は消えて胸には血の図形だけが残っていた。
「…っは、……っ」
有希は全身で大きく呼吸した。肺が稼動しすぎで爆発しそうだ。冬の行事、マラソン大会で１０キロ走ったってこんなに息切れしない。
嫌な汗をびっしょりとかいていて、額から流れてきた汗が目に入った。拭うのも面倒だ。
そのとき、向こうの校舎で失神していた鬼が立ち上がり、足を引きずり青い血を撒き散らしながらこちらへ近寄ってきた。
シャリアンは蝋燭の炎のように小さく淡く輝く何かを手にしながら舌打ちをした。
「半死人め、身体だけは頑丈だな。ユキ！足止めをしてこい。邪魔をされてはかなわん」
「……む、り」
「無理じゃない！」
怒鳴ってぐたっとしている茜の身体を持ち上げると、背中の傷口を有希の口元へ持っていった。
血の芳しい香りが鼻孔をくすぐる。
飲まなきゃ立てないとか、飲まなきゃ戦えないとかっていう考えは思い浮かばず、ただ無心に目の前に現れた餌に食いついた。
血をすすって体力が戻ってくると余裕が生まれて、頭の片隅で自分は本当にヴァンパイアになってしまったのだと理解した。
「行けるな？」
茜をシャリアンに預けて立ち上がった有希は口元を拭って、彼女の確信を込めた問いに答えた。
「行ける。あいつが狙ってんのは俺だけだ、安心して術でもなんで

もかけてろ」
飛び出して行った有希の姿を視界の端で捉え、ふっと口角を上げた。
「生意気な」
楽しそうに呟くとシャリアンは茜の血で指先を濡らし、仰向けにするとブラウスを引き千切る。そうして茜の血で胸に先程のような図形を描き始めた。

身体が軽い。さっきまでの痛みや疲労感が嘘みたいだ。
ふわりと体重を感じさせない動きで鬼の前に立った。鬼は相当深手を負っており、頭からは青い血が流れているし、腹部にはぽっかりと穴が開いていた。それでも動いている。
蒸気機関車のような荒い呼吸を繰り返していた。
「指、環…を寄越せ……」
「指輪なんか持ってない。もし持っててもお前には渡さない。今すぐ帰れ。そうしたら見逃してやるよ、死に損い」
「このぉ…っ！」
ぶふぉ、と鼻息を噴いた鬼が残った片腕を振り下ろした。耳を貸さない鬼に舌打ちをし、横に移動することでそれをよける。前かがみになって近くなった頭を鷲掴んだ。
「帰らないのか、本当に。二度と俺の前に姿を現さなきゃそれでいいんだ」
このまま戦い続けたらいつか殺さなきゃならなくなる。殺らなきゃ殺られるだけだ。
でも、怪物と言えど手にかけたくない、そう思っているのに鬼は口をゆがめて笑った。
「世迷い事を。貴様の存在がある限り、その命、王の証を狙い続けるに決まっておるだろうが」
「そうか」

手に、指に力を込める。
みしみしと頭蓋が軋み、鬼は野太い悲鳴を上げた。
「…っおおおおおぉぉぉぉ！」
握力で頭蓋が割れてかけらが吹き飛んだ。それが地面に転がる前に、腕から足から頭からどんどん砂のようになって崩れて、風に吹き飛ばされてしまった。
手についた青い血も粉になってしまい、有希はそれを指先でつまんだ。
「灰…」
「カタがついたか」
振り返ると、そこには茜を抱えたシャリアンが立っていた。
「無事に……」
魂を繋ぎとめられたか、と聞こうとしたが、その声を遮るものがあった。
「チチチチチチチミ！何だねこの騒ぎは！チミがやったのかね！？そそそそれに何だねそのふざけた格好は？！後ろに立っている者も何者だね？！」
裏返った声を上げたのはチビデブな教師だった。
散々ガラスを割ったり壁をぶち破ったり派手に器物損壊したのに、随分遅い登場だ。でも登場したらしたで説明が面倒臭い。
大体何て言やあいいわけ？
思案顔というかほぼ教師をにらんでいると言っても過言ではないほど怖い顔をしている有希に、教師は携帯のバイブレーションもびっくりなほどぶるぶるしながら指を差した。
「んなななな何とか言ったらどうにゃのかにぇっチミはぁ！」
途中噛んだ。
周りからぷっと吹き出した音がいくつか聞こえた。いつのまにか部活動中だった人々やまだ校舎に残っていた人々、つまり野次馬に囲まれていた。
シャリアンが大きくため息をつく。

「人間は面倒だから嫌いなんだ」
青い瞳が光を弾いたように輝いた。
その場にいた全員と言わず、校舎から覗いている人までも魂が抜けたように口が半開きになった。
「あ――…うわあぁぁぁ大変だ警察呼んで警察！トラックが校舎に突っ込んだ！！」
我に返った一人が叫ぶと、風船が次々と割れるようにして全員が目を覚まし、中庭は大騒ぎになった。
そこに怪しい銀髪の女やその腕に抱かれた女子学生や、怪しい格好をした男子学生の姿は無かった。

「おいっ、シャン！シャリアン！」
後ろから追い駆けてきた声に肩越しにちらっとだけ振り返る。そうしてシャリアンはある家の屋根で止まった。屋根から屋根を跳躍して渡っていた有希はやっと止まったシャリアンをちょっと怒った様子で見る。
「逃げてきて良かったのか？」
「何だそんなことか。問題ない。今頃トラックが突っ込んだとかで警察が呼ばれているだろう」
そう言われれば遠くでサイレンが聞こえる。
耳を澄ましていた有希を置いて、シャリアンはその家の2階のベランダに下りた。近くの窓を勝手に開けて入っていく。
「あっ！人ん家勝手に」
「馬鹿もん自分の家だ」
続いて下りた有希はそこが自分の部屋だということを知った。
「あ、俺の部屋……」
上から見ていたから気付かなかった。下からは普通に帰ってきたことはあるけど、上から帰ってくることなんて貴重だから。
並外れた握力、跳躍力、そして血をすすっていた自分。

有希は手のひらを見下ろした。爪が獣のそれのように尖っている。茜の血がかさかさになって赤黒く変色してこびりついていた。
「おい！娘の寝床を用意しろ」
有希の部屋の扉から顔を覗かせたシャリアンは言った。
「おー、分かった」
高圧的な物言いにしぶしぶ答えて有希は彼女の横を通り過ぎた。
「ユキ」
呼ばれて、１階へ下りる階段を進んでいた有希は振り仰いだ。妙に真剣な表情のシャリアンは低い声で言った。
「話がある。寝床を用意したら話そう」

シャリアンが茜の身体を拭いて着替えさせている間に有希は畳の部屋に客用の布団を敷いた。そこへ寝かせて静かに襖を閉めたシャリアンは真面目な顔で切り出した。
「お前を襲ってきた奴、あれはデーモン――――悪魔だ」
てっきり鬼だと思っていた。
「昨夜私は“なぜユキを狙ったのかわからない”と言ったが、それは嘘だ。理由はわかっていた。あえて言わなかったのは、まさか奴らがジルとお前を間違えて、本当に襲うとは思っていなかったからだ」
「その、理由って？」
シャリアンはふと目を伏せた。瞳に憂いが隠れ見えた気がしたが、次に有希を見たときにはいつも通りだった。
射抜くような鋭い瞳。
「奴らの狙いはジルが所持している王の証、クリンキルメルの指輪だ」
襲われている間に何度も聞いた“指輪”という単語に反応して、有希はわずかに顔をしかめた。

闇の胎動9

「王の証、クリンキルメルの指輪……」
有希はシャリアンの言葉を復唱した。彼女は腕組みをし、難しい顔で頷く。
「そうだ。ジルは、人狼や魔女、その他の魔物と呼ばれる者たちが棲む“常夜の国”を治める王だった。出奔して十数年、奴らは空白の王座を狙って常夜の国から指輪を奪いにやってきた。その中の一匹がさっきお前が倒したデーモンだ」
有希は言葉を無くした。
父親がそんな重要な地位にいる人だったなんて知らなかった。
シャリアンは椅子にどっかと腰掛けて、高々と足を組んだ。
「王になるには指輪に選ばれなければならない」
「じゃあ、指輪をさっさと誰かに渡せば」
「それは出来ないな。簡単に人に譲れるものではない。聞いた話だがそれは指輪の形をしておらず、選ばれた者の肉体と精神、そして魂に深く溶け込むものだと。それを明け渡すには己の命を絶つしかない」
有希は鳥肌が立った。背筋に氷を放り込まれたみたいだ。
己の命を絶つしかない？
それじゃあ親父はこれからずっとあんなものに狙われ続けるってことか？
愕然とした。動き出した、宿命という逃れられない歯車に呑み込まれて行く音を確かに聞きながら。
知らないふりは出来ない。宿命からは逃げられない。
「時は迫っている、悠長なことはしていられない」
「何？」
ぼそっと呟いたシャリアンの言葉が聞き取れなくて、有希は聞き返した。

テーブルに頬杖をついたので、手の平に押された彼女の顔がゆがんだ。
「いや。ユキにも王になるチャンスはある。お前はすでにあちらに棲むべき者、ヴァンパイアなのだから」
「俺は…」
王座なんかいらない。
戦いたくない。
「ヴァンパイア、なんて」
知りたくなかった。
自分の手を見下ろした。さっき洗ったのでこびりついた血は取れたが、鬼――デーモンの頭を砕いた感触は取れなかった。
常夜の国から数多の魔物たちが来るという。ならば、自分はそれと戦う宿命にある。
王座を欲してではない。
父親を無くさないために。
「王無く、混沌としている今、奴らがこちら側へ来るために境界が開いている。境界が曖昧だとこちらの者が向こうへ流れてしまうこともあるし、奴らが大群で来るのはいただけないな。いずれにせよ、ジルは早々に国へ戻らなければならない」
シャリアンは頬杖をやめると斜に有希を見上げた。
「そのときはユキ、お前も来るんだ」
「何でだよ！？」
「なぜ？それならば逆に聞こう。なぜお前はこちらに残りたいんだ？もう人ではない。人には戻れない。他の者たちと違う。その中で己を隠し通せるのか？もし露見したらどうする。人間は自分とは違う者を恐れる。自分たちとは明らかに違うお前を、よもや受け入れるとは思えん」
有希はめまいで世界が回っているような錯覚に襲われた。続けてシャリアンはまくし立てた。
「友もいずれ友では無くなる。全て捨てて、向こうへ行くしかない

んだ。ここにお前の居場所はない。お前が向こうに行くときには、お前とかかわった人間たちの記憶を消すことが出来るからな」
有希の所だけ、ぽっかりと。
有希は膨大な量の情報を一気に頭に詰め込まれたみたいにぐちゃぐちゃして、うまく整理できずにめまいがした。
戸惑いを隠しきれない有希を見て、シャリアンはため息をつく。
「あと一つ、重要な話がある。娘を起こして来い」
すぐには動けない彼にもう一度言った。
「娘を起こして来い。これからする話は娘にも関係のあるものだ」
「でも、起きてるかどうか」
わからない、という声と、起こして来い、という声が重なった。
よろよろと頼りなく畳の部屋へ近付くと、彼は襖を静かに開けた。

ぼんやりとした中で誰かの話し声が聞こえて目が覚めた。
誰だろう、おじさんじゃない。おばさんでもない。
自分が横になっていることがわかった。でも、自分のベッドじゃない。
真新しいような、太陽の匂いのする掛け布団だ。
ここ、どこだろう。
「――――指輪――――選ばれ……」
襖を隔てた向こうから会話の単語が拾えた。女の人の声だ。でも随分偉そう。
それに対して低い声――多分男の人だろう――が何かを答えた。こちらは小さくてよく聞こえない。
茜はゆっくりと起き上がって周りの様子を窺いながら、そろそろと襖のすぐ側まで這って行った。襖と襖の間から覗くと、ちょうど誰かの後姿と、組まれた白い足だけが見えた。
本当に細い隙間からだからそれ以上はどうやっても見えない。
でも、あの後姿は見覚えがあった。薄汚れているが、あの白いワ

イシャツに薄いグレーのズボンは森園高校のものだ。
「何？」
それに、この声。
神田君だ。
何で？どうして私が神田君の家……だよね、多分きっと……にいるの？
何があったんだっけ……？
「いや。ユキにも王になるチャンスはある。お前はすでに向こうに棲むべき者、ヴァンパイアなのだから」
ぶわっ、ヴァンパイア？！
聞き間違いじゃないよね？それともまだ寝てるのかな。
ばばばばばヴァンパイアって吸血鬼？そうだよね？
神田君がヴァンパイアってどういうことなの？
というか、私が聞いていいい話なのコレ？！
茜が一人であわあわと慌てているといつの間にやら会話は進んでいて、有希がこちらへ向かってくるところだった。
茜は硬直して覗いている態勢から動けない。
どうしよう！
盗み聞きしたという罪悪感から、この状況がどうしようもないとわかっているけれど逃げ場はないものかと硬直しながら考えた。
答えが出ないまま、す、と襖が静かに開いた。

闇の胎動１０

布団はもぬけの殻だった。
有希は見間違いではないと確認するために何度かまたたく。
「下だ、足元」
シャリアンがあきれてため息交じりにそう言ったが、何が？と一向に気がつかない有希はひょいと足元を見た。
「……」
何事も無かったかのように有希は襖を閉めた。
おい、とツッコむ声が飛んでくる。シャリアンは立ち上がると有希を押しのけた。
「なぜ閉める」
「いや、だだだ、だって」
「だっても何もない。娘、どこから聞いていた」
両手でズバン！と勢い良く開けた。威圧するように見下ろしたシャリアンのすぐ真下に、完全に硬直した茜が座っている。
口が酸素の足りない金魚よりは控えめにぱくぱくしているが、完璧に思考が停止している。
そりゃそうだ。突然耳を疑うような会話が聞こえてきて、しかも銀髪のこの世のものとは思えないお姉さんに威嚇されては、魂も吹っ飛ぶ。
「聞いているのか？」
「きゃあああぁぁぁぁっ！」
伸ばされたシャリアンの手に過剰反応を示し、茜は半泣きで後ずさった。わけがわからなくなっている茜は布団の上でこけて、さらに掛け布団を掻き集めて盾にした。
「ごめんなさい何も聞いてないです神田君がヴァンパイアなんて、私、私……あれ…？私」
どうして生きているんだろう。

ぽかんとした茜が何を不思議に思っているのかを理解しているシャリアンは、さっきよりは落ち着いた声で言った。
「ユキが、己の魂をお前に捧げた」
「ゆ、き……？神田君、が……私に何を…？え？」
シャリアンは噛み締めるようにゆっくりと説明する。
「お前の肉体は壊れて、魂が離れようとしていた。すなわち死にそうだった。魂を繋ぎとめるには他の誰かの魂が必要だ。その魂が、ユキのものだ」
「……じゃあ、私、死ななかったんだ。でも、タマシイ取っちゃったら死んじゃうんだよね？そこにいる神田君は幽霊？」
「ユキは二つの魂を持っていた。そのうちの一つをお前にやったのだ」
茜はぽかんとしたまま黙ってしまった。
理解が追いつかなくても仕方の無いことだ。確かに死んだと思ったのに、誰かによって生かされたという真実。
ましてや魂がどうだなどという話は、人間にとって夢物語に近い。
茜は当社比５０％アップぐらいぽかんとしながら、ええっと、と言葉を続けた。
「えと、あの、神田君がヴァンパイアっていうのは」
シャリアンは茜を斜に見やった。何やら機嫌が悪いのか、視線だけで射殺せそうだ。
そんな突き刺さりそうな視線を浴びた茜はびくりとすくむ。
「人としての魂はお前にやった。だから残った魂がヴァンパイアのものだった。人としての殻が砕けた今、ユキはもう、完全にヴァンパイアだ」
渋面のシャリアンに恐る恐る有希は聞いた。
「話ってこれ？」
「違う」
キッとばかりに鋭くにらまれて有希は縮こまった。きつい顔のままシャリアンは腕を組む。

「お前、盟約したな？」
「は？めい…やく？」
“血の盟約”だ。ヴァンパイアに古くから伝わる一種の呪術。ヴァンパイアの生命活動を維持するための食料、血を提供する者を一人に限定することにより完全高速再生、力の増幅など特殊な能力が手に入る――――お前、その娘と盟約を結んだな」
有希は考えに考えて視線を泳がせた。
「身に覚え、ないけど」
「血を貰う前に許しを得なかったか？そして娘、それを許可しなかったか？」
確かに茜から血を貰った。そのときのことを思い出そうとするが、なにぶんかなり必死だったため時間がかかる。
記憶もおぼろげだ。
そう言われれば、くれとかナントカ言ったような気が…。

『……血を、くれ。少しでいい……少しでいいんだ』
『へあ？ちちちち血でいいのならいくらでも。私血の気多いんで』

有希はやっとはっきり思い出して、ああ～、と気の抜けた声で言うと頷いた。
「俺がくれって言って、宮野さんはどうぞみたいなこと言ってたな」
「それだ。血の盟約は紙もペンも魔方陣もいらない代わりに言葉が鍵になっている」
「でも、普通はそういうこと言うんじゃねえの？」
「馬鹿もん。普通は許しなど乞わん。魅了する力があるのだから虜にして食餌すればいいだけの話だ。どこにわざわざ許しを得てから食餌する馬鹿がいる」
ヴァンパイアの常識がよくわからない。
人間は食事する前に「いただきます」って言うじゃん。あれとは別物なのか？？

微妙な顔をしていたら、彼女は少し怒ったように唇を尖らせる。
「ユキはこれからさばかれて肉になってトンカツになる豚にわざわざ“食べていいですか？”と聞くか？聞かんだろう。それと一緒だ」
「いや…自給自足じゃねぇから養豚場なんか近くにねぇし」
豚とは接触する機会ありません、と遠慮気味に小さく言う。
そっぽを向くと、ふん、とシャリアンは鼻を鳴らした。
「とにかく、盟約は一度結ぶと解除できないものだ。ユキはこれから娘の血しか飲めなくなったわけだな」
「えぇ――――っ！待ってよ、それはちょっと困る…」
声を上げたのは茜で、徐々に尻すぼみになった。シャリアンは不思議そうな顔で眉を跳ねる。
「なぜだ。ミイラになるほど血を貰うわけではない。それに噛んだときの傷なら残らないぞ。ヴァンパイアの唾液には治癒できる力があるから」
「えと、そうじゃなくて」
首筋を押さえて顔を真っ赤にした茜はうつむいた。
その様子を見たシャリアンは合点がいった。ヴァンパイアだけれど女であるし、十数年は人の世で暮らしていたので学んだこともある。
「若いな…」
ふふ、と含み笑いを浮かべた彼女を、有希は怪訝そうに見た。
「誰が？」
「お前、ニブイな」
鼻で笑われた。
茜はなんとなく気まずそうに口を挟む。
「あの、どうして私、制服着てないの？」
「血がべったりだったから、寝かせるのにそれはまずいだろうと思って。ウチにある女物の服っていうとお袋の昔のだし、俺ので悪いんだけど」
途端、茜の表情がさっと固くなったのを有希は見逃さなかった。

「心配しなくても着替えさせたのはシャリアンだから。そこまで失礼なことしないし」
「う、うん。あの、シャリアンさん、背中…の……」
茜は口ごもってしまった。何を聞きたいのかがうまく読み取れなくて、シャリアンは小首をかしげる。
「案ずるな。背中に傷は残っていない」
「そ、そですか。……私、帰るね。ごめんなさい、お布団まで出してもらってお世話になりました」
立ち上がった茜が布団をたたもうとしたので、有希はそれをやんわり止めた。
「布団は俺がやるからいいよ。それより何着て帰る？制服はちょっと無理だと思うんだよなぁ」
申し訳なさそうに差し出されたブラウスを見て危うく失神するところだった。
背中にあたる部分に無残にいくつも穴が開いており、乾いた血でぱりぱりになっている。刑事もののドラマに小道具として出てきそうだ。
「あっ、でも、宮野さん、ほら、スカート無事だったからさ」
倒れられてはかなわないので慌てて有希はブラウスを引っ込め、スカートを渡した。
呆然とそれを受け取った茜はぽつりと小さく呟く。
「死んだなって」
「ん？」
有希が小首をかしげると、茜はスカートをぎゅっと抱き締めた。落とした視線はどこか遠くを見るようにぼんやりしている。
「あのとき、“あ、私死んだな”ってはっきり思ったの。不思議。死ぬことなんて経験したことないのに、そういうのってわかるんだね」
「ごめんな、巻き込んだ…俺の責任だ。あのとき逃げろって言えればよかったんだけど、俺もアイツの相手で手一杯だったから気が回

らなくて。ほんと、ごめん」
焦りがどこからか生まれて少し早口になった。
消えてしまいそうだ。
意識して何かで繋いでおかないと、どこかへふっと消えてしまいそうだ。有希の目には、今の彼女は手のひらに舞い降りた雪のかけらのように儚く危うげに映った。
「宮野さん？」
不安に駆られて思わず腕を掴んだ。ぼんやりしていた茜は夢から覚めたようにはっとして視線を忙しなく動かす。
「うん、でも大丈夫だったから。私こそ、神田君のタマシイ貰っちゃったみたいで、ごめんね」
いつも通り、くすぐったそうに笑った。
「神田君のって意識しちゃうとなんだか恥ずかしい」
有希もつられてかすかに笑ったが、ふっとうつむいた。
「本当に、巻き込んでごめん」
巻き込んだのは事実だが、有希をかばったのは茜の意思だった。有希は、怪我をさせてしまったことも自分のせいだと思っている。
それに気付いて、茜は首を横に振った。
「今回怪我したのは私が勝手に飛び込んだからだよ。神田君のせいじゃない。だから謝らないで」
「でも、知らない間に盟約だか何だかも交わしてたし。解約する方法とか、あればいいんだけど」
有希は視線を落とした。解除する方法がないなんて、救いようがない。
「大丈夫。あの……慣れるようにするから」
頬を染めた茜につられて、有希も彼女でもない女の子の首に噛み付いたことを思い出して恥ずかしいことをしたのだと自覚した。
「ご、ごめんな」
顔が熱い。今さら気付くなんてシャリアンの言ったとおりニブイのかも。

恥ずかしさで口元を押さえると、蚊の鳴くような小さい声で謝った。

会社帰りの緋呂は申し訳程度に街灯の点いている住宅地を歩いていた。

夜になると駅周辺はまだ人の気配があるものの、少し離れるとそういった気配すらなくなる。

闇ばかりが潜んでいる。

一戸建てが規則正しく並んでいるので十字路がたくさんある。緋呂は街灯が切れている十字路の手前で突然姿勢を落とし、駆け出した。

またたきよりも短い間で顔の作りが変わった。風になびく髪も伸びる。仮の姿から元に戻った彼は、わっと覆い被さるようにして十字路から現れた影を爪で裂いた。

音も無く、風のように。

立ち止まって露を払うと、払った先から灰になった。

四辻は危険だ。あちらとの境界が曖昧な今、暗闇は油断できない。

「……っ」

途端に苦しそうに息を詰めるとジルは胸を握り締めた。大きく打つ鼓動に合わせて、それとは違う強い力も脈打っている。

「時間が、ない」

唸るように言って、地を蹴った。

すると、一陣の風を残してふっと姿が掻き消えた。

そばにいて1

『出奔して十数年、奴らは空白の王座を狙って常夜の国から指輪を奪いにやってきた』
『お前はすでに向こうに棲むべき者、ヴァンパイアなのだから』
『そのときはユキ、お前も来るんだ』
お前も来るんだ。
「そんなこと急に言われても」
「おっす有希ちゃん！今日もキレイぃ～？」
ばちこん！と背中を叩かれた。
昨日の出来事を頭の中で反芻していた有希は、奇襲によって思いっきり下駄箱に頭をぶつける。扉つきじゃなかったら危うく誰かの靴に頭を突っ込むところだった。
いつにないぐらい無抵抗無反応だったので、犯人である冬馬はそろそろと有希の様子を窺った。
「おーい、有希ちゃん。どっか具合悪いわけ？」
「トーマが思い切り叩いたからじゃないの？おはよう神田君、今日も変わらず美形ね」
冬馬の陰から姿を現した女の子は彼をねめつけた後、有希に向かってにっこり笑った。有希は冬馬のハニーである彼女に真顔で答える。
「おはよう飯田さん。今日も変わらず冬馬なんかの彼女にしておくのはもったいないぐらい可愛いよ。奪い去りたい」
「あたし、神田君のそういうとこ大好き」
ノリがいいのよノリが、と冬馬のハニーこと飯田夏海は有希に合わせて真顔で返す。
そんなことを言っている夏海だが、彼女がどのくらい冬馬を好きなのか知っているので冗談を交わすことはもうすでに日課のようなものだ。が、それに本気で応じるのが冬馬である。

本気に取った彼は有希の襟に掴みかかった。
「うおおおおおい、有希ぃ！俺のなっちんたぶらかすなよ、コノっ甘いマスクでメロメロ野郎めっ！ど、どんな女もお前に従うと思ったら大間違いだぞ！」
うわぁん、と効果音をつけてもいいぐらい今にも泣きそうに反撃する冬馬が面白くて、二人が毎回やっていることに冬馬自身気付いていない……そこが愛すべきお馬鹿さんだ。
半べそかいている冬馬を慰めながら教室へ向かう二人を見送ったところで、また誰かに声をかけられた。
「おはよう、神田君」
「はよ」
遠慮がちに声をかけてきた茜に短く返す。昨日の今日で雰囲気がギクシャクするのも無理は無い。何より、そんなに親しくは無いただのクラスメイトだった女の子の首に噛み付いたり吸ったり舐めたりしたと思うだけでも赤面だ。
挨拶はしたものの動けず、会話も無く、一向に先に進まない。
勇気を出して先に口を開いたのは茜の方だった。
「学校にトラックが突っ込んだんだって、大騒ぎだね。びっくりしちゃった…」
事の顛末を知っている茜が何に驚いたのか検討がつかず、有希は思わず「どうして？」と聞いてしまった。
「えっ？だって、誰も覚えてないから」
階段を上がりながら出来るだけ小声でしゃべる。聞かれても何の話かはわからないだろうが、他人の耳に入らないに越したことは無い。
有希は頷いた。
「ああ…そうだな。確かにあんだけ野次馬がいたのに全員の意識飛ばすっつーのは凄いよ。俺はまだうまく出来ないし」
「何か練習してるの？」
「昨日はさっそく魅眼（ミスティック・アイ）を使う練習を。でもやっぱうまく出来ないん

だよなぁ。虫とかネズミとかにも変身できるらしいけど、いまいち掴めないし」
「むっ虫……」
引きつった顔をした茜は両手を合わせた。
「お願いだから私の前では虫になんか変身しないでね」
「気をつけるよ」
間違ってつぶされたくないし。
乾いた笑いを浮かべた有希を心配そうに茜が見上げた。聞こうかどうしようか悩んだ末に戸惑いがちに切り出した。
「何か悩んでる？あ、えっと、悩まないわけないよね。急にいろんなこと言われてびっくりだよね。でも元気ないからどうしたのかな、って思って」
有希はうつむいて押し黙ってしまった。
怖いなんて。
これから襲ってくるであろう魔物たちが怖いなんて、自分にかかわった人たちから自分という存在が消えることが怖いなんて、常夜の国へ行くことが怖いなんて、そんな子供じみた悩みなんか打ち明けられない。
笑われるかも、あきれられてしまうかもと思ったら余計に話せなかった。
話すことを嫌がっている、ということを察した茜は慌てて謝る。
「ごめんね神田君、ごめんなさい。気を悪くしないで。沈んでて大丈夫かなって、ちょっと心配になっただけだから。私先に行くね！」
駆け出した茜は教室の扉を開けると中へ消えていった。

「ねえ、ちょっと聞いた？」
トイレで髪を直していた彼女は隣に立った友達を横目で見た。
「何を？」
「今日の朝、神田君とあいつが一緒に歩いてたって」

「はあっ？！何それ全然知らないし！あいつってあいつでしょ？とろ！」
彼女たちの中では“あいつ”はとろいから“とろ”というあだ名がついていた。
唾を飛ばす勢いで友達に食って掛かった。ヘアピンが思っていたのと違う向きに髪に刺さる。
友達は目を細めてさも面白そうに言った。
「そぉだよぉ。ねー、どうすんのさー。ちんたらしてないでさっさとしちゃったほうがいいんじゃないの？こ・く・は・く」
「てゆーかとろがあたしの神田君に近付いたっていうのがまず許せないっつーか…」
ヘアピンを直すためにさりげなく彼女は鏡を覗いた。
だが、そこに自分の顔は映っていなかった。
真っ黒な、人の影みたいなもの。しかもそれには角がついていた。
「あ、ああ、や……」
何コレ何コレ知らないこんなのあたしじゃない。
友達がひっと息を詰めた音が聞こえた。
「醜いなぁ醜いなぁ」
影は三日月のような口を開いた。口の中には牙がびっしり並んでいる。
「でも醜いのは嫌いじゃないなぁ」
それは鏡から身を乗り出した。ぬぅっと黒いぬめぬめした物体は重たそうに洗面台に手をつく。
「――――――っ！！」
二人分の形も悲鳴も一瞬で影に呑み込まれた。

「私、購買寄ってから戻るね」
移動教室だった3時間目の終わりに茜は友達にそう言った。友達は小首をかしげる。

「え？何で？お弁当持ってきてないの？」
「うん。今日は寝坊して作れなかったの。だからパン買ってくる。先に戻っててね」
「待ちなよ茜！荷物持って行ってあげるよ」
教科書もろもろを持って行こうとしていた茜を呼び止める。教科書類はありがたく任せて財布だけ持って一人購買へ向かった。
購買は1号館の1階の隅っこにある。そこがまた、実験室や薬品室と言った特別教室が集まっているところで、あまり人気（ひとけ）の無い場所だ。昼の時間帯ともなれば昼食を買い求める生徒で賑わうのだがそれ以外の時間はちらほらしか人影は見受けられない。
茜は階段を下りたところで後ろから肩を掴まれた。
「っひゃあ！！わ、どうしたの？」
飛び上がって振り返るとクラスメイトだった。いつも女の子二人でつるんでいる派手な子たちで、茜はちょっと苦手に感じるタイプだった。
一緒のクラスになってから声をかけられた（？）のは初めてだ。彼女たちは茜の肩を押した。それが女子高生とは思えない強い力で、壁に叩きつけられる形になった。
頭ではなく背中を打ったがそれでも視界が揺れた。
「なん…」
「あんた、気に食わない」
「あんた、かわいこぶってんのもいい加減にしなよ」
「あんた、媚ってんじゃないよ」
二人は茜を囲んだ。逃がさないように、責め立てるように。
茜を見る黒い瞳にどんよりした沼の底のような重さを感じ取って鳥肌が立った。
生気がまるで感じられない。人間じゃない。
「やっ、やだ……！」
「宮野さんは」
追い詰められたそのとき、声が割って入ってきた。それと共に軽

い足音が階段の上から下りてくる。真剣になっているか、あるいは怒っているときのようにいつもより低い声音だ。
茜は弾かれたようにそちらを見、二人はゆっくりと振り仰ぐ。
「他人の気持ちを思いやれる優しい奴だ。それをかわいこぶってるだ媚売ってるだ何だって貶めて悪く言う奴の方が性格悪いんだって知ってる？」
意識して人のものに近くしていた爪と牙が瞬時にヴァンパイアのものになった。漆黒の瞳の中にかすかに見える猫か蛇のような瞳孔が今ははっきりと濃い。
彼が首を傾げると少し癖のある髪が頬にかかった。
「何か様子がおかしかったから跡つけてきて良かった。で？お前らナニモン？」
斜ににらみつけられた彼女たちは勝ち誇ったようにも見える笑みを浮かべる。と、素早く茜の肩を掴むと有希の方へ向けて、胸を押して突き飛ばした。
受け止めた有希はキッと鋭い視線をくれてやったが、変わらずに仮面が張り付いているように笑っているだけだ。
「っう…」
「宮野さん？」
腕の中の茜が急にうめいて上体を倒したので、とりあえず床に座らせて覗き込んだ。呼吸が速く、苦しそうに胸を押さえている。
「宮野さん？宮野！おい、どうした！？」
「…っあ、……っ」
茜は呼ぶ声が聞こえないのか玉のような汗をかいて胸を掻き毟る。彼女の身に何が起こっているのか理解できない有希は、ひとこと断ってからブラウスのボタンを外した。
そこには———皮一枚下の心臓の上にはまるで生き物のようにうごめく何かがいた。
「宮野っ！お前ら何したんだ！」
おかしそうにケタケタと二人は嗤う。

「それはなかからソイツを焼き殺すヨ。肉から骨から臓器まで全部全部！」
「燃えろ燃えろ！」
ドロリ、と二人の顔から肩から身体中が腐って溶けて、その中から黒い影のような頭に角の生えた物体が現れた。
つるりとした顔面には三日月のような口だけがあり、中にはずらりと牙が並び、その奥はぬらぬらと真っ赤にぬめっていた。
一人が口角をさらに吊り上げて笑い、自らの胸をドンッと叩く。
「それがコイツの嫉妬の火焔（ほのお）サ！！ヒィーッヒッヒッヒッヒ！」
「可哀相になぁソイツ死んじゃうなぁ！」
口々に笑いながら言う影は、次第にタイル張りの床に沈み込むようにして姿を消した。あとには耳障りな甲高い哄笑だけが残る。
今のも常夜の国からやってきた魔物なのだろうかと回らない頭で考えているうちに、周りに野次馬が出てきた。苛立たしくて有希は舌打ちをする。
騒ぎになったらまずい。でも、ヴァンパイアの武器の一つとも言えるミスティック・アイはまだ使いこなせてない。
どうする。
宮野さんを早く人目のつかないところへ連れて行ってどうにかしないと、このままじゃ……。
どうする…！
「くそっ！」
ハラ決めろ俺！
有希は茜を抱き上げると、跳躍一つで階段の上まで飛び上がる。ちらほらいた野次馬は人間には到底不可能と思われる動作を見てぎょっとして引いた。
その隙に一つ深い呼吸をすると目を閉じる。
神経の全てを眼に集中させてゆっくり開いた。と、野次馬たちは立ったまま時が止まったか氷漬けにされたみたいに固まった。
ミスティック・アイが初めてうまくいったことを喜ぶ暇も無く有

希は窓から飛び出す。屋上へ続く扉はいつも鍵がかかっているから誰も来ないはずだ。身体を捻り窓枠を蹴って飛び上がると重力を感じさせない動きで屋上に着地した。
「宮野さん、しっかりしろ！」
寝かせると上体を抱きかかえる。揺らしてみたが、体力の消耗が激しかったのかぐったりして動かなくなってしまった。
「…何でだよ」
喉までせり上がってきた感情で声が震えた。
それは憤怒か悲しみか。
「何で宮野がこんな目に合わなきゃなんねぇんだよ！」
眦から溢れた涙が滴になって、茜の胸に落ちた。
「関係ないだろ…！」
二度も巻き込んだ。二度とも自分で助けられないなんてごめんだ！
でもわからない。どうすれば助けられるのかなんて、思い浮かばない。
誰か助けてくれ。
誰か…っ！シャリアン！
駄目だ。どうして頼ろうとするんだ。いつも助けてくれるとは限らないじゃないか。
悔しい。
悔しい。どうして何も出来ないんだろう。
こうして泣くことしか出来なくて、何て不甲斐ない自分。
涙がまた一つこぼれて、肌の上でぽつ、と音がする前に弾けた。
否、弾けたように見えただけで蒸発しているようだった。
何だ？
有希は茜が掻き毟って赤い筋になった傷口に指先で触れた。
「っ！？」
顔をしかめて、触れたか触れないかのあたりで有希は手を引っ込めた。指先を見ると火傷したときみたいに皮膚が引きつっていた。
「炎…？」

そういえば魔物は「嫉妬の火焔」だと言ってなかったか。
体外から体内へ炎を注入したのなら、逆に考えれば取り去る事だって可能なはずだ。
傷口から血液と一緒に吸い出せないか？
でもただでさえ弱ってる今、無駄に失血すると危険だ。
吸い出せるかどうかもわからない。
「確率は五分」
吸い出すことが出来るかどうかじゃない。命の天秤が生へ傾くか死へ傾くか、助けられるか助けられないかという二つに一つ。
ごくりと喉仏を上下させて唾を呑み込んだ。すでに考えている時間は残されていない。
「やるしかない…っ！」
有希は茜の身体を引き寄せると、火傷痕のように引きつりながらうごめいている心臓の真上に唇を寄せた。
熱い！
烈火のごとく体内で荒れ狂う炎が有希の唇を焼いた。
わずかな血の味を感じたとき、滑り込むようにして冷たい何かが口腔に入った。その瞬間、血の味も感覚も全て消える。
冷たいものではなく、体温を遥かに上回る灼熱の熱さ――熱すぎて冷たく感じたのだと気がついたのは一拍置いてからだった。目の奥が、頭を殴られたときのようにチカチカして、まるで頭が焼かれているみたいだ。
ずる、と体内から全てを吸い尽くした感触があった。有希は顔をそむけるとそれを吐き出す。むせながら自分の口から出てきたものを見て絶句した。
それは、炎というには透き通るような軽さが無く、むしろ上澄みの底に沈んだ汚泥に似ていた。真っ黒で粘ついていて、燃え盛るというより爆ぜると言った方がいいかもしれない。
「何だこれ」
口腔も火傷した有希はかすれた声しか出なかった。

「嫉妬の火焔サ」
ヒヒヒ、と笑い声が背後から聞こえた。弾かれたように振り向くと、コンクリートから頭が覗いていた。出ていたのは鼻から上ぐらいまでのほんの少しで、そこから下は水に潜っているようにコンクリートに隠れていた。
「言っただろ？あぁ醜い醜いねぇ。でもそういうのは嫌いじゃないサ」
「テメェ、常夜の国から指輪を狙って来た奴だな」
「ヒヒヒ馬鹿言うなよ。誰が好き好んで王座なんかに縛られるかい。オイラは喚ばれて仕方なしにやってんのサ」
話が見えない。有希はいぶかしそうに顔をしかめた。
魔物はまた「ヒヒヒ」と笑った。
「お前サ、ヴァンパイアのクセに弱いな。付け入られるゼ」
「何だと？……あっ、待てよ！」
笑いながら魔物は沈んでいった。有希は茜を寝かせると魔物に手を伸ばしたが一足遅く、すでにたぷん、と音を立てて頭も角も跡形も無く消えてしまった。
「クソッ」
悔しさで手を握り締めた。鋭い爪がコンクリートを削る。
呼ばれたって、誰にだ？
何の目的でこんなことする？
何で親父でもなく俺でもなく、俺にかかわった宮野さんに？
「……く、ん」
小さな声が聞こえた。
「ああ、目が覚めた？どこか痛くないか？」
側に座った有希は茜を抱き起こした。抵抗せずにされるがままになっている茜はとろんとした眠そうな目をしていた。
「神田君…酷い声」
そう言われればかすれてるかも。口の中だけじゃなく喉も少し焼けたから。

茜はゆるゆるとまぶたを閉じる。
「ありがとう。助けてくれたんだね」
全然助けられてないよ。
喉が詰まって言葉が出なかった。その代わりに汗でじっとりと湿った額に張り付いた髪を指で払って、頬を撫でた。
命は取り留めたはずなのに、今にも事切れそうで怖い。
茜は吐息混じりに言った。
「怪我したんでしょ。いいよ……飲んでいいよ」
「でも」
ほんの少しとはいえ、これ以上血が無くなると危なくないか？
逡巡した有希だが喉が焼けた状態でいるわけにもいかず、謝ってから首筋に牙を立てた。喉へ流れ込んでくる生暖かな液体が、初めて苦く感じた。
俺が巻き込んだせいで、こんなに傷ついた。
もうこれ以上誰も巻き込みたくないのに。
それでもこの先に今以上の苦しみが待っていて心が引き千切られそうになることも、なんとなくどこかでわかっていた。

そばにいて2

暗く深い闇の中に魔法円が自ら発光しながら浮き上がっていた。さらにその淡い光の中に人影がある。

正位置の五芒星（ペンタグラム）は天使を喚（よ）び出す場合、逆位置の五芒星は悪魔を喚び出す場合である。

その魔法円の五芒星は逆位置だった。

すると魔法円の真ん前に突如ぬっと何かが現れた。それには角がついていて、頭だとわかるのに時間はかからなかった。

「ただいま戻ったゼ」

鼻のあたりから上だけ覗かせた顔には真っ赤な三日月型の口しかなく、ぱっかりと開いたそこからヒヒヒ、と耳につく甲高い笑い声が漏れた。

それとは反対に低く落ち着いた声がゆっくりと言った。

「報告を」

「ヒヒッ。奴はヴァンパイアのクセにニンゲンなんかを助けようとする馬鹿だったゼ。てんで弱いサ。同じ夜の住人とは思えないね！」

「人間……それは“ミヤノ”という名ではなかったか？」

聞かれた悪魔はん～と唸って小首をかしげる。

「そうそう。そんな名前だったかもナ」

「そうか、ご苦労だった」

「あの～それで、対価はいつ頃…」

悪魔は床から完全に姿を現すと、そわそわと落ち着きが無くなった。

悪魔を喚び出す際、必要となるのが対価である。人影はふっと鼻で笑うと魔法円という閉じられた結界の中から歩み出た。

召喚する場合に重要なことは魔法円の中から出ないことだ。魔法円の中にいれば結界によって悪魔から身を守ることが出来る。だが、もし一歩でも外へ出てしまったときは、契約は破棄されたとみなさ

れ殺されることもある。
それは自殺行為に近い。
思ってもみなかった行動に出た雇い主をきょとんとして見、次に悪魔はけたけたと高らかに笑った。
「ヒャーッハッハッハッハッ！！馬鹿だなお前、馬鹿だな！そっから出れば、オイラは契約なんか無視して好き勝手できるんだぜ…ふぐっ」
鋭い爪の生えた手が悪魔の顔面を鷲掴みにした。骨と血管が手の甲に浮いて見えるほど力が入っている。
「それがどうした？」
「だ、だから、それが……馬鹿だって」
「私が馬鹿なわけではない。貴様が愚か者なのだ。なぜその程度しか情報を集められない？いや、まあそれはどうでもいいことだな」
地を這うような低く冷たい声が言葉を紡ぐにつれて、手の甲に短い金色の毛が生え始めた。指も節くれ立って太くなり、爪も皮ぐらいは簡単に切り裂けそうな鉤状になる。
掴まれている頭がメキメキと耳障りな音を上げた。
「ギャ――――ッ痛い痛い痛い！！」
「私が魔法円の外へ出たのは、出ても平気だと判断したからだ」
バンッ！と厚い風船が破裂したような音がし、次の瞬間には黒い物体は身体から腕から崩れて灰になり、風に飛ばされる。
悪魔は跡形も無く消えてしまった。
手の灰を払うとため息をつく。手の甲に生えた金色の毛は最初から何も無かったかのようになくなっていた。
「召喚するのは案外難しいな。私は魔力が足りないから頭の足りない奴しか応えない。力で服従させるのは七面倒だと思ったがそちらを取ればよかった」
その方が従順な僕になるしな。
「それにしても、聞けば聞くほど面白い少年だ」
ヴァンパイアと人の子でありながら成長するヴァンパイアとして

生まれた少年。
死を迎えずにヴァンパイア化。
そして、ヴァンパイアの少年と血の盟約を結んだ少女。
「興味深いな」
不敵に笑うと、金色の瞳が光を弾いたように妖しく輝いた。

「神田君」
「宮野さん。どうかした？」
茜は目線を下にもじもじと手をいじった。なかなか次を話さないので、じれてもう一度呼んだ。
「宮野さん？」
「あ、あのね、私ね」
有希の顔を見たり足元を見たり、何度か視線が上下した。ぎゅっと手を握り締めて決意した茜は、少し上目遣いになって有希の顔をしっかり見る。恥ずかしいのか頬が真っ赤だ。
「ずっと……ずっと神田君のこと好きだったの！」
「えっ」
「だから」
茜はブラウスのボタンを上から順番に外していく。あっけに取られていた有希はブラジャーが覗いたところで我に返り、慌ててその手を掴んで止めた。
「ちょっ、ちょっと待って。何いきなり。熱でもあるんじゃ」
「熱ならあるかも」
言うとおり、熱に浮かされたように茜は潤んだ瞳で有希を見上げる。熱っぽい瞳になんとなく次に言うであろうことが予想できた。
「神田君と一緒にいるとドキドキして熱くなるもの」
あ。やっぱり。
予期していたので甘い言葉にさほど驚かなかった。
茜は自分の手を掴んでいる有希の手をそっと取り、はだけたブラ

ウスの間から滑り込ませる。
柔らかい感触が指先に触れた。
「おっ、わわっ何すん…」
ぎょっとして振り払い一歩ばかり引くと、茜は小首をかしげた。
「神田君は私のこと嫌い？」
「嫌いじゃないけど。こんなことするなんてらしくない……」
「私らしいって何？神田君は私のこと良く知ってるの？私、私…」
ぱっと茜は有希の首に腕を回す。身体が密着して自分とは違う鼓動まで感じた。
「神田君になら私の全部あげてもいいって思ってるの」
耳元でささやかれて心臓が跳ねた。
や、やばい。いろんな意味でやばい。彼女いない暦17年目にして告白・デートなどなど一足飛びに飛び越えていきなり肉体関係？！
ちょっと、ま……。

「……って……うぅっ」
息苦しくて有希は唸った。その自分の唸り声で覚醒する。
夢だったか、と惜しかったようなある意味恐ろしかったような複雑な気分を噛み締めながら重いまぶたをうっすら開けた。
「なに……」
確かに今夜は暑いけれども、パジャマ代わりにシャカパンなんかはいてるけれども、上は半袖だし窓は開いてるしすごいあっつい寝苦しいぃ～ということはないはずだ。
それなのに目覚めてしまったのはなぜか。変な夢のせいというのもある。だがしかし、目の前にいるコレは何だ？
「イヒヒ」
歯をむき出して笑ったそれは、頭はつるっぱげで耳が長くて尖っている変な奴だった。身体は小さく、立っても1mはないだろう。全体的に黒ずんだ緑色をしていて小鬼とか悪魔とかみたいだ。

どうやらそれが胸の上にうずくまっているから息苦しいらしい。
「イヒヒじゃねえよ。どけって…ああっ！何パンツ脱がしてんだコノヤロッ」
寝ぼけ眼で起き上がってつるっぱげ悪魔を追い払おうとしたところ、シャカパンが見事に脱がされていることにぎょっとする。
じゃあ何か？パンツ一丁で寝てたってことか？
「夜這いなんて初めてだ。じゃなくって、ふざけんなお前姦淫罪で訴えるぞ」
「イヒヒッ」
ふん捕まえてやろうと手を伸ばしたが意外と動きが素早く、ぴょんぴょん跳ねて窓から出て行ってしまった。
網戸は閉めてたはずなのにいつの間にか開いてるし。
有希は寝癖のついた頭をがりがり掻くと、据わった目つきで時計を見た。
「まだ2時じゃねぇかよ」
あークソッ。変な夢は見るし変な奴は上に乗っかってるしシャカパンは脱がされてるし。でも下着の方のパンツまで脱がされてなくて良かった。
パンツ脱がして何しようとしてたんだよ。
俺の貞操を奪いに？……何だそりゃ。
「何が目的で来たんだか」
悪魔ってよくわかんねぇな、とぼやきながらシャカパンをはき直して窓を閉めると再びベッドに横になった。

「……さん」
誰かが呼んでる。
「宮野さん」
はっきりと声が耳に滑り込んできて、それで茜は起きた。視界に飛び込んできたのは安堵した有希の顔だ。

「良かった。このまま起きなかったらどうしようかと思った」
目が覚めなくなるような重大な何かがあったのか？
「私、どうしたんだっけ？」
聞いた瞬間、有希は酷く傷ついたような顔をした。聞いてはいけないことだったのだろうかと焦り、視線を外す。
「あ、あの、ごめんね。えと、もう大丈夫だから、あの、起こしてくれても平気だから」
というのも、上体を有希に預けている格好なのでかなり距離が近いし恥ずかしい。
顔が熱いので、多分頬が真っ赤になっているんだろうな、と考えながら有希の肩を押した。しかし、有希は苦しそうに顔をゆがめた。
「離したくない」
そう言って離すどころかぎゅっときつく抱き締めるではないか。
なになに？！どうしてこんな……ダメ、心臓バクバクしそお！
頭の中で混乱が渦になってぐるぐると回っている。目も回りそうだ。
「どうしたの？何があってこんな…」
「もう危険な目にあわせたくない。大事だから。好き、だから」
「へっ」
聞こえなかった？と言う声は吐息と共に耳に滑り込んだ。ガッチガチに固まった茜を見つめながら、彼は恋愛漫画のヒロインも思わずとろけそうなほど甘い言葉を口に乗せた。
「好きなんだ。ずっと腕の中に閉じ込めておきたい」
するとゆっくりと茜の唇に自分のそれで触れた。
「か、んっ」
神田君、そう言おうと思っていたのに再び塞がれた唇は情熱的な口付けを受けることになった。
ま、待って待って！誰が私を何だっけ？好きって何を？
「んっ……」
ももの内側に冷たい手が触れて、スカートの中まで滑ったことか

ら声が漏れた。
嫌が応にも身体が反応して全身を巡る血液が沸騰しているかのように熱くなる。反対に頭の方が追いつかない。
パニックに陥って抵抗することもままならない。
ほっ、本当に心臓バクハツしそうだよ！で、でも唇やわらかい……じゃなくって！彼氏でもないのにコンナコト許しちゃっていいの？……じゃなくって！ああもお、私頭おかしくなってるよ。
だって別に嫌じゃないなんて変だもの。

「……う、ん……」
息苦しくて茜は唸った。その自分の唸り声で覚醒する。
夢だったのか、とほっとしたが同時に考えさせられることも心に多く残った。それにしても熱くて寝苦しい。真夏の熱帯夜なんてまだ先のはずだ。
ふと目を開けた。
「イヒヒ」
「……いひひ？」
妙な声が聞こえた気がした。
良く目を凝らして見ると、身体の上に変な物体が乗っかっているように見える。毛の無い頭にとんがった耳、身体が黒っぽいのでむき出した歯だけ白く浮き上がっている。
「なにこれ」
「イヒヒッ」
目をこすってみても消えないので見間違いでもないだろう。夢を見ていたところで起きてしまったので脳はまだ寝ているのか、悪魔という考えは思い浮かばない。
じっとそれを観察しているとやっと頭も起きてきたのか、なにやら身体に違和感を覚えた。
下がすかすかする。

「あーっ！ズボンが、ズボンが」
勢い良く起き上がるととんがり耳の小悪魔はぴょんぴょん跳んで窓枠に着地した。相変わらず「イヒヒ」しか言わない。
水玉模様のズボンが見事に脱がされていて上のボタンもいくつか開いていた。
茜は不審人物（？）の侵入や自分が置かれていた状況を理解してぞっとし、慌てて前を掻き集める。
「ヤダヤダ何で？馬鹿！痴漢！変態！お嫁行けないよぉ」
「イヒヒッ」
「笑い事じゃない！」
怒鳴るとぴょんとジャンプして小悪魔は夜の住宅街へ消えて行った。茜の家は８階なのだけれどそんな高さから飛び降りて平気なのか、などという考えは一瞬で頭の中から消える。
「……なんなの」
呆然として呟いた。ズボンは脱がされたにしても下着は脱がされていなくて良かった。そこまではいていなかったら大事件だ。
「おニューのパンツのお陰です」
多分、と続けた。

そばにいて3

「最近仲いいよなぁ」
冬馬は熱した鍋の中にバターをぽんと放り込んだ。それを溶かしたところに小麦粉を入れて、焦げないようにかき混ぜる。
隣のコンロでマカロニの茹で具合を見ていた有希は、彼の突然の独り言に一応反応を示してやる。
「何が」
「何がじゃねぇよ。宮野さんとお前…」
「ぼーっとしてると焦げてブラウンソースになるぞ。早く牛乳入れて」
早口に言うと有希は片手の菜箸でマカロニがくっつかないように攪拌しながら、片手で牛乳の入ったカップを取って隣の鍋へ投入する。最初はバター小麦粉と慣らすために少なめに。
「かき混ぜて」
「ハイ」
言われたとおりに従う冬馬。
何しろ従わないと男5人班でまともな食事が出来上がらないこと必至。さすがにまずいものは食いたくないヨネ、ということで有希主導である。家庭科の先生にも褒められたほどの手際の良さは紛れも無く主夫。
彼らは今まさに、調理実習の最中であった。今日の実習はマカロニグラタンなんだけれども、夏の暑い時期に何をとち狂って冬のご飯代表グラタンなんぞを作らにゃあかんのか。冷やし中華とかないの？
「料理も出来て有希ちゃんはまたモテちゃうね」
「ちゃん言うな。てか別にモテてねぇし」
嘘だ。モテモテだ。顔良し性格（多分）良し料理も出来てレストランで言うと三ツ星ぐらいいい男だ。

本人が気付いていないだけで、彼が料理が出来るということを知った女子は前にも増してギラつく瞳で見るようになった。らしい。
少しずつ牛乳を投入していた冬馬は唇を尖らせた。
「あのさ、最近宮野さんとお前仲良くね？付き合い始めた？なんかさぁ友達なのにそういうの言ってくんねぇのって水臭くね？」
それでなんとなく拗ねてたのか。
「付き合ってないけど、まあ確かに仲は良くなったかも」
「その理由は！？」
俺がヴァンパイアになったときに知らない間に盟約をしてしまったので仲良くならざるを得ませんでした、などと本当のことを言うわけにもいかず、とりあえず言えるところまで言うことにした。
「俺が学校帰りに買い物行ったら偶然会って、それで仲良くなった」
冬馬は有希を見たまま固まった。後はコンソメを入れるだけという完成間近のホワイトソースがふつふつなんて可愛いものでなく、ごぷぁ、と泡を吹き出した。コレで色が赤かったら魔女の作るナントヤラみたいだ。
再起した冬馬は酷い不細工な顔をして拒絶するように退く。
「ロマンのかけらすらねぇっ！」
「まあな。食品とトイレットペーパーの買出しだからな」
「真顔で言うなよ！あーあ何だ、友達にやっとこさ彼女が出来たのかなって淡い期待を持って聞いたのにさ。全然そんなんじゃないしさ。この主夫めっ」
ちぇっちぇっ、と舌打ちを何回かして、冬馬は鍋を火から下ろした。

有希の指示のお陰で失敗無く出来上がったグラタンを平らげて片付けをし、彼の班は早々に教室へ戻った。調理実習は3、4時間目で次は昼休みなので慌てることなく戻ることが出来る。
「神田、ちょっといいかな」

教室へ入るなり担任の先生がひょっこり顔を出し手招きした。叱られるようなことはした覚えが無いので、思わず有希は冬馬と顔を見合わせてしまった。
「何かやったのか？」
「さあ？授業料はちゃんと払ってるけど。ちょっと行ってくる」
おー、と答えた冬馬に手を振り振り見送られた。
近くの空き教室に通された有希はそこに茜もいることに気がつき、今から聞かれることを予想することが出来た。
机が雑然と並んでいる広い空間に一人でぽつんといた茜は、先生と有希を見て少しばかりほっと安堵したようだった。
座っていいよ、と椅子を勧められた有希は茜の隣の席に腰掛けた。先生は手近な椅子を引っ張ってきて二人と対面するように向きを変える。
「呼び出して悪いんだけど、聞きたいことがあったから」
眼鏡の脇を指で押し上げた。
「中島と鈴木、まだ家に帰ってないんだって。知ってる？」
中島と鈴木というのは、この間魔物に魅入られた同じクラスの女子のことである。有希は怪訝そうに、茜は不安そうに、お互いの表情を見て先生には有希が答えた。
「いや……知らなかったですけど。それを何で俺たちに言うんですか」
「あーごめんごめん。疑ってるわけじゃないんだ。だけど、行方がわからなくなる直前にお前たちと言い合いをしてたっていうのを小耳に挟んでね、何か知らないかと思って聞いただけなんだ」
有希は肩をすくめた。
「さあ。言い合いっていうか、二人が宮野さんにからんでるところにたまたま俺が居合わせて……言葉が過ぎるって注意したぐらいで。失踪の原因になるようなことは無かったと思いますけどね」
「そんな怖い顔するな」
先生は苦いものを口に入れたみたいな顔をした。立ち上がると椅

子を元に戻す。
「時間取らせて悪かったね、もう一度言うけどお前たちがなんかしたんじゃないかとか、原因じゃないかとかって疑っているわけじゃないんだ。ただこうも痕跡も残さず失踪したとなると、ちょっとした情報でも繋がるかもしれないと思って」
「早く見つかるといいですよね」
「本当になぁ、あいつら悪いことばっかしでかすから」
茜の言葉に答えて苦笑いを浮かべると先生はもう一度謝ってから教室を出て行った。使われていない物置と化した教室に残されて急にしんと静まり返る。空気が冷えたみたいだ。
有希も出て行こうとしたところで、茜はおずおずと口を開き小さい声で言った。
「中島さんと鈴木さんって」
昼休みの時間なので壁一枚隔てた廊下は騒がしく、小声で話せば外に漏れることは無いだろう。
有希は引き戸を閉めると廊下の様子を見、茜に視線を移した。
「多分、もう戻ってこない」
あのあと、茜に説明を求められたので分かる範囲で語った。二人が溶けてしまって中には魔物――影のような悪魔が皮を被って入っていたこと。茜の体内に入り込んだ炎を吸い出したこと。そして、二人の姿がどこにも見当たらなかったこと。
「呑み込まれたんだ。シャリアンに聞いたら、嫉妬を餌に巣食う悪魔だって言ってた。対象者を呑み込んで皮を被って、憎い奴に近付いて嫉妬の火焔（ほのお）で焼き尽くす」
「じゃあ、もう……どこにもいないの？」
すがるような問いに有希は黙り込んだ。考えているわけではない。その沈黙は肯定を意味している。
そんな、と頼りなく呟いた茜に背を向けた。
「もし、俺が……、いや、何でもない。俺先に戻るわ」
有希はドアを開けて逃げるようにして出て行った。茜は呼び止め

ようと立ち上がったが、言葉が喉にくっついて唇を薄く開けただけで終わる。
追いつかれたくなくて早歩きで教室に向かっていた有希は自分に対して舌打ちをした。
俺は、馬鹿だ。
———もし、俺が———
常夜の国に行くと行ったら？
そんなのは答えに困るだけだ。
俺が決めることで宮野さんに聞くようなことじゃない。
もし魔物たちの目的が親父と俺なら、俺がここからいなくなれば魔物の被害もなくなるはずなんだ。境界も閉じてしまえばいい。そうしたら奴らはこちらへ来れないはずだ。
ただ、盟約を結んでしまったから長くは離れられない。けれど、連れて行くわけにも行かない。
「八方塞がり…っ」
有希はまずいものを吐き出すように呟いた。

そばにいて４

青く霞んだ空に浮かんでいるのは満月だ。雲は無く、月の光に呑み込まれそうな小さな星たちがわずかにまたたいた。
「王自らお出迎えとは恐縮だ」
月明かりに照らし出された男は赤茶の髪を掻き上げた。笑った口の端からは鋭い犬歯が覗き、金色をした瞳は獣のそれと同じ獰猛さを秘めている。
「指輪を渡して貰おうか」
対峙しているジルは、その金の瞳を見て目を細めた。
「渡せるものなら渡している」
短い答えに男は憐れな者を見るように眉間にしわを寄せて、それでも口角を上げた。
「では、その命と共に」
ひゅ、と風が動いた。
「俺がいただこう！！」
獣の吼え声のように怒鳴った男はジルの視界から消えると恐るべき速さで背後に回った。手を組んで、後頭部めがけて振り下ろす。
刹那、骨と骨のぶつかった鈍い音がした。
「なるほど、今夜は満月だ」
腕で防いだジルは赤い瞳を男に向けた。元来持っている美貌とヴァンパイアの魔力によって男は一瞬魅了され、たじろいだ。
その一瞬を見逃さず、引き絞った手で身体を貫いた。鮮血が花びらのように散って灰色のコンクリートに模様を作る。
「力が有り余ってしまうのも頷ける」
手を引き抜くと、付着した血液が灰になってしまう前に舌で舐め取った。血泡を吹いた男の身体はスローモーションのようにゆっくりと後ろに倒れる。地面に叩きつけられる直前に砕けて灰になった。
満月を背後に灰になった男を見下ろしたジルは、指に付いた灰を

払う。
「それをうまくコントロール出来ない若造が、私の命を狙うなど３００年早い」
「じゃあ」
背後から聞こえた声が耳に滑り込んだかと思うとまたたきより早く白い腕が前に回り込み、長い爪が首筋に突きつけられた。
「年を経たヴァンパイアなら可能か？」
笑いを含んだ女の高い声が耳朶をくすぐった。ジルはため息をついて硬くした表情を崩すと、寸分の狂い無く確実に喉元を狙った指を掴む。
「……シャリアン。驚かせるな、肝が冷えた」
「何だ？隙だらけだった奴が偉そうなことを。私がお前を狩に来た奴でなくて命拾いをしたな」
「いたずらが過ぎる……っ」
肩越しに彼女を見たジルが息を詰めて顔をしかめた。そのまま崩れそうになったので、咄嗟にシャリアンがその身体を抱きとめる。
「――――お前…！」
胸に当てた手に違和感があり、思わずシャリアンは倒れこんだ彼のワイシャツを引き千切った。ボタンが何個か飛んでいく。
「これ……何で黙ってた？！」
しまったと言わんばかりの顔をしたジルを彼女はにらんだ。
彼の胸、心臓の真上には奇妙なものがあった。心臓を中心に皮膚のすぐ下にまるで木の根のように張り巡らされた何か。浮き上がったそれは鼓動と同時に脈を打って、時折生き物のようにうごめく。
シャリアンは唾を呑んだ。
「まさか、指輪の…」
「指輪の力だ。王位を捨てたそのときから、これは私を呑み込み始めた。心臓に巣食い、血管を伝い、私の身体を支配してしまおうとこうして根を生やす」
そうしている間にも指輪の根は侵食を続け、喉に腹部に腕に足に

広がっていた。
「もうすぐ私は発狂して死ぬだろう」
シャリアンは言葉を失った。唇を薄く開いたけれど何も言葉が出てこない。そんな彼女と反対に、ジルは心穏やかに微笑さえ浮かべていた。
青白い月に照らされたその顔を見下ろしていたシャリアンの震える唇がやっとのことで言葉を紡ぐ。
「なぜ笑っていられる！帰るべきだ、一刻も早く！！」
「戻ってどうなる。もう一度王として戻ったとしても指輪は私を許さない。それに、有希はどうなる？あの子はこちらの世界で生まれてこちらの世界で育った。捨てきれない大事なものもあるだろう。無理矢理引き離したくはない」
胸座を掴んでいたシャリアンは舌打ちすると手を離した。
どいつもこいつも吐き気がするほど甘い。
「お前ら二人、早死にするタイプだ」
不機嫌そうに吐き捨てて、シャリアンはタッと地を蹴った。遠ざかって行く揺れる銀髪を見ながら彼は立ち上がって埃を払った。が、またしても心臓を握り締められるような痛みに襲われ、膝が崩れた。
臓器という臓器に毒の根を生やし、今にも呑み込もうとうごめく何か。息が上がって地面に手を付いく。こめかみから伝ってきた汗が目に染みる。
日ごとさいなむ苦痛。逃れる術は無く、選択肢も無い。
この身、朽ち果てるということ意外に。
「シャリアン、それでも、私は……」
目を閉じた。
いつも怒らせてしまって、背中ばかり見ている気がする。そんな彼女の華奢な後姿をまぶたの裏に思い浮かべた。
終わりを告げる鐘が鳴った。

これで全てが終わった。短い、しかし当人たちにとっては長い戦い。
己の頭脳だけが頼りの一分一秒でも気の抜けない戦い。
「ペン置いて、後ろから回収してー」
定期試験と言う名の戦いが、今終焉を迎えた。
回収された解答用紙を教師が数えている間に、定期試験という拷問から解放された生徒たちはにわかに騒がしくなった。それに乗じて有希としゃべろうと後ろを向いた冬馬は、彼の様子を見て「あり？」と小首をかしげる。
「暗いなぁ。何だよ、出来が悪かったん？」
有希はうつむいていたのだが、視界に覗き込んできた冬馬が映ったので顔を上げると視線を落とした。
「いや……やれるだけのことは、やった」
「何か有希ちゃんが言うと重みあるな。“やれるだけのことは、やった…！”カッチョエエ」
芝居がかった口調で言った。普段ならなんらかのアクションを起こす有希が、今日はデコピンも首締めも肘鉄も右ストレートも何もなかったので「あり？」といぶかしんだ。
「なあ、具合悪いん？それとも恋の悩み？最近元気ないのな」
試験の監視を担当していた教師が出て、入れ替わりに担任が入ってきた。「静かに。ところでテスト出来た？」などと前の席の生徒に聞いた。
がやがやと騒がしいのはいつもと同じなのに、なぜか今日に限っては耳に障った。有希は頭を抱えて髪に指を突っ込むと同時に耳を塞いだ。
「そう言われれば、最近ちょっと体調悪いかも。暑気当たりかな」
今まで特に暑さに弱いというのはなかったのだが。
「マジかー？気をつけた方がいいって有希ちゃん」
ホームルームが始まったので冬馬はこそっと耳打ちして前を向いた。

風邪なら身体は熱を持つはずだ。でも額も頬も酷く冷えていて、なぜか息が上がる。有希は担任の話ではなく、頭の芯まで響く心臓の音に耳を傾けた。
「――――き、有希、有希！」
「あ？」
顔を上げるとあきれた冬馬がため息をついたところだった。立ち上がって見下ろしている格好の彼の肩には鞄があって、教室の中もざわざわと騒がしかった。
「ほんっとに大丈夫かぁ？もう終わったぞ？」
いつの間にホームルームが終わっていたのか、生徒たちはこれからどこへ寄って行くかなどという会話を交わしながらそれぞれ教室を出て行った。
「冬馬くん、終わった？」
「おー、なっちん」
冬馬の彼女の夏海が教室を覗いた。迎えに来た彼女に「ちょい待ってて」と応えると有希を心配そうに見た。
「勉強のし過ぎで寝不足か？早く帰ってゆっくりしてろよ。明日からは掃除だ何だってくだらないことやるだけだからさ、休んだって平気だと思うぜ？無理すんなよ」
「サンキュ」
じゃな、と言って冬馬は教室を出た。
有希は長くため息をついてから鞄に筆箱を突っ込んだ。身体はだるいし、鉛みたいに重くて立ち上がるのも一苦労だ。
めまいまでする。
いやホント俺どうしちゃったんだろ…。
のたのたヨロヨロしながら廊下を歩いている彼の後姿を茜が追い駆けた。
「かっ、神田君神田君！待って。ねぇ、大丈夫？顔が真っ青だよ」
「へーきです」
茜は「何で敬語？！」とツッコんでから、ゾンビを思わせるぐっ

たりさでズルズルと歩を進める彼を支えた。
「本当に？保健室行って少し休んでから帰った方がいいんじゃない？途中で倒れそうだよ」
「気合でなんとか」
出来たらいいな…と消え入りそうな声で答えた有希を心配そうに見つめて、茜は真面目に言った。
「じゃあせめて家まで送らせて。バイバイしたあとに倒れちゃったら誰も助けてくれる人なんていないでしょ。私も…神田君をおんぶできるかどうかわからないけど」
「無理だよ。つぶれっちまうよ」
かすかに笑った有希を見て、まだ笑う元気があるのだと茜は少しほっとした。
学校を出て有希の家まで送る間中、茜は彼を気遣った。日差しが暑くないかとか、鞄は重くないかとか、まだ気分が悪いかとかちょこちょこ様子を窺うが、必要以上には話をしなかった。体調が悪いので話している余裕は無いだろうと思ったからだ。
だから道中とても静かだった。
昼間ということで住宅地には時折自転車や車が通るぐらいでその他は人通りが無かった。会話も無いので、その沈黙を埋めるようにセミがミンミン鳴いている。

そばにいて5

「神田君？」
彼がはたと足を止めてしまったので、茜は心配になって顔を覗き込んだ。
呼吸が荒く、目元を覆っている手の爪がヴァンパイアのものになっていた。普段は意識して人のものに近づけているらしいので、そこまで気が回らないほど具合が悪くなったのだろうか。
「顔真っ青だよ？気分悪いの？待ってね、倒れないでね、ちょっとどこかに座って……」
前髪を指で掻き分けて様子を見、あたふたしていたら突然その手首を掴まれた。驚いてまたたくと、何かが落ちる音がした。
何だろうと思って下を見ると、有希が鞄を手放した落下音のようだった。
「どうし」
ひく、と茜は喉を詰まらせた。手首の脈打つところに有希が唇を寄せたからだ。そっと唇を近づけて離すまでの一部始終を目の当たりにしていたにもかかわらず、茜はそれが一瞬誰の手首かわからなかった。
それでも感触で自分の手首に有希のソレが触れたのだと理解して、ぼんっと音を立てる勢いで顔を真っ赤にした。
「な、なに、やめて……」
後ろに下がると有希はその分以上に距離を詰めた。
少し長い前髪から覗く黒い瞳が逃さないとでも言うようにじっと見つめていて、それには操られているのではないだろうかという気配さえ感じられた。それほど彼らしくなく、あまりにも無表情だ。
恐ろしさを感じて下がろうとしたが、手首を引っ張られて抵抗する前にあっけなく彼の腕の中に収まってしまった。
「おっ、おかしいよ…どうしたの」

蚊の鳴くような小さな声で一応聞いてみたが無駄だった。返事も無く茜を解放する様子もなく、むしろ恋人にやるように髪を愛しそうに撫でた。
肩のあたりに押し付けた耳の奥に響くのは、自分のとても早い鼓動と、それと対照的にとてもゆっくり打つ有希の鼓動だった。
「神田く……」
髪に口付けていた唇が耳に触れ、そうして脈打つ首筋を伝った。肌に吐息がかかって夏なのに鳥肌が立つ。ぎゅっと強く目を閉じると小さく悲鳴に似た声を上げた。
「待って…っ！」
「待てない」
初めて返事が返ってきたが、それはしっかりした声音ではなく吐息混じりの酷く色気を感じさせるものだった。
ぷつ、と小さな音と共に首筋から頭にかけて鋭い痛みが走った。顔をしかめて反射的に有希のワイシャツを握り締める。
噛み付いて傷つけた部分から次々に血が溢れるが、有希は器用に吸い付いて喉に流し込む。
「ふ……」
舌が傷口を舐めている感触に思わず声が漏れた。傷口に触れるたびにじくじくと鈍く痛むが、それより何より情熱的過ぎる愛撫を受けて痛いどころではなかった。ワイシャツを掴む指も震えて力が入らなくなる。
それは吸血鬼の映画にあるヴァンパイアに襲われるおぞましいシーンというより、艶かしく官能的なベッドシーンを連想させた。
傷口を治癒した有希は飲み損なってこぼれた血を伝いながら舐める。ブラウスのボタンを器用な手つきで外し、鎖骨のくぼみ、さらに下へ行こうとして。
「…っやだ！」
静止を求める声にやっと我に返った有希は、硬直した表情のままゆっくりと引いた。茜は上目遣いににらんで口を真一文字に結んで

はいるが、今にも泣きそうに歪んでいた。
なぜか彼女の背中に回っている手をほどく。
「……み、や……」
彼女がうつむくとじわっと目に涙が浮かんだ。
な、泣いちゃった……何したんだ俺。
現状を把握できなくて戸惑い、茜の格好を見た。ブラウスを掻き集めているが、かなりボタンが開いているようだ。それに首の赤い……。
俺、まさか。
認めたくないけど証拠が如実にそう語っている。
「バカッ！」
茜はキッと有希をにらみつけると平手をお見舞いした。それでもぺちんと間抜けな音がしたので威力はそれほどでもない。
脱兎のごとくその場から逃げ出した茜を追い駆けも出来ず、ただ呆然と立ち尽くした。
「俺、まさか…また」
「首に食いついてたぞ」
「うぉう！？」
冷めた声が指摘した。頭上から聞こえたその声に驚いて飛び退き、ドキバクと跳ねる心臓をなだめる。
塀の上にいたのはシャリアンだった。今は白猫という仮の姿を取っていたが、いつにも増して青い瞳は冷ややかだ。
「ど、どどどどどっから見てた？！」
「あえて言おう。最初から最後まで、と」
ぶほ、と有希は思わず噴き出してむせ込む。
「止めろよ！」
「なぜ？あんな激しいの止められるわけがない」
激しいの、という言葉がでっかい岩になって有希の頭を直撃したぐらいの衝撃があった。今にも道路に倒れそうになっている有希を差し置いて楽しそうにシャリアンは独りごちた。

「いやぁ、それにしても随分深く歯ぁ突き立ててたからな。相当痛かったんじゃないかな。でもそれよりアレか、あんな情熱的なナントヤラされたら泣きたくもなる…」
「ナントヤラまでしてたのか俺！？……つかナントヤラって何」
アレ？どれ？それか？それともあそこらへんまでか？と想像できる範囲でシャリアンいわくナントヤラまでの経緯を辿っていると、彼女は有希の頭に飛び乗った。
「お前、アホだろう。聞くが、ヴァンパイアになってからどれくらい血を口にしていない？」
普通の猫よりも遥かに軽いシャリアンを見上げ、は？と間抜けな声を上げる。有希の瞳は血を思わせる赤で、どうやら彼の場合は血液を口にすると色が変わるようだった。
「さあ？2週間か、それよりちょい」
「ヴァンパイアは最低でも3日に一度は食餌をしなければいけないんだ。それ以上血を口にしないとヒッジョ～に危険な状態になる。さっきまでのお前がそれだな。完全な血液不足。だから我を失ってあんな凄いことまでしてしまったわけだ」
「だ、だから凄いことって何……」
危機的状態だったからなのか、記憶が全く無いことが恐ろしい。気がついたら彼女の身体を舐めていた。
詳しい場所を思い出すといろいろな意味で危ないのでやめておく。
有希はしゃがみ込むと頭を抱えた。
「ああ～泣かせちゃったよ、どうしよう。もう血ぃくれないかもしれない。泣かせちったわけだしうわぁ～どうしよう顔見るのも悪い気がするどうしよう」
「案ずるな」
頭から飛び降りたシャリアンはにまりと目を細めた。
「嫌そうではなかった」
「それってどういう」
「自分で考えろ。あーヤダヤダ若い若い」

鼻歌なんか歌いながら上機嫌で尻尾を振って歩いて行った。
「どういう意味？」
ぽつりと聞いたが答えはどこからも返ってこなかった。

喉が渇いて焼けるように熱かった。それでも走っていたのだが、限界が見えてようやく足を止める。
走っている間に涙は止まったけれど、ブラウスのボタンが開いているのを見下ろしてまたじわりと涙が浮かんできた。
嫌だったわけではない。
怖かったわけでもない。
酷いと思ったわけでもない。
彼はきっと血を飲みたかっただけだ。
こぼれたものを舐め取ろうとしただけだ。
わかっていた。それなのになんだかとてもいやらしいことをされたような気がして逃げ出したかっただけだ。
恋人なんかじゃないのに恋人がするようなことをされてわからなくなっただけだ。
彼にとって私はただ血を提供する人？それとも……。
「そんなはずない」
そんなことあっちゃいけない。
もう他人と深くかかわらないと決めているのに。
「バカ…ッ」
大事な者は作らないと決めているのに――――。

そばにいて6

「ただいまー…」
「うるっせぇな！」
玄関に入るなり怒鳴り声が響いてきたので茜は身をすくめた。おじの声だったが、会社勤めなので昼間に帰っているはずがない。それなのになぜいるのだろうか。
「何よ！こんな時間に帰ってきたと思ったらいきなり出張ですって？！」
おばが珍しく声を荒げていた。こんな怒っているおばは茜の知る限りでは無かった。
茜は恐る恐るダイニングを覗いた。
覗き見た様子では、喧嘩といってもただの喧嘩ではなくかなり激しい言い合いで、床にはテーブルの上にあったティッシュの箱やらテレビのリモコンやらが散乱している。
どうしたんだろ……。
あまり刺激したくはなかったが、放置というわけにもいかず茜は顔を出した。
「あの、ただいま……どうかしたの？喧嘩なんて珍しい…」
二人は姿を見せた茜をキッとにらむ。いつもだったら「お帰り」という言葉をかけてくれるおばの多香子（たかこ）が、今日は人が全く違うように怒鳴り散らした。
「居候が口出さないで！何よ、私が預かってやってんのに偉そうに！」
多香子が怒鳴ってテーブルの上にあった皿を床に叩き付けた。脆い皿は小気味良い音を立てて割れる。飛散したかけらが茜の足元に転がってきた。
――預カッテヤッテンノニ――
多香子の態度より何より、憎悪とも言える感情が込められた言葉

がぐさりと心に突き刺さる。愕然として立ちすくんだ。
おじの義則(よしのり)は眉根を寄せた。
「お前が預かってるんじゃなくて俺が預かってやってんだろうが！勘違いするな！お前だって居候のくせに」
「なぁんですってぇっ！ちゃんと働いて給料入れてる人に向かってそういうこと言うわけ？！私だって働いてるのに家事だってやって大変なんだから！」
取っ組み合いをしてもおかしくないぐらい殺気立っている二人を何とか止めようと、茜は泣きそうになりながら多香子の腕を引っ張った。
「や、やめようよ。喧嘩なんかしないでよ」
「あんたは黙ってて！」
多香子が強引に腕を振り払ったので、勢いで茜は尻餅をついた。
温和な二人がなぜ喧嘩などしているのか、理由さえわからずにいる茜に怒りの矛先が向いた。
茜の目の前に立ちはだかった多香子は彼女の肩を蹴り飛ばした。床にしたたか叩きつけられた茜は短く悲鳴を上げてからむせ込んだ。
「あんたなんか…っ！」
鬼のような形相で多香子は思いっきり茜の腹部を踏みつける。妙な声を上げた茜は苦しそうに何度も咳き込み身体を丸める。そのうちに刺激された胃が痙攣して内容物を吐き出した。昼食前で何も食べていなかったこともあり、胃液しか出てこなかった。
どうしてこんなことになっちゃったんだろ。
汚ねぇな、と義則は吐き捨て、茜をゴミか空き缶を蹴るように蹴った。
「いらないんだよお前なんか！」
いらないからだ。
二人は動かなくなった茜を尻目に再び言い合いを始めた。
いらないんだ。
誰も私のこといらないんだ。

必要とする人なんか……。
———宮野さん。
一瞬有希の顔が脳裏に浮かんだが、本当にまたたきほどだったのですぐに掻き消えてしまった。彼は宮野茜を必要としているわけではない。宮野茜の“血”のみを必要としているだけだ。
自分という存在を必要とする人なんか、誰もいないんだよ。

高校では試験が終了しても授業日数を決められた分だけ確保するために、理由をつけて生徒を登校させなければならない。
今日は掃除の日だった。
「有希」
神妙な面持ちで声をかけてきた冬馬を有希は何事かと見返す。
「具合どうだ？」
「……寝たら治った」
その一言に冬馬の顔が崩れて不細工になった。
「なんだよ！心配して損した！」
食餌してなくて血液不足でした、とはさすがに言えないだろうと思い、心配してくれた冬馬に有希は心の中で謝った。
冬馬は唇を尖らせる。
「ちぇっちぇっちぇっ！有希ちゃん軟弱で繊細そうだからってせっかく心配してやったのにさ！」
「軟弱じゃねぇよ」
箒の柄で冬馬の尻を突いた。
全員で分担しつつさぼりつつ適当にこなしつつ本日の任務を終えた生徒たちはホームルームを終えてそれぞれ帰路についた。
冬馬に散々からかわれた有希は機嫌を悪くしながら下駄箱で靴を履き替えていると、下駄箱の角から茜が現れた。
昨日の事件のこともあり何となくお互いを避けていた二人だったが、こうもばったり会ってしまうと逃げようが無い。目が合って気

まずく、かと言ってそらすのもさらに気まずく、二人は見つめ合ったまま固まってしまった。
「おはよう神田君」
茜は何事もなかったかのようににこっと微笑んだ。
「お、おはよッス」
おはようというかすでにこんにちはの時間帯なのだが、つられて有希もぎこちなく応える。
昨日のことは気にしてないんだろうか。
女の子だし、泣くほど怖かったみたいだし、そんなことはないだろうと思いつつもおずおずと尋ねた。
「あ、の……昨日の…」
「気にしてないから」
にこやかに笑っているが、逆にそれが空恐ろしい。意外と表面上では微笑んでいる方が腹の中が煮えくり返っているものだ。
「あの、本当に悪かった…俺、3日に一度食餌するなんて知らなくて。飢えてたみたいで、何かこう、怖い思いさせちまって」
「大丈夫、気にしてないから」
本当か？
「じゃあね」
「あっ、ちょっとま……」
そう言ってさっと身を翻してしまった茜の肩をさりげなく掴んだ。
強く握り締めたわけでもない。しかし彼女は「イタッ」と叫ぶと肩を押さえてしゃがみ込んでしまった。
有希も慌てて隣にしゃがんだ。
「悪い、そんなに力入れたつもりなかったんだけど」
背中に手を置くと茜はビクンと跳ねた。
「……っ！大丈夫っ、じゃあねさよなら！」
逃げるようにして駆け出した茜を呆然と見て、有希はいぶかしげに眉根を寄せた。
強く叩いたわけでもないのに、どうしてあんなに痛がるんだ？

どうして暑いのに長袖のブラウス着てんだ？
何となく感じていた違和感。それとは別に次々と湧き出た疑問が膨らむ。
答えが出る前に有希は駆け出していた。

そばにいて7

校舎を出たあともしばらく走っていた茜は後ろを振り返り、付いて来ないことを確認してほっと息をついた。瞬間、誰かに思い切りぶつかってしまった。

「んにゃっ！…ごめんなさ……」

ぶつかった相手を見て茜ははっと息を詰め、一歩引こうとした。しかし、茜が逃げる前に逃がすまいと伸ばされた腕の方が早かった。

「どうして待ち伏せできたか不思議？でも俺はヴァンパイア、化け物だ。人間じゃない。前にヴァンパイアは変身出来るって言ったよな」

ヴァンパイアはネズミや虫、はたまた霧にも変身することが出来る。有希はここ最近、変身能力を覚えたのだが実際に使ったのは初めてだった。

有希は両手で茜の二の腕をそれぞれ掴んだ。男と女の腕力では男に分があるし、ましてやヴァンパイアは人間に言わせると怪力だ。茜に逃げる術はなかった。

「はっ…離して」

「離したら逃げるだろ。逃げようとしたらさっきみたいに痛いとこに触るから逃げようなんて思うなよ」

いつになく強引な有希の行動を見て、茜は泣きそうな情けない顔をしながら半歩引いた。

「何で……怒ってるの」

「怒ってない。聞くけど、どうして怪我なんかしてんだ？」

「階段から落ちたの。打ち身ぐらい出来るよ」

有希は顔をしかめた。

「全身に？肩にも背中にも？もしかして腕にもあるから長袖着てるんじゃないのか？」

問い詰める言葉とその視線に耐えられなくて茜はうつむいた。

「ほっといてよ。神田君に関係ないでしょ」
しかめっ面からさらに眉根を寄せた有希は掴む手に思わず力を込めた。傷にさわったのか茜の肩が跳ねる。
痛かったのは茜の方なのに、有希の方が痛みをこらえているような顔をしていた。
「友達が怪我してるのほっとけないだろ。それとも俺はまだ友達じゃないのか？そりゃ今まで話したことなんてなかったし、俺の事情に巻き込まなきゃただのクラスメイトで終わってただろうよ。でも、今は違う。……違うと俺は思ってる」
まくし立てるようにして言うと、一度視線を下げた。再び見つめられた茜は硬直して言葉一つ出てこない。
「何で言ってくれないんだよ。階段から落ちただけで全身に打ち身なんか出来るはずないだろ？何があったんだよ」
「な、何もないよ……本当に、何も」
「この間みたいに手遅れになるのは嫌なんだ。もっと早く気付いてれば良かった、手を打っとけば良かったなんて後悔したくない」
茜は真摯に見つめてくる有希を戸惑いがちに見返した。
どうして私を気遣うの？
いらない子なんじゃないの？
誰にも必要とされなくて、ただ邪魔なだけなんじゃないの？
「わからないよ……」
全部わからない。理解できない。
どうしてこんなにカサカサな傷口に、いたわるように触れてくるんだろう。
「わかんないの、どうしてなのか……急に、おじさんもおばさんも怒って、私何か悪いことしたのかな……」
うつむいた茜は涙声でぽつりぽつりと言った。
「私が悪い子でいらないから、二人とも怒ってるのかな。もう私、いらないのかな。わかんないよ、どうしよう……」
有希はそっと力を緩めると今度は逃がさないためではなく、今に

も崩れそうな茜を支えるために手を添えた。
「わからなきゃ、聞けばいい。面と向かって聞くのは怖いか？」
茜は顔を上げた。今にも涙がこぼれそうな瞳で有希を見て、すっかり落ち込んだ様子でうなだれた。それでも首を横に振る。
「行こう。俺も付いてく」
そんな彼女の背を優しく撫でて歩くように促した。重い足取りで歩き始めた茜の手を取った。
「俺も聞きたいことあるし」
呟いたそれは酷く殺気立っていて、隣にいた茜は思わず鳥肌が立ったぐらいだ。繋いだ手の爪が長く伸びていることに気がついて慌てて引き止めるようにして腕にすがった。
「こ、殺さないで。お願いだから、殴ったりしないで。だって本当はおじさんもおばさんもいい人なんだよ？私行くとこなかったのに引き取ってくれて、面倒だって見てくれて、いい人なの。だから殴ったりしないで」
「……殺さないでって、俺今そんなに危なかった？」
必死に頷く茜に「あ、そう」とため息混じりに言い、少し思案して答える。
「殴らないっていうのは…まあ、努力する」

茜が鍵を差し込み捻ると、オートロックの扉が開く。エントランスに入った有希はホテルのようだと思った。
光の差し込む明るい廊下。まるきり建物の中ではなく、吹き抜けや緑も植わっていた。
エレベーターに乗って8階で降り、茜はある扉の前で立ち止まった。完全に硬直している茜の鍵を持つ手が震えている。
「やめる？」
気遣って言った短い問いに対して、茜は鍵を鍵穴に挿した。
新しいはずなのになぜかギィ、と軋んだ重い音を立ててドアが開

く。中は薄暗い。開けたドアから玄関に光が入るが、それさえも呑み込んでしまいそうなほど空気が淀んでいた。
茜が中に向かって言った。
「ただいま……おばさん、いる？」
今日は休みで家にいるはずだ。緊張で大きく打つ心臓をなだめようと胸の前で手を握り締めた。
すると多香子がダイニングの方から怒っているような足取りでやってきた。実際怒っているか、まだ機嫌が悪いのかもしれない。茜を見るなりフンと鼻で笑う。
「何、帰ってきたの？別に帰ってこなくても良かったのに」
「あんたなぁっ…」
他人が聞いても不快に感じる言葉に有希は頭にきて口を開いたが、前にいた茜がそれを制した。一歩前へ出る。
「おばさん、話があるの。聞いてくれる？」
「私は話なんかないわよ。それにしてもなぁに？男なんか連れ込んで、私へのあてつけ？あんたなんかいらないのよ。わかったらさっさと出てって」
決意も虚しく、怖気づいて踏み出た分以上に茜は下がった。その肩を掴んで支えた有希は怒りもあらわに怒鳴る。
「あんたそれでも親か！」
「本当の親じゃないわよ。でも私が育ててやったんだから、こいつをどうしようと私の勝手じゃない。もういらないから追い出すだけよ」
「もういらないって、物じゃないんだぞ？！」
「だから？」
多香子は茜を見下ろした。その瞳は一切情など感じさせない冷酷なものだった。
「だから何なの？邪魔なのは捨てなきゃ、家の中がゴミだらけになるだけじゃない」
「――――っ！」

カッと頭に血が上り、有希は茜を押しのけて殴りかかろうとした。が、それを後ろから抱きついてきた茜が止める。
「ダメッ！」
「っ宮野……離せよ、コイツ一発殴んねぇと気が済まねえ」
下手をすると殺してしまいそうな勢いの有希は多香子をにらむ。そのとき、まるで悪魔のように口をゆがめて嗤っている彼女の背後に、黒い炎のようになものが一瞬ちらついた。
またたくとそれは影も無く消えてしまっていたが、漠然とだがその正体に心当たりのある有希は愕然とした。
多香子は壊れたように嗤った。
「あは、あはははは！そうよ、邪魔なのよ！さっさと出て行きなさいよ！もう帰ってこなくていいわ、永遠にね！」
茜は後ろ手にドアを開け、有希を半ば強引に廊下へ引きずり出した。
多香子の狂った笑い声がドアを閉めると同時に消え、あたりは急にシンと静かになる。悪い夢でも見ていたのかもしれないと思わせるほど妙な気分だった。
茜は背中にくっついた状態のままだった。二人の周りだけ時が止まったかのように有希もその場に立ち尽くす。
何でだ。
何で俺や親父じゃなくて、宮野ばっかり狙ってくるんだ。
関係ない宮野ばっかり、酷い目に遇って。
俺のせいで……？
「……ごめんな」
ぽつりと漏らした呟きに、うんともすんとも言わなかった茜はそこで初めて有希に回した手をぎゅっと握り締めた。背中に顔を押し付けているからなのか、「何が」と返してきた言葉は酷くこもっていた。
「あ。えっと……殴らないようにするって、言ったけど。結局殴りそうになった。止めてくれて助かった」

返事は無かった。有希はぎこちなく言葉を続ける。
「“大丈夫か？”なんて、全然大丈夫じゃなさそうな奴に聞かないけど……あの、手離してくれないか？」
ゆるゆると腕の力が緩み、有希はやっと茜の方を向くことが出来た。
彼女は泣いていなかった。
けれど、怒ってもいなかった。感情が全く読めない無表情をしていて、魂を抜き取られたように生気が無い。放っておくとどこかへ消えてしまいそうだった。
有希の魂をあげたあとに初めて目を覚ましたときのように。
「宮野、俺んち来いよ。他に行くとこ…ないだろ？」
あのときのように不安に駆られ、どうにかして繋ぎとめておきたくて有希は噛み締めて言った。
「ウチはさ、別にいつまでいても構わないからさ。どうせオヤジと化け猫しかいねぇし」
「ばけねこ」
ゆっくりと呟いた茜を覗き込んだ。
「晩飯も好きなの作ってやるよ、何がいい？無茶な注文じゃなきゃ何でも出来ると思うんだけど」
有希がその背を押すとのたのたと歩き出した茜は、何度かまたたいてから見上げた。
「神田君が作るの？お母さんは？」
「お袋いないから。俺を産んだときに死んじまったらしいよ。だから家事全般俺の仕事」
何を考えていたのか、エレベーターが来るまでじっと有希を見ていた茜は、しばらくしてから小さく「そうなんだ」と呟いた。
エレベーターのドアの上に並んだ数字のランプが移動しながら点滅して、上階からだんだんと降りてきたことを示す。ランプは８階で止まり、エレベーターに乗り込む寸前、有希は茜の家の扉を苦い顔つきでにらみつけた。

そばにいて8

『なんだい、可愛くない子供だね』
両親が亡くなったのち父方の祖母に預けられたが、そこで祖母にそう言われた。
『話し方がそっくりじゃないかい』
私の母親に話し方がそっくりだということで、祖母にはとても嫌がられた。祖母は母と仲が良くなかったからだ。
ほとんど駆け落ちのような状況で結婚した両親なので、祖父母同士の交流は無いと言っても過言ではなかった。
息苦しい毎日。
物が食べられなくなって、気がついたら病院にいた。
『大丈夫？酷い目に遇ったねぇ』
今度引き取ってくれたのは母の妹だった。
彼女の家には私より2歳年上の男の子がいた。
『お前、ヤクビョウガミだって皆言ってる。だからお前の父さん母さんも死んだんだって』
髪を引っ張られたり叩かれたりするのはしょっちゅうで、散々いじめられた。暴力をふるわれているのは分かっていたはずなのに、叔母は見て見ぬふりをした。
きっと私が悪い子だから。
いい子になろうと努力した。皆に嫌われない、望まれる“いい子”に。
他人が嫌なことは率先してやったし、小学校の生徒会長もやった。成績だって良くなるように毎日勉強した。家事だって手伝った。
ありがとう。ありがとう。ありがとう。
偉いね。いい子だね。これも頼むよ。
頑張って。君なら出来るよ。やってくれないか。
評価されるたびに周囲の期待が膨らんで。重くのしかかって押し

つぶされて。
でも“いい子”にならなきゃ。
皆に認められて、望まれて、必要とされる“いい子”に。
『凄いのね、茜ちゃん。また学年で1番なのね』
叔母ちゃん笑ってる。嬉しそう。私、“いい子”になったんだね。
『あの子、尭(たかし)よりも成績がいいのよ』
寝付けなくて何か飲もうかと思った夜、電気のついたダイニングにぼそぼそと小さな話し声があった。
叔母とその旦那さんだった。
さめた頭で何の話かすぐにわかった。心臓が大きく跳ねて、一気に心拍数が上がる。緊張で身体が強張って壁に背中を預けて立ちすくんだ。
叔母は憎しみを込めた声で言った。
『ちょっと癪だわ』
ああ、私、“いい子”じゃなかったんだね。
叔母さん喜んでくれたけど全然“いい子”になれてなかったんだね。
望まれてなかったんだね。
いらな、かったんだ…ね。
『どうしたの?!茜ちゃん!』
トイレに駆け込んで吐いている私を見つけた叔母は驚いてとても心配そうだったけれど、もう信じられなかった。
ソノ仮面ノ下デハ憎イト思ッテルンダネ。
最初のうちは拒食症で入院した私の入院費は出してくれたものの、叔母は「早く帰ってこれるといいね」とは口にしなかった。
入院して2週間経ったある日。
『茜ちゃんだよね?』
病室にまた知らない夫婦がやってきた。話によると父の兄だということだ。
『私たちと暮らさない?』

優しそうな女性。
この人にも子供がいるのだろうか。
『こんなに痩せちゃってかわいそうにね』
頬を撫でる指は優しかったけれど、信じちゃダメだ。
また裏切られるかも。また邪魔だって言われるかも。またすぐにいらないって言われるかも。
かくして退院した私は伯父の家に引き取られることになった。
『いやぁ、もっと早く迎えに来れると良かったんだけど、こっちも会社が倒産したりなんだかんだで立て込んでてね』
遅くなってごめんよ、と伯父は笑った。
『ねえ、そんなに手伝いなんかしなくていいのよ？友達と遊んでらっしゃいよ。学生は遊ぶのも仕事なんだから』
困ったように笑うおばさん。
二人といると、もっと“いい子”の仮面をつけなきゃ、そう思う心がなぜか崩れて行くの。
どうしてだろうね。
大事になってくの、どうしてだろうね。
でも。
大事になればなるほど失ったときに辛い。
苦しい。痛い。辛いつらいツライ。
ダメ。これ以上好きにならない。なっちゃダメ。
この境界線を越えちゃダメ。
それなりの関係でそれなりの必要性。
心の中まで侵入を許しちゃダメ。

「私もう、大事な人は作らない」

誰かが台所に立って、ご飯を作っている気配がした。

包丁で何かを切る、トントンと早いリズムの音。
お鍋が煮える音と、湯気の香り。
悪い夢を見てたんだ。夢がやっと覚めたんだ。お母さんはいつも通り台所で夕食を作ってて、遊んで帰ってきた私は疲れてダイニングテーブルに突っ伏して寝ちゃったんだ。
「……おかあさん」
トン、と包丁の音が止まった。
足音が近付いてきて、その人は頭をぽんと軽く叩く。
「起きた？でも残念。俺はお母さんじゃないよ」
男の人の声だった。
茜は勢い良く上体を起こした。横を向いていたのか首がものすごく痛い。
「えっ？あっ？神田く……？」
「神田君です。おそよう、良く寝てたよ」
グリーンの太いボーダーのエプロンをした彼は、ふふ、とおかしそうに笑うと茜の頬を指差した。
「あとがついてる」
「うやぁ」
よだれも垂れてた。
ごしごしとブラウスの袖で拭くと「それで拭くな」と有希がツッコむ。調理を一時中断した有希は茜を連れて自分の部屋へ服を取りに行った。
「制服のままじゃ動きにくいし汚しちゃうかもしれないしな。俺のでいい？あいにくと女物はウチにないんだ」
ほい、と服を渡された茜はまだ夢うつつなのか、ぼーっとしながら受け取った。
「着替えたら下りて来て」
指示した有希は部屋の扉を閉める。足音が去って行ってなんとはなしに部屋を見回す。飾りの少ないあっさりしている部屋だが木製の家具とグリーンで統一されていた。

エプロンも緑だし、好きな色なのかな。
机には教科書が並び、隣の棚には少年漫画が3タイトルぐらい並べられている。
なんだか落ち着く部屋だ。
ようやく着替え始めた茜は、袖を通したTシャツもズボンもブカブカだということに気がつく。ズボンはウエストの紐を締めて縛り、裾を折った。
「おっきすぎて何か……エロい」
彼氏の家に泊まりに来たみたいだ。
「っち、違うもん！そんなんじゃないもん！」
自分で言ったことに激しく首を振った。

そばにいて9

階下に下りた茜を待っていたのは夕飯だった。おじ夫婦のマンションをあとにした二人は、有希の家まで帰ってきてから少し遅い昼食を取った。そのあとに、夕食は茜の好きなものを作ってやるという約束で買い物に出かけたのだった。

１本１００円で買ったとうもろこしが香ばしい焦げ目をつけた焼きもろこしに変身して食卓に上がっている。

「親父遅いな…シャリアンも戻ってこねぇし。どうしたんだろ」

時刻はすでに８時近くになっていた。

茜は小首をかしげる。

「神田君のお父さんはいつももっと早いの？義則おじさんはね、いつもこのぐらいに帰ってきて……」

有希があえて避けていた話題を茜自身が切り出してしまった。気付いたときにはすでに遅く、無意識とはいえ茜は自分から伯父の話をしてしまったことと昨日のことを思い出してすっかり沈んでしまった。

うなだれた茜に有希はわざと明るく振舞う。

「とりあえず先に食べちまおう？」

頷きかけた茜は、しかし、口を両手で押さえて前かがみになった。突然駆け出した彼女の目指した先はトイレだ。

乱暴に扉を開けて駆け込んだ。何事かとあとからやってきた有希の目に映ったのは、吐き戻すものもないのに胃液を吐き出す茜だった。

「宮野！大丈夫か？！」

背中をさすってやるとあらかた吐き出してすっきりした茜は短く安堵の息を吐いた。

「ごめん、汚い」

「そんなの別に気にしないけど。俺、昼飯に何か変なものでも食わ

せたっけ？」
流してトイレを出、洗面台で口をゆすいでいた茜は含んでいた水を出すと「ううん」と答える。
「食べ物のせいじゃ、ないの」
新品のタオルを渡された茜はそれで居心地悪そうに口元を隠しながら言った。いぶかしそうな顔をして思案した有希は茜を見る。
「あのさ。宮野って、肩肘張りすぎてないか？前から思ってたんだけど。頑張りすぎな感じがするんだけど。もうちょっと甘えてくれた方が回りも安心すると思うけど」
そんなに家事手伝ってくれなくていいのに。
せめて家ではもっと肩の力を抜いてくれて構わないのに。
義則にも多香子にも何度も言われた言葉だった。それらを一つの言葉にまとめると「頑張りすぎ」であって、宮野夫妻はせめて家の中でだけでも茜が肩の力を抜けるようにしたかったのだ。
『何でも嫌がらずにやる子がいい子って誰が決めたの？子供はね、元気が一番なんだよ。我慢しないで全然いいんだよ』
茜ちゃんはそのまんまでいいんだよ。
「……ふ」
「宮野？」
タオルに顔をうずめてしまった茜を不思議そうに見た。笑いを含んだ情けない声が小さく言った。
「神田君って、優しいね。お母さんみたい」
「コレでも一応男ですけど」
突然何を言い出すのかとまたたいた有希は、ちょっと意地悪そうに笑って見せた。
「優しくするのは下心があるからかもな」
「え、な、何ソレ……」
耳まで真っ赤になった顔を上げて金魚のように口をぱくぱくとさせた茜の様子を見て、有希はおかしそうに笑った。
「ご飯食べられるか？やっぱとうもろこしはやめといた方がいいか

な」
「ん、食べる」
茜は頬を膨らませて唇を尖らせた。

夕食を終えた茜はお湯まで使わせてもらい、1階にある畳の部屋に来客用の布団を敷いてもらった。
時刻はとうに12時を回っているのに有希の父親やシャリアンという（有希に言わせると）化け猫は帰ってくる気配は無かった。
しんと静まり返った部屋。見慣れない天井。
真っ暗な世界。
「……ええっと」
どうしよう、と呟いた茜は横になっていた身体を起こした。
「寝らんないかも」
両親を失うきっかけにもなった幼い頃の交通事故のせいで、暗いところは苦手だ。
一人になると暗いことも手伝ってか、昨日や今日の出来事を鮮明に思い出してしまう。思い出すとなぜか痣が痛んだ。
――――いらないのよ！――――
アンタナンカ、イラナイノヨ。
胸が苦しくなって泣き出しそうになった。
そっと布団を抜け出してダイニングを横切った。2階に続く階段を見上げるが先は真っ暗で、人の気配が無くまるで無人のようだ。
神田君は寝ちゃったのかな。
どうしよう。寝ちゃったんだったら行っても迷惑なだけだよね。
って、どうして神田君のところに行こうとしてるんだろ。
だ、だって、何か淋しくて、他に誰もいないからしょうがないよ。
茜は心の中で自分と会話した結果、2階に上がってみることにした。踏み出して階段を上がると、軋んでキィ、と小さく音を上げた。
「どうかした？」

「ひぃやあぁぁぁぁぁぁっ！？」
突然背後から声をかけられた茜はびっくーん！と跳ねて段差でこけ、階段に身体をぶつけた。ひっと息を詰まらせるほど痛かったようで、震える声を絞り出す。
「っいぃ……い、痛いとこぶつけたぁっ」
「そんなにびっくりしなくても」
「だって、だって、音も気配も何も無しに後ろに立たれて、びっくりしないわけない…！」
そおか？と言って首をかたむけた有希の格好を見た茜はぎょっとして下がろうとし、それ以上下がる余地は無かったので肘をぶつけた。
あきれた有希は手を差し伸べる。
「何やってんの」
「やっやだっ！何でハダカなの？！」
なおもズリズリと後ろに下がろうとする茜に、差し伸べた手を引っ込めた。その手を頭から被ったタオルに持っていき濡れた頭を拭く。
「風呂上がりだよ。裸ったって、上半身だけだろうが」
「パンツ見えてるよ！」
「これは許容範囲だろ？！」
腰まで落ちたシャカパンから下着が覗いていた。最近の男子高校生にはよくある状態だ。なんだかいけないものを見てしまったような気がしてならない茜は手で目隠しをする。
「やだぁ！ちゃんと服着てよぉっ！」
「俺の格好がいかがわしいって言うんだったら宮野だってそうだろ」
不機嫌そうに眉根を寄せた有希は無理矢理茜の腕を掴んで立たせると、壁に押し付けた。茜のTシャツの襟元に指を突きつける。
「服がデカすぎ」
「それは神田君のだから…っ！」
ふと距離が近くなって、有希の濡れた髪が頬に触れた。手のひら

が布越しに脇腹から背中を撫でて、背筋をなぞる。
求められてる。
淋しかった心が求められることを望んでいたのだと頭の片隅で気がついた。
吐息が首筋を撫でる。
――――私もう、大事な人は作らない――――
「…っま、って！」
ぐっと茜は有希の肩を押した。びくともしなかったが制止したいということは伝わったようで、有希は身体を離す。
「食餌したかっただけなんだけど。ほら、最低3日に一度はしないと駄目らしいし。また血液不足で迷惑かけたくないし。……ヤダ？」
見るからに気の抜けた茜は小さく首を振った。
「大丈夫。ごめんね、びっくりしたから」
髪を耳にかけるとまるでそれが合図だったように、ゆっくりと顔を近づけた有希は首に牙を立てた。
前よりはずっと優しく、いたわるように。
「俺」
食事を終えた有希はポツリと呟いた。その次の言葉がなかなか出てこないので、茜は乱れた襟元を直しながらまたたいた。
「常夜の国に行こうと思うんだ」
「え？」
聞き返したが決して聞こえなかったわけではなかった。ちゃんと聞こえていた。けれど脳まで達していないみたいに理解が追いつかなかった。あまりにきょとんとしていたのか、有希は首をかたむけて少し笑って見せる。
「言ってなかったけど常夜の国ってのがあって、魔物の国らしいんだ。元々ヴァンパイアはそっちに住んでるんだと。俺は……俺のせいで宮野が狙われてんだと思うんだ。俺が向こうに行って、境界…入り口も閉じれば被害はなくなるはずなんだ」
茜はようやく言わんとしていることを理解して、胸の前で手を握

り締めた。
「私は？」
手が震えている。
「私は？神田君がそっちに行くなら私は…？」
有希は言いにくそうに視線を下げた。
「宮野は、こっちに残れ。おじさんとおばさんも多分悪魔の仕業だ。そっちは俺が何とかする。本当は行くか行かないか、盟約のこともあって散々考えた。だけどやっぱり、俺は化け物で向こうへ行くのが一番いいから」
茜はうつむいてしまった。
私を置いて行くんだ。
必要ないから。
「そ、か……わかった。お休み！」
有希の顔も見ずに横を通り過ぎ、畳の部屋に駆け込んだ。その姿を襖が閉まるまで見送った有希は、苦虫を噛み潰したように険しい表情に変わった。

そばにいて１０

有希は部屋の扉を静かに閉めた。決心して言ったことをもう一度頭の中で思い返す。

『常夜の国に行こうと思うんだ』

『私は？神田君がそっちに行くなら私は…？』

震えた声。きっと泣きそうだったに違いない。

扉に寄りかかってガシガシと手荒く頭を拭いた。身体の中がもやもやする。すっきりしない。

父親とシャリアンが帰ってこないというのも原因の一つだが、それ以上にさっきの出来事が尾を引いていた。

言う前よりも心のもやもやが濃くなっている。

「くそっ…」

忌々しそうに舌打ちをした。

王の証、クリンキルメルの指輪を巡る争いに茜を巻き込みたくなかった。予想では巻き込まれないはずだった。茜はただ自分と血の盟約をしただけの人間で、指輪と全く関係ないからだ。

でも違った。魔物たちは何の関係もない茜を確実に狙っている。

理由はわからない。自分にかかわりを持っている人間を狙っているにしては、冬馬やその他の人間が対象にならないことはおかしい。

誰かが裏で糸を引いてる……？

現段階ではどこの誰なのかはっきりしない。でも、もし黒幕がいるとしたら茜のおじとおばを操っている雑魚を差し向けたのが多分そうだろう。

「洗いざらい吐いてもらおうじゃねぇか」

これ以上巻き込むわけにはいかない。だから自分は化け物の国に行く。

それでこちらの問題は全て片付く。

有希は目を閉じると呼吸を整え、服と身体が――繊維の一本一本

がほどける様を、細胞の一つ一つが繋がることをやめ、砂のように崩れて風に流される様をイメージした。
瞬間、身体と身につけていた服までもがさっと霧散して、行き場を無くしたタオルだけが床に落ちた。

茜はあてがわれた部屋に駆け込むと、思い切り襖を閉めた。有希の声が耳の奥から頭の中までこだまする。
『常夜の国に行こうと思うんだ』
いらないんだ。
『宮野は、こっちに残れ』
私はいらないんだ。
『あんたなんかいらないのよ！』
私は必要ないんだ。誰にも求められないんだ。いらない子なんだ。
側にいられると思ったのに、今度こそ、必要としてもらえるんだと思ったのに。
誰か一人でいい。たった一人、必要としてくれる人が側にいればそれで良かったのに！
小さくなっていく足音。離れて行く背中。皆の姿が遠のいて。
暗闇に、私一人を残して。
「なんでぇ…っ！」
わからない。どうしてこんなに苦しいのか。
必要とされなかった虚しさ？
置いて行かれる淋しさ？
世界が自分を押しつぶす息苦しさ？
教えて欲しい。誰でもいい。
「助けて……！」
ここから、苦しくないどこかへ。
「こんばんは、レディ」
耳に心地良い声に茜ははっと顔を上げた。

「初めまして」
正面の障子の前に誰かが立っている。やわらかな声の主の顔は暗くてよくわからないが、聞いたことのない声だった。
茜の足元まで伸びた細長い影の持ち主は、淡い月の光を背中に浴びながら手を差し伸べた。
「私と一緒に、来てくれるかな？」
茜はあっけにとられて身動きが取れない。身じろぎしない茜の様子を見て取って、その人はゆっくりと、そして最愛の人に語りかけるように甘美に言った。
「君が必要なのだよ」
その一言は茜の心をくすぐった。
擦り剥けてささくれた柔らかな部分を潤す言葉だった。
月明かりの中、本当に欲しい物を手に入れる夢でも見ているように微笑むと、彼女は一歩足を踏み出した。

有希が霧に姿を変えて向かった先は茜のおじ夫婦のマンションだった。
窓が開いていたので網戸から侵入する。実体に戻るときは霧に変身するときよりも簡単だった。身体が元に戻るわけなので自然と素早く細胞と細胞が繋がり構築される。
降り立ったダイニングは物取りが侵入したのかと思われるぐらい荒れていた。
ゴミ箱は倒れて中身をぶちまけていて、割れたコップとその中身が散乱して、同じく割れた皿が片付けられないまま放置してあった。床の上には吐瀉物もある。
昼間に来たときよりもさらに空気が淀んでいる気がして、有希は手で鼻と口を覆った。
「来た」
細い声と衣擦れの音がした。まず視線だけそちらへ向け、次に斜

に見やる。ダイニングに続いている部屋から現れたのはおばの多香子だった。
しかし、目は窪んで餓鬼のように眼光だけがギラギラと鋭かった。
「ははっ……本当に来た」
操り人形のようなぎこちない動きをしながら歩み寄ってきたそれを有希はにらみつけた。
「出てけよお前、その身体から」
「何だ、想像していたほど馬鹿じゃないのか。我々の正体を見抜けるほどの知能はあるわけだ。話を聞く限りでは阿呆だと思っていたのに」
「どこの誰だがわかんねぇ奴に阿呆呼ばわりされる覚えはないね」
ふっと姿が掻き消え、瞬時に背後に回った有希は多香子の首に鋭い爪を突きつける。首はのけぞらせたが、彼女を操っている中身はおかしそうに笑った。
「やっぱり阿呆だ。そんなことをしても脅しになんかならない。器を壊すだけで我々に傷ひとつだってつけることなど出来ない。無知だな。我々のことを知らな過ぎる」
「黙れ。お前は俺の質問にだけ答えればいいんだ。誰の差し金だ。どうして宮野を狙う？」
「坊ちゃんは可愛いねぇ……いじめ甲斐がある。その“ミヤノ”が大事なんだろ？手放したくないんだろ？守るためだったら何でもするんだろ？」
「答えになってない」
眉をひそめた有希は突きつけた爪を引っ込める代わりに首を握り絞めた。呼吸が苦しくなる程度に絞めているわりには、それは余裕そうに笑う。
それの言うとおり、身体と同化していないようだ。
手の力を緩めた。するとそれは憐れな者を見下すように、ふっとため息をつく。
「ニンゲンなんてそんなもんだ。愚かで弱くて、それなのに自分に

力があると思い込んでて、他の者を守るためだったら犠牲もいとわない。ニンゲンの中でニンゲンとして育った坊ちゃんも、ヴァンパイアに転化したとはいえ心根まで変わるわけじゃあない。そうだろ？」

と、突然背後から羽交い絞めにされた。

「何…？！」

気配が無かった。それでも気付かなかった間抜けな自分に歯噛みして、そいつを肩越しに見る。茜のおじである彼は同じく操られており、口の端をゆがめて言った。

「無知な坊ちゃんに忠告してやろう。元来魔物というのは特定のものに執着しないんだ。生来移り気であるということと、もう一つ、あえて執着しないことにしているという理由がある。何でかわかるか？」

そちらに気を取られている隙に多香子を操っている奴は距離を取った。手に銀色に光る小さな何かを握っている。小さすぎて何だか判別がつかない。

多香子は道化師が拍手を求めるように大きく手を広げた。

「弱みになるからだよ！執着、心を惹かれるもの。つまりそれがないと生きて行けない、それがないと楽しくない、それがないと駄目になる！それは己の弱みになる。弱いものは強いものの糧となる運命……弱肉強食の世界だ。弱っていれば喰らう、隙があれば喰らう！」

「……っ！？」

そいつがずいっと顔を近づけたと同時に、左の鎖骨の下あたりに痛みを感じた。

有希は顔をしかめて左肩の方に視線を向ける。左肩から指の先までが、肘をぶつけたときのように痺れた。

ペーパーナイフだ。身体に突き刺さった小さなそれは、ペーパーナイフとは思えないほど有希にとって凶器だった。ヴァンパイアに転化してからは多少の傷は全くと言っていいほど問題ない身体にな

っていた。それなのに、たかだか小さなペーパーナイフが刺さっただけでこんなにも影響があることは不可解でならなかった。
冷や汗が額に浮かんだ様を見て、多香子は満足そうに笑んだ。
「こちらの世界は常に危険が付きまとう。だから最近では血の盟約もする者は少ない。盟約した者の血しか受け付けないのであれば、それを手の届かないところに置いておけば手を下すまでも無く消滅する」
有希の顎を掴んで自分の方を向かせた。
「弱みを作らない方がいいよ、そうでないと喰われるから。巻き込んだ小娘ごとズタズタにね！……ま、今日はこれぐらいにしておくか。あまりいじめるなと言い付かっているしね。さてさてそこで問題だが、小娘は無事でしょうか？！」
途端に多香子はガクンと崩折れた。羽交い絞めにしていた義則も倒れこみ、操っていた悪魔が二人の身体から耳障りな笑い声とともに現れる。
大きさは子供ぐらい。馬の頭で長い鼻面を持っているのに口の中には牙がずらりと並び、獅子のような金色のたてがみが額や顎を覆っている。身体と前足は猿、後ろ足は牛のような蹄のついた動物の足をしていた。
「宮野が何だって？！」
背に生えている蝙蝠のような翼をはためかせ宙に浮いた彼らは、左肩を押さえて踏みとどまった有希をせせら笑った。
「ガッコー、早く行ってやらないと危ないかもな！」
それだけ言い残し、空中で一回転すると悪魔の姿は消えてしまった。
「待て！学校がなんだって……、宮野っ！」
応えが無いのはわかっていても呼ばずにはいられなかった。
こんなことになるなら、目を離さなければ良かった。

そばにいて11

「どこに連れて行ってくれるの？」
抱き上げられた茜は夜空の散歩を楽しみながら夢心地で聞いた。
男は優しく微笑む。金色の瞳と短い髪が月の光を受けて鈍く輝いた。
それは本当に夢のようで、まるでお伽話に出てくる王子か何かに思えた。
そう、その通りだ。確かに彼は今の茜にとって、息苦しい世界から開放してくれる救世主だった。
男が降り立ったのは学校の屋上だった。着地した場所は、間違えて落下しないように取り付けられている手すりを越えた向こう側だ。端までは1メートルほどあるものの、首を伸ばせば普段は見ることが出来ない上からの景色を望むことが出来た。
頬を撫でる夜風に誘われて、ふとすると踏み外してしまいそうな危なさがある。背筋を恐怖が撫でて茜は手すりに捕まった。
反対に男は恐怖など微塵も感じさせない様子で唇を笑みの形にした。
「君にとても興味がある。宮野茜さん？」
「何で、名前……」
「申し遅れたね、私はゲルギリウス。皆からはゲルグと呼ばれている。君のことは調べさせてもらったよ」
さっきとなんら変わらない微笑をたたえているにもかかわらず、茜にはその笑みが底知れないものを秘めているように見え始めた。
「父、母、兄弟なしの3人暮らしだったが、幼少の頃、交通事故で重傷を負い、両親もその事故により他界。その後、親戚にたらい回しにされひとところに落ち着けた試しがない。中学生のときはストレスにより拒食症になり入院。現在はようやく父の兄が後継人となり、伯父夫妻と暮らしている……間違いはないかな？」
カンペも見ずに彼はすらすらと誤り無く茜の過去を口に乗せた。

親戚では詳しく知っている人がいるかもしれない。けれど、顔も見たことが無い全く知らない人物にそこまで徹底的に調べ尽くされていたのかと思うと空恐ろしくなり、手すりを命綱代わりにじりじりと後退した。

「どうしてそこまで……あなた、何者」

「いつの時代だって裏の情報は容易く手に入るものさ。裏の世界の住人なら、なおさらね」

肩をすくめたゲルグは言葉を失った茜を尻目に続けた。

「幼い頃の影響かな？身近な人を失くすことにとても怯えているね。だから他人との深い繋がりを避け、それなりの関係を保つ。ああ、しかし最近は……そうでもないのかな？」

小首をかしげると首の筋が浮き上がる。王子様、と少しでもよぎった頭を疑った。内に獣を秘めた、逞しい筋骨隆々の男性。今の彼はどう見ても獣のようだ。

狙った獲物は逃がさない、眼光の鋭い獣。

「神田有希」

茜はビクンと跳ねた。なぜそんなにも反応したのか自分でもわからないが、そんな茜に対してゲルグは愛しそうに微笑んだ。

「彼とは懇意にしているようだね。なんと言ったって血の盟約まで結んだ仲だ。あれはヴァンパイアに古くから伝わる一種の呪術と聞いたよ。だが、ハイリスク・ハイリターンだから今では誰もやらない。昨今ではよほど信頼し合っている者たちなのだという意味で、互いのことを婚約者（フィアンセ）と呼ぶ、と」

「フィアンセ…？」

「大事なもの、かけがえの無いものという意味も含まれているそうだけどね。まあ、誰が言い始めたのかもわからないが」

「大事な者、なんかじゃないもん」

茜はうつむいた。夜になって太陽に熱された空気の温度は下がったものの、生ぬるくなった風が彼女の髪を撫でていく。髪からはいつもの自分のとは違う、神田家のシャンプーの匂いがした。

同時に、有希の声が耳の奥に蘇る。
―――常夜の国に行こうと思うんだ―――
「全然そんな、素敵な関係じゃない。神田君は常夜の国に行っちゃうから、化け物の国だから、私はこっちに残れって。私は、もういらないんだ」
拗ねた子供のようになった茜にゲルグは小首をかしげて見せたが、下を向いていた彼女は見ていなかった。
「盟約を結んでいるのに？それがある限り、長い間離れ離れになることは到底不可能だと思うが？」
「知らない」
投げやりに答えた。本当に知らないのだからそれ以上に答えようが無い。もし心の中が読むことが出来て、あのときの有希の気持ちも知ることが出来たのならまた話は変わってくるのだが。
そのとき、ゲルグは思い出したように「そういえば」と声を上げた。声音につられて茜は彼を見る。
「知っているかな？盟約を解除する方法があるということを」
「ウソ」
解除は出来ない、そうシャリアンが言っていたことを茜は忘れてはいなかった。にわかに信じ難い言葉だが、もしそれが本当なら知っておきたいと思った。
有希は盟約をしているから茜と長く離れることは出来ない。それで常夜の国に行くかどうかを悩んでいたことは聞いた。だからもし本当に彼の言葉が真実で、もし本当に方法があるとすれば、有希はもっと自由にしがらみを感じることなく行動できるはずだ。
茜がそのお荷物になることなく。
「どちらかが死ねばいい」
「……え？」
思わず聞き返した。
期待していたのに裏切られた気分に似ていた。ぽかんとしている茜にゲルグはもう一度言う。

「どちらか死ねば無効になる。まあ冷静に考えればそうだろうね、ヴァンパイアが死ねば餌は餌である必要がなくなり、餌が死ねばヴァンパイアはそれ以外の者を餌とするしかないのだから」
だから君が死ねばいい。
そう聞こえた。ゲルグにとっては何気ない一言かもしれない。けれど茜にとっては絶望の淵に突き落とされるよりも絶望的な一言だった。
ここでもいらないんだね。
邪魔なんだね。
私がいなければ、神田君はもっと自由に動けるんだね。
私、必要ないんだね。
「そ、かぁ……わたし」
泣きそう。
まばたきをしたら溢れてしまいそうだった。だから咄嗟に下を向いて、必死に目を開く。けれど重力に耐えられなくなった涙が、一粒ぽつりとコンクリートに落ちた。
「宮野！！」
は、と弾かれたように茜は顔を上げた。呼んだのは紛れも無く有希で、何も無い空中からまるで幕をくぐって出てきたように突如現れた彼は、数メートル離れたところに着地した。
左肩をかばって立つと、キッとゲルグをにらみつける。
「宮野から離れろ！」
「やあ、初めまして。私の名前はゲルギリウスだ。ゲルグと呼んでくれ。以後お見知りおきを」
ゲルグは優雅に英国式のお辞儀をした。穏やかに微笑んでいる彼をしばしにらみつけていた有希は、彼に対して問い詰めたいこともたくさん思い浮かんだ。が、今はひとまず茜をこちらに避難させる方が先だ。
「宮野、こっちに来い」
「来ないで」

ゲルグを警戒しながらも手を差し伸べて歩み寄った彼を止めたのは茜本人だった。弱々しい声だったのにすくんでしまったように思わず立ち止まってしまったのは、茜が泣いていることに気付いたからだった。

「ごめんね、神田君、……私、知らない間に足枷になってたんだね」

「何の、話だ」

不安が胸をよぎる中、やっと絞り出した言葉がそれだった。

ごめんね、と茜がまた小さく言い、両手で顔を覆った。

私がいなくなれば、それで全部終わる。

楽になる。苦しくなくなる。

それなのに、こんなにも哀しい。

離れることが、こんなにも辛い。

大事になってたんだ。

あのとき私が私とした約束。大事な人は作らないという約束を、あっけなく壊してしまった人。

愛しさをくれた人。

離れることがとても辛い。けど、側にいて必要とされない方がもっと辛い。

「ごめんね」

「まっ…、宮野ぉ――――っ！！」

手を伸ばした有希の叫び声が暗い空にこだました。

そばにいて１２

両手で顔を覆って静かに泣いていた彼女は、ふと顔を上げた。
ぼろぼろと涙を流して、儚く、今にも崩れそうな微笑みを浮かべて。
「ごめんね」
何が？
彼女は手すりから離れるように足を引いた。後ろに余裕は約１メートル。あと二歩でも下がれば確実に踏み外す。
何がごめんなんだ。
わからない。否、わかっている。
この先に彼女が起こす行動はわかっている。
待ってくれよ。
そんな幸せそうに笑いながら行かないでくれ。
待てよ。頼むから。動け身体。
動け……動け動け動けっ！！
「ま……」
待て、と言おうとしたのに、あえぐようなわずかな声しか漏れなかった。しかし声が出たことでまず腕が動きを取り戻し、必死に手を伸ばした。
微笑む彼女に向かって。
また一歩下がった彼女の身体が、ふわりと羽根のようにゆっくり後ろに傾く。
「宮野ぉ――――っ！！」
手は到底届かないと理解していた。声でも助けられないことは理解していた。それでも叫ばずにはいられなかった。
ダンッ！と強くコンクリートを蹴る。またたきより早く移動して手すりを飛び越えると、ゲルグの横をすり抜け外壁を蹴った。
外壁を蹴って加速したことと有希の方が体重があったことも手伝

って、先に落下した茜に追いついた。
指先に触れる。手を掴む。
４階建ての校舎は落ちたらあっという間に地面だ。態勢を立て直す時間もなく、迫った地面を目前にして、咄嗟に身体を捻り自分が下になって抱きかかえた。
一瞬、音が消えた。
身体がばらばらになったんじゃないかというぐらいの痛みが駆け抜けて、次にラジオのチューナーを合わせるみたいに音がぶれた。
「――――？」
何かが聞こえた。次第に音のぶれは少なくなり、頭のすぐ近くまで誰かが歩み寄ってきた気配も感じ取ることが出来た。
「意識はあるようだな」
その声に目を開けようとしたが、まぶたが鉛で出来ているかのように重く、開けるのに苦労した。いざ開けても視界いっぱいに砂嵐が広がって、満足に見ることがかなわない。
身体を起こそうとしても指先がぴくりとしか動かず、自由にならない苛立たしさが有希を襲った。
そのとき、あきれたような声が降ってきた。
「無茶をする」
「てめ……」
「動かない方がいい。人間よりはよほど頑丈とはいえ、ヴァンパイアは魔物の中では脆い方だからな」
ふふ、と小さく笑ったゲルグを、視界がクリアになった有希はやっとにらむことが出来た。ただ、めまいがして視点が一点に定まらない。
「ふ、ざけ……な。てめぇ…宮野に、なに、しやが…った…」
「何もしていないさ。ただ血の盟約を解除する方法を教えただけだ。それを知った上で今回の行動を取ったのは彼女の意思だよ。決してそそのかしたり無理強いしたわけじゃない。勘違いしないでいただきたい。それに君の方が心当たりがあるんじゃないか？」

ゲルグは一歩下がる。靴が砂利を踏みしめた音がした。
「だが、気に入った。まさかこんな行動に出るとは思わなかったからね。いい意味で期待を裏切られたよ。君は君で、随分といれこんでいるようだしね。さて、面白いものも見れたことだし、私はそろそろ戻るとしようか」
「ま、て……っ！」
有希は手を伸ばそうとした。しかし、動かそうという意思に反して指がわずかに動いただけで終わり、彼の姿は視界から消えてしまった。
「では、さようなら。若いヴァンパイア」
ザッと衣擦れの音がしたと思ったら、その姿は一瞬で消えてしまっていた。
追いかけなければ、そう思うのだが身体は全く反応してくれなかった。それに少しでも起き上がろうとすれば全身を針で刺されるような痛みが駆け抜ける。視界に映った夜空と校舎が歪み、目を開けているのも疲れるのでゆるゆると閉じた。
仕方ない。あの高さから人一人抱えて落っこちたのだ。ヴァンパイアでなければこれぐらいの怪我では済まなかった。
茜は無事なのだろうか。
「……や、の…みやの、起きろ……宮野」
「———う、ん…」
うめいた茜が身じろいだ。のろのろと頭を上げてまぶしそうにまたたいた。下敷きにしている人をよくよく見る。
「かんだくん？」
茜は頭を振って起き上がる。夢から覚めたばかりのようなぼんやりとした顔をしていたが、自分がどういう状況だったのかを思い出したようだった。
力なく横たわった有希の顔色が紙のように真っ白だったことで泣きそうに顔をゆがめた。
「や、やだ…やだよ、神田君起きてよ……そんなのやだよ」

茜は彼の頭の横に手を付くと呼びかける。
どうしてこんなことになってるんだろう。
どうして私じゃなくて、神田君がこんなことになってるんだろう。
突きつけられた現実を振り払いたくて首を振った。溢れた涙が落ちて弾けてぽつ、と音を立てる。
「やだよぉ…っ！死んじゃやだぁっ！！」
「勝手に殺すな」
「へ？」
思わずきょとんとした。かすれた声で答えた有希は大儀そうに目を開く。
「勝手に、殺すな」
茜はきょとん顔のまま何秒か固まったが、次の瞬間ぶわっと涙が溢れた。それがきっかけになって硬直が解けたのか、思い切り有希に抱きついた。
「よ、よか……っうぅ、よかったよぉっ」
「っい、いて…っ」
あまりにぎゅうっと抱き締められたので傷が痛んで顔をしかめた。茜の方はというと声など耳に入っていないのか、変わらず抱き締めたまま嗚咽を上げている。
抱き返してやりたかった。生きている、大丈夫だと安心させてやりたかった。けれど手は動かない。身体も動かない。
……もどかしい。
自分がこうなった代わりに茜が無事でよかったと思った。のだが、ほっとしたのと同時に怒りも込み上げてきた。
手が届かなかったら茜は確実に死んでいた。
ぷつ、と有希の中で何かがキレた。
「――――っこの、馬鹿っ！！」
力の限り怒鳴ると、有希の口と茜の耳が近かったこともあり、彼女は驚いて１０センチぐらいは飛び上がった。さっきは嬉し泣きだったが、今度は怒鳴られて驚いたことで涙が浮かぶ。

情けない顔で上体を起こした茜をにらみつける。視線だけで射殺せそうだ。
「何でこんな危ないことした！死ぬ気か？！あいつに何言われた？！」
迫力に押されたこととさっきの出来事を思い出したことで、しなしなと塩を振りかけられた青菜のようになった。
「盟約を、解除する方法が…あるって……」
「それで？」
苛ついた口調で促した。茜は何度か口を開いたり閉じたりして言葉に詰まっている様子だったが、もう一度怒鳴られる覚悟を決めた。
「片方がいなくなれば無効になるって」
「馬鹿！！」
怒鳴られて茜はすくみ上がった。閻魔様とか魔王とかが怒ったときより怖いんじゃないかというほど、茜にとって今の有希は恐ろしい。
有希はというと今の状態では怒鳴るなんて無茶なことなので、苦しくなって呼吸が上がった。
「っ馬鹿すぎて……あきれて、死にそうだから、とりあえず血を寄越せ。のど…渇いた」
「うぁっハイ」
「動けないからもっと寄って」
「うわぁっハイぃ」
言われるままに近づけた茜の首に噛み付いた。

そばにいて13

血を流しすぎたらしく喉が渇いてどうしようもない。がっつきたい気持ちを押さえながら少しずつ喉へ流し込んだつもりだったのだが、思っていたより強く牙を立てていたようだ。茜が息を詰まらせたことでそれと気がつく。

首は皮膚が薄い分痛みにも敏感だ。ちょっと悪いことしたかな、でも本当に死にそうだったし、と自分に言い訳する。

そこでやっと四肢が動くようになった。片腕は茜の背中に回して、もう一方は顔をくすぐっていた彼女の柔らかい髪を掻き揚げる。反応した茜の肩が跳ねた。

本当に無事だったんだ。

腕に抱くことでやっとその存在を確かめることが出来て、心の底から安堵した。ほっと安堵して唇から漏れた吐息が茜の首筋を撫で、居心地が悪そうに身じろぎする。

「……ま、だ？」

「まだ」

有希は短く答える。盟約をしているので少量でも劇的に回復するのだが、なぜか左肩だけ痛んで思い出した。ペーパーナイフが刺さったままだ。一旦抜くために唇を離すと、茜は慌てて起き上がろうとするので両腕を背中に回す。

「逃げるな。まだだ」

「うぅっ」

「うめくなせいぜい反省しろ」

「こ、この状態で…？」

小さく呟いた茜を捕獲した状態で右手でペーパーナイフを抜いた。掲げて見ると凝った細工の一級品だということがわかり、長く使われているのか所々が燻したように曇っている。そこでどうしてペーパーナイフごときで痺れたのか合点が行った。

銀だ。中身はどうあれ外側に銀メッキを施してあれば、致命傷とはいかないまでも手傷ぐらいは負わせることが可能だろう。握っていた手にも火傷の跡のようなものが残った。
悪魔が姿を見せたときに投げ返してやればよかった、そうしたら軽い火傷ぐらい負わせることが出来たのにと後悔する。思い返すとやられっぱなしだったので腹が立った。
やけくそで首筋に吸い付く。傷が治るほど飲んで満足すると、最後に牙の跡を舐めて治癒し、溢れた血を舌でなぞった。
「あ…っ」
舌が肌を撫でる感触に思わず声が漏れた茜の方に視線だけ動かした。
「あ？」
「なんっ、でも、ない…です。ねえ、もう終わった…よね？」
だから早く離して？と言葉の裏で催促している茜を手放すことが惜しくなってきた。よくよく考えればかなりおいしい態勢だ。どうやら血を貰っているときはヴァンパイアとしての本能が出るため、酷い言い方だが“餌”としか見えないようなのだ。
けれど今は下心よりも無事だったことを純粋に噛み締めたかった。
「話が終わってない」
「や、だって、これで話続けるの？やだよ…う、腕が限界だよ」
身体を支えていた腕が耐え切れずに震え始める。首はなるべく口の近くに、けれど身体は触れない程度に屈めているのは限界だったようで、引き寄せると簡単に倒れ込んだ。
「離して」
慌てふためいていた茜も逃げられないと知り、そのうち大人しく腕の中に収まる。有希は耳の後ろの髪に鼻をうずめた。
「生きてて、良かった」
短い、しかし重い一言に茜はまぶしそうに目を細める。
「神田君は、どうして私に優しくしてくれるの？私から血を貰わなきゃいけないから？なるべく好かれなきゃって？」

「いや……そういう不純な動機じゃない、と思う。自分でもよくわかんないけど、何か危なっかしくて放って置けない」
たまに、目を離した隙に消えてしまうのではないかと思わせるほど存在が危ういときがある。
くす、と茜は小さく苦笑した。
「私、私ずっと“いらない”って言われてきたの」
祖母や叔母、親戚中全員に。幼くとも、否、幼いからこそ子供というものは親や周りの雰囲気に敏感だ。わざわざ言葉で聞かなくてもわかることだった。むしろ言葉でぶつけられずに態度や行動で“いらない”と言われる方が辛かった。
「神田君はね、他人で初めて私を必要としてくれた人」
転校の多かった小学生、中学生時代に親しい友達は出来なかった。あえて作ろうとも思わなかったことも友達のいない要因だった。
別にいい。いない方がいい。きっとまた、別れたときに痛いだろうから。
なくしたときに痛いだろうから。
「おじさんとおばさんは別。多分きっと、最初は私が可哀相で引き取ったんだと思うから」
宮野夫妻は茜が必要だから引き取ったのではない。茜はそこまで自惚れてはいないし、冷静に考えればわかることだった。
多分、最初は哀れみからだった。
生活を共にするうちに宮野夫妻にとって茜は大切な存在になっていったけれど。
「神田君と盟約しちゃったってわかったとき……困ったけど、正直嬉しかった」
ああ、必要としてもらえた。
それが例え事故でも、手違いでも、巻き込まれたという形だとしても。
「でも、神田君は私を置いて常夜の国に行くって言って」
今度こそ必要としてもらえて、傍にいられると思ったのに。

置いていかれるのが悲しくて。
「盟約を解除するには死ぬしかないって言われて」
必要としてもらえたと喜んだ自分。
馬鹿みたいだ。それが、彼の足枷になっていることにも気付かずに。
「じゃあ私が死んじゃえば神田君はどこにだって行けるって思って」
でも離れるのが哀しくて。
辛くて、失くすのと同じくらい辛くて。
「もういい」
低い声が割って入った。次いで背中に回った手が、ぽんぽんとあやすように軽く叩く。
「もう、いいよ。ごめんな、俺がそんなこと言ったからなんて、全然気付かなかった」
君の方が心当たりがあるんじゃないか？そう言ったゲルグの言葉は合っていた。あの見下すような態度を思い出して、いけ好かないヤロー、と心の中で呟く。
「でも俺が必要とする前に、おじさんとおばさんは宮野を大事にしてたじゃないか」
「それは……わかってるけど」
「わかってない。もしこれで宮野が死んでたら、おじさんとおばさんはきっと泣いてた。俺も、きっと泣いてた」
まだぬくもりの残る身体をその腕に抱いて泣いていたかもしれない。
「生きてて良かった」
そう言って耳たぶに唇を寄せる。触れた一瞬だけ身体を固くした茜の頬を撫でると、こちらを向いた。
ふとすると、吐息が混じりそうな距離。
ぱっと頬を赤く染めて上体を少し引いた茜の頬を、有希は両手で挟む。茜は居心地が悪そうに視線を泳がせて何度かまたたいた。
「そばに、いろよ」

まばたきが止まる。逸らしていた視線が有希を捉える。
「俺はこれからも宮野が必要だ。それは盟約をしたからとかじゃない。宮野に傍にいて欲しいから、だから、そばにいろ」
「……でも」
茜の瞳がみるみる潤み、今にも涙が零れ落ちそうになった。泣くまいと必死にまばたきを我慢する。それでも一粒ぽつりと落ちた。
「でも、大事になったら、死んじゃったときに悲しいもん」
手放したときに哀しい。
離れたときに哀しい。
失ったときに哀しい。
「宮野より先に死なない」
有希は微笑んだ。
「宮野が生きてれば、俺は死なない。だから俺は宮野より先に死なない。約束する」
茜は言葉に詰まった。言葉で言い表せない代わりに涙がぼろぼろ溢れる。
こぼれた涙が有希の頬も濡らした。
「神田君」
「うん」
穏やかに微笑んでいる彼を、ぎゅっと強く抱き締めた。ちょっと苦しい、と苦笑いしてから有希はおかしそうに言う。
「や～それにしても、俺、ヴァンパイアで良かったって思ったの初めてだ。頑丈だし、怪我もすぐ治るし、宮野とも逢えたし」
「うぅ」
「……一応、感動的な話をしてるんだけど、聞いてる？」
何度も頷いた茜に「そお？」と少し疑わしげに答える。
もしヴァンパイアに転化せずに、盟約もしなかったら茜とはすれ違ったままだった。
でも逢えた。巡り会えた。
宿命や運命って意外と悪いもんじゃない。

だから、何があってもこの運命を切り開いて行く。

そばにいて１３（後書き）

つづかない。
続くじゃないんだ?!とか、アレソレいろいろこの先どうなるの?!とか、ツッコミどころが満載だと思われますが、ひとまず終了致します。
この先…、書いてないので……。
また機会があれば続きでも書いていけたらと思っております。
読んでいただき、ありがとうございました。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5280t/

ヴァンパイア・キス

2011年6月15日19時25分発行